

博士論文

中国人若年層の社会移動とネットワークの研究  
—趣味による紐帯の形成を中心に—

平成 25 年 4 月

同志社大学大学院 社会学研究科

社会学専攻 博士後期課程

巴 芳

## 【目次】

序言	1
第一章 中国社会における中流階層の拡大と社会ネットワークの変化	3
1-1 中国社会における中流階層の「高学歴」「若年」「富裕」化	3
1-2 在日中国人社会における東北地方出身者の増加とその若さ	4
1-3 血縁・地縁から友人ネットワークへ	5
1-4 小括	6
第二章 欧米ネットワーク理論の導入	9
2-1 社会ネットワーク論	9
2-1-1 グローバル化社会におけるコミュニティ	10
2-1-2 家族ネットワークの多様性	13
2-1-3 ネットワークの弱い紐帯	15
2-2 社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）	18
2-2-1 社会関係資本論の定義と実証	18
2-2-2 社会関係資本の理論的な枠組	18
2-2-3 個人が持つ関係資本	20
2-3 小括	22
第三章 中国における階層移動とネットワークの研究	25
3-1 中国社会におけるネットワーク研究の進展	25
3-1-1 中国社会における家族ネットワーク	25
3-1-2 中国社会における社会ネットワークと企業の関連	27
3-1-3 現代中国における地域社会のネットワーク	29
3-2 社会ネットワーク研究の新たな可能性—友人ネットワークへ	31
3-2-1 友人ネットワークへの注目	32
3-2-2 階層論的な研究とその限界	33
3-2-3 趣味ネットワークの可能性	34
3-3 中国本土社会ネットワークの転換	35
3-4 小括	35
第四章 CGSS による友人ネットワークへの注目	37
4-1 CGSS の概要	37
4-2 中国における学歴社会化と中流階層の拡大	37
4-3 職場での付き合いと重視する関係	41
4-4 パーソナルネットワークにおける友人関係	41
4-5 小括	45
第五章 瀋陽における趣味ネットワーク	46
5-1 調査の背景と概要	46
5-2 調査対象4グループの特徴	47

5-3 アンケート調査データの分析.....	48
5-3-1 調査対象の社会的背景と参加するクラブの相違.....	48
5-3-2 日常生活における友人ネットワーク.....	51
5-4 インタビュー調査の記録.....	54
5-4-1 個人インタビュー.....	54
5-4-2 グループインタビュー.....	59
5-5 社会関係資本としての趣味ネットワーク.....	60
5-5-1 中国人社会における「友人関係」の変容.....	60
5-5-2 趣味ネットワークから社会関係資本へ.....	61
5-6 小括.....	62
第六章 華僑・華人研究から現在の海外中国人研究への展開.....	65
6-1 在日中国人社会における量と質の変化.....	65
6-2 在日中国人社会における多様化と若年化.....	66
6-3 趣味活動の広がり新たなアイデンティティの形成.....	68
6-4 グローバル化社会におけるエスニック・コミュニティ.....	69
6-5 集団中心の研究から個人中心の分析へ.....	70
6-6 華僑華人研究から趣味ネットワーク研究へ.....	71
6-7 小括.....	72
第七章 サッカーチームにおける在日中国人ネットワークの調査.....	74
7-1 調査概要.....	74
7-2 考察.....	75
7-2-1 調査対象者の社会的背景.....	75
7-2-2 サッカークラブの発足とネットワークの形成.....	76
7-2-3 インタビューを通じて.....	80
7-3 「弱い紐帯」と在日中国人アイデンティティの変容.....	83
7-3-1 趣味ネットワークにおける「弱い紐帯」.....	84
7-3-2 在日中国人の若年層におけるアイデンティティ.....	84
7-4 小括.....	85
第八章 中国若年層の個人主義化と新しい信頼関係の模索.....	88
8-1 「若者たち」を見るネットワーク視点の有効性.....	88
8-2 増殖する「中流階層」における趣味ネットワークの形成.....	88
8-3 中国の「若者」における濃厚な個人主義の色彩.....	90
8-4 趣味ネットワークから新しい信頼関係の形成と情報の獲得.....	90
8-5 在日中国人社会と中国本土社会における趣味ネットワークの相違.....	93
8-6 小括.....	94
結語.....	96
参考文献・参考 URL.....	97
参考資料.....	102

# 博士學位論文要旨

論文題目： 中国人若年層の社会移動とネットワークの研究  
—趣味による紐帯の形成を中心に—

氏名： 巴 芳

要旨：

最近の中国人社会においては、経済発展につれ、中流階層が拡大している。中流階層の中心にいる若年・富裕層の人々が、余暇生活の質に対する欲求を高め、強い自己実現と自由志向をもって、余暇生活空間を計画・案出し、スポーツ・芸術・文化的な趣味活動を行い、それが彼らの日常生活の重要な内容となっている。さらに、趣味活動の場において、新たな友人ネットワークが形成されつつあり、その階層移動における重要性も増している。

本研究では、現在の中国本土社会および在日中国人社会においても、趣味活動から形成される社会ネットワークが彼らの仲間意識を強化し、新たな友人関係を形成していることを示す。また、特に友人ネットワークの一形態として趣味ネットワークに注目する。そして、彼らが、趣味ネットワークを介して、多様な社会生活情報と、新たな社会関係資本を獲得し、いかに階層上の地位を保持・展開し、豊かな生活を暮らしているかを検討していく。

第一章では、中国社会における若者を中心とする中流階層の拡大と社会ネットワークの変化について、本研究の背景を述べておく。

中国における経済政策により、“小康水平”に達する中流階層が増加し、都市化が進むと同時に、経済的格差をとまなう流動性が高い社会になりつつある。具体的には、社会現象として、あらゆる手段に訴えた私的営業活動の隆盛、その結果としての無定形の「豊かさ」の顕現、都市化が進むと同時に、高学歴で若い富裕層の人々が中流階層の中心を形成し、彼らが友人のあいだで暮らしている。一方、在日中国人社会の場合、中国本土社会の経済発展の影響を受け、来日している中国人たちが、従来の華僑・華人中心の社会から多様な変化を引き起こし、さらに日本の各都市に分散し、長期滞在の在住者が増えてきた状況を示す。

第二章では、欧米社会学からの理論と方法論を導入しながら、中国においても社会ネットワークの理論および方法論が発達し洗練されてきたことを検討し、そして現在、新しい理論展開を導く重要概念として大きな注目を集めるにいたった議論の展開をレビューする。

中国における社会学の「本土化」には長い歴史的な基盤があり、20世紀前半より、西欧の社会学理論およびイギリスやアメリカにおいて発達した調査方法を用いて、当時の中国社会の様子を描きだしてきたが、ここでは特に、欧米における社会ネットワークと社会関係資本の理論について、検討しながらまとめいく。そして、本研究が主要な研究対象とする「趣味ネットワーク」は、家族や地域社会におけるプライベートな親密性が、公共的な社交性に置き換えられて生じる上で重要な役割を果たしてきたことを論じる。

第三章では、中国社会学における社会ネットワーク研究の展開について、様々な視点から整理検討する。今までの中国の社会ネットワーク研究を振り返ってみて分かることは、かつては集団的なものにとらえられていたネットワークが、個人的なものとしてとらえられるようになってきた流れが存在していることである。伝統的な社会関係に注目してきた中国の社会ネットワーク研究であるが、改革開放以降の社会変動をふまえ、現在では新たな段階に入りつつある。特に、若者を中心する中流階層において、文化的ネットワークや友人ネットワークから生まれている新たな関係は、彼らの生活にアプローチする際に重要な論点のひとつとされている。そこで、中国の社会ネットワーク研究の大きな方向性をおさえつつその知見をまとめ、さらに今後の研究のいくつかの指針を見出すことがねらいである。

第四章では、中国人民大学によるCGSS（中国総合社会調査）の調査データの再分析を通して、中流階層に多く属するにいたった中国の若者たちが高学歴であり、個人的な友人関係を重要視し、その友人ネットワークが様々な形で広がっていくことを検証していく。CGSS(2003;2005;2006)のデータを用いて、「年齢」「最終学歴」「階層帰属意識」などを主要な変数として、教育状況・階層分布・収入・居住形態・余暇生活などについて分析する。そして、職場ネットワーク・日常生活ネットワーク・相談ネットワーク・拜年ネットワークなどにおいて、友人関係の重要性に注目する。その結果、中国の経済発展につれ、多くの人の余暇生活が豊かになり、かつての集団的な結合が個人的なものとしてとらえられるようになり、特に中流階層に属している若年層の間に、友人ネットワークの広がりという大きな流れのあることが明らかになった。彼らは、伝統的な親族や職場の付き合いより、個人レベルでの緩やかな友人関係を求め、重要視している。そして、相談・拜年ネットワークの分析結果から、家族とならんで友人が重要な関係として挙げられ、しかも友人の割合が増加傾向にあることが明らかになった。さらに新たな可能性をもつものとして趣味を通じた関係が増えつつあることを示す。

第五章では、筆者がおこなった瀋陽での事例調査から、趣味ネットワークの分析を進める。市民生活も豊かになり、人々が余暇時間を重視するようになる中で、仕事あるいは学習以外の、趣味のためのクラブやサークルに参加する人が急速に増えてきた。瀋陽のような現代の中国都市部では、余暇生活の中に、趣味ということが主な時間として使われ、市民が自発的につくるクラブ・サークルなどがたくさん生まれている。2010年6月から筆者は瀋陽市における4つの趣味ネットワークでフィールドワークをおこなった。350人を

対象者としてアンケート調査を実施（回収率 94%、329 人が回答）分析し、参与観察および個人・グループインタビューの結果も合わせて、趣味ネットワークの社会関係資本としての特質を明らかにする。

第六章では、日本における華僑・華人研究は、近年、専門書や啓蒙書の刊行も増え、若い研究者も年々増加しているため、それらの調査や研究を紹介した上で、在日中国人社会研究における変化を検討する。

そこで注目するのは、華僑・華人研究においても、在日社会を集团的なものから個人的なものとしてとらえるようになってきたということである。時代が進むにつれてその同胞集団・団体としての機能は縮小し、現在では個人的なネットワークを生み出す基盤としての機能をもつにいたっている。さらに、社会ネットワーク研究の影響を受け、社会関係資本に対しても、集団でなく個人の視点からとらえる研究も出てきている。また、集団ベースの硬いものではなく、緩やかな個人ベースの社会関係資本のほうが個人に与える影響は大きくなりつつある。現在のところ、このような趣味ネットワークに関する研究はまだ少数であるが、萌芽的研究は現れつつある。

第七章では、大阪におけるサッカークラブの事例を取り上げる。まずクラブの全体像を把握するためにアンケート調査を実施し、次にネットワーク分析の方法を用いてクラブがどのように形成され、その中の人間関係が変わっていったかを解明する。そして、在日中国人若者たちのエスニック・アイデンティティの変化について、インタビュー調査データを検討していく。事例分析から、在日中国人の若者たちは、職場・学校などで円滑な友人関係を保とうとするが、同時に、他とつながることで個人の様々な能力を発揮する場が提供され、誰でも主役になれる世界を実現したいとも考えている。友人ネットワークは、楽観的にいえば、多様で豊かな在日中国人社会である。個人的な生活の楽しさを楽しむ一方でプライバシーを重視し、伝統的な付き合いから解放されるので、そこでの緩やかな友人との信頼関係が在日中国人の若者たちにとって大切な関係になっている。

第八章では、本研究の分析結果をまとめる。中国本土における事例研究や、在日中国人のサッカークラブの調査から、趣味ネットワークを作り出し参加するのは、まず趣味のためではあるが、その上、生活・仕事・勉強などにプラスとなるネットワークを広げて作りだすための目的も存在することが明らかにされた。以前の中国人社会ネットワークの強い結びつきと比べると、現在新しく形成されている若者ネットワークの連結は弱く見えるが、その幅は広がっている。他方、趣味活動に参加しつつ、弱い紐帯から強い紐帯になっていく側面もみられる。しかし、全体的にはその幅の広がりとともに入手する情報もますます多様になり、社会関係資本の形成も緩やかな形になっている。それを、中国本土社会と比較すると、在日中国人社会のほうが、趣味ネットワークの重要性が明らかに高いと思われる。趣味ネットワークを社会移動の機会とし、ビジネス構造と活動を大きく変えたとともに日常生活にも多大な影響も与えてきた。つまり、欲しい情報を得るために個人ベースの友人ネットワークを作ることによって、コミュニケーションできる環境を実現するネット

ワーク内のコネクティビティを高めている。しかし、中国人本土社会においても、友人ネットワークは都市の生活を充実させるものが数多く出現し、信頼に与える構造的効果が生み出されている。

最後に、近年の若者たちの新しい動きや変化は、旧来の研究にいかなる問題を提起し、現在、最先端の研究はいかなる方向に展開しつつあるか、多様でネットワーク的な中国社会を対象とする研究の相対化という課題に向けて、中国と日本という地域を如何に位置づけるかを考え、そこから中国人研究や海外（日本）における中国人研究を問いたい。

## 序 言

1978 年から始まった改革開放政策によって、中国経済は著しい成長を遂げてきた。それにつれ、産業構造が変化し、都市化が進み、農村社会にも変化をもたらした。膨大な人口の都市流入は、地域移動であると同時に、職業移動すなわち階層移動を引き起こした。

改革開放の「先富起来」政策の下で、90年代には沿海部で民営企業の台頭が進んだ。それに伴い、市場経済の導入、国営企業の民営化や不採算企業の閉鎖、人民公社の廃止と請負制の実施、外資導入など、経済政策の方針変換による国有企業や政府機関のリストラが盛んになり、大量の人々が「国有」や「政府」の枠外に移ることになった。改革開放による経済活性化が原動力となり、私営企業が増え、人々の労働意欲を高めた結果、計画経済で抑えられてきたものの自由化が加速され、より良い生活を送る機会が拡大してきた。経済改革政策は、中国の経済効率を高め、その構造を調整し、市場の需要によって調節できる経済へと変貌させた。「先富起来」で、内陸部より沿海地域の人達を先に富ませた結果、彼らは「中流階層」に足を踏み入れ、裕福になる道を進んでいる。

こうした急速な市場経済化の恩恵をもっとも受けたのは、現在20代後半から40代位までの若年層が中心で、文化大革命（1966～1976年）の影響を受けなかった世代とされる。改革開放後、大学の数が増加することで、高等教育を受けやすくなり、外資系企業のホワイトカラーや私営企業での高級管理職、あるいは中央・地方の幹部公務員、専門職となった人々は、強い上昇志向をもち、仕事を通じてより高い地位と収入を求めて、富裕層を形成してきた。その結果、収入が高い若年・富裕層が「消費世帯（中流階層）」として増加している。一方、中流階層の中でも特に若年富裕層の人たちの影響によって、都市部ですでに消費構造に変化が起きている。所得の増加で生活の質が向上し、生活水準が急速に改善したことによって、伝統的な社会ネットワークや社会関係も大きく変化してきた。

また、注目すべきは、改革開放以後、中国人が海外へ移住する現象が多くなったことである。近隣の日本に滞在する中国人も80年代以後増加の一途をたどっている。中国人の海外移住の目的は、かつての家庭生活の維持から、ビジネスや投資などを主とした経済活動に変わっている。90年代になると、ハイテクや文化・教育などの専門職に就いた留学生グループから学者・専門家・科学者・エンジニアなどの優秀な人材が輩出され、さらに、その中国のハイテク専門の人材が、日本ばかりではなく、アメリカやヨーロッパなどに移住し、「頭脳の流出」という現象が起きている。

その中で、日本<sup>1</sup>、および海外において、近年急速に増加する中国東北三省出身者に関して、社会ネットワーク研究と社会関係資本研究の視点から、国際的な社会学界の流れに沿うかたちで、中国においてもさまざまな議論がなされてきた。2003年からCGSSが開始されるなど、人口移動問題が注目され広く研究されている。また、中国人社会においても中国国内および香港・台湾も含めて、農村や都市における社会ネットワークに関する



様々な研究がなされている。

最近の中国人社会，特に若年富裕層において余暇生活の質に対する要求水準が高まり，自己実現と自由志向を強く持つ彼らが余暇生活空間を計画・案出し，社会発展の中でスポーツ・芸術・文化的な趣味活動に積極的に参加し，彼らの日常生活の重要な部分となっている。さらに，趣味活動の場において，新たな友人ネットワークが形成されつつあり，その社会移動の機会を得る上での重要性も認識されてきている。

本研究では，現在の中国人若年層が，中国国内および在日中国人社会において，趣味活動から形成される社会ネットワークによって彼らの仲間意識を強化し，新たな社会関係を形成していることを示しながら，特に友人ネットワークの一形態として趣味ネットワークに注目していきたい。

## 序言 注

1) 田嶋（2007）および，山下清海（2009）においても，在日中国東北出身者の増加が強調されている。

## 第一章 中国社会における中流階層の拡大と社会ネットワークの変化

中国政府による経済政策により、“小康水平”に達する中流階層が増加し、都市化が進むと同時に、経済格差の拡大をともなう流動性の高い社会になりつつある。改革開放プログラムの採用以来、経済発展にともなう現代中国社会の変化は誰の眼にも著しい。具体的に観察される社会現象として、様々な手段をもちいた私的営業活動が隆盛し、その結果としての無定形の「豊かさ」が顕現し、高学歴の若い富裕層の人々が中流階層の中心となり、都市化が進むと同時に、彼らは友人との関係を中心に暮らしている。

### 1-1 中国社会における中流階層の「高学歴」「若年」「富裕」化

近年、中国社会において中流階層がますます広がり、その中でも、若者たちは、主として頭脳労働に従事し、相対的に高い賃金を得て生活している。勤務条件が整った職業に就ける能力、ないし相応の消費水準を維持できる能力を保持しており、水準以上の余暇時間を過ごし、仕事においても一定の権限を与えられている。彼らは、学歴が高く、教養を身につけることにも意欲的である。

また、2012年11月にボストン・コンサルティング・グループ (BCG) が発表した最新の研究報告「中国新世代の消費推進力」によると、中国の中流階層と富裕層の数は向こう10年で1億5000万人から4億人以上に増加し、都市化の進展により、うち70%以上が小都市の住民となる見通しである(新華網 2012)。報告で定義されている中流階層と富裕層は、月収が5000元以上の消費者を指す。経済的な変化によって引き起こされる都市化が中国社会で急速に進んでおり、地域間の人口流動によって社会団体も増加し、2007年には全国の民間組織が約38.7万団体、その中で社会団体は約21.1万団体に達している。

そして、都市化と社会団体の増加は中国における社会ネットワークに大きな変化をもたらしつつある。陸学芸(2002:108-119)さらには中国のマスメディアによると、2000年以後、長期的な中国の経済発展につれ、都市化が進む現代の中国社会において、中流階層が徐々に拡大し、階層も多様化してきている。都市に住む人々、特に若者たちがもつ社会ネットワークは、もはや農村におけるそれとは大きく異なったものとなっている。それに加えて階層関係の複雑さも存在し、強い紐帯で結ばれた伝統的なネットワークから弱い紐帯で結ばれた友人ネットワークへと中心が変化し、今までに見られなかった新たな文化的なネットワークも生じてきている。

改革開放以降の中国の社会変動についても、階層研究を始め多くの研究成果が蓄積されてきたが、社会の変動に伴う若者の意識の変化についての研究としては、単(1994:34-36)が青年たちの意識を「問題視」する立場を取っている。「青年たちは、人生の目標に対して戸惑い、理想主義的な追求に欠けており、また社会的責任感と社会服務精神に欠けていて、政治意識も薄い。逆に、実用主義、個人主義、拝金主義、享楽主義は、青年たちに強い魅力をもっており、一部分の青年にとっての最高の価値目標になっている」という。

文化大革命後、当時の「青年」<sup>1</sup>による大規模な造反運動に対して、批判的なまなざしを向けるのが70年代以降に生まれた世代である。結果としてメインカルチャーからの逃避と、個人的な欲望の解放が生じた。陳(2007:50-65)は、ヨーロッパや日本で成立した、若者よって形成されたサブグループが、清朝までの中国社会には出現しなかったという。もちろん若者を中心としたグループは形成されていたものの、農村・都市に関係なく、そのトップはあくまで一族の族長や地域の有力者(郷紳)であった。農村だけでなく、都市でも若者グループが形成されなかったのは、清政府が若者によるグループの形成を厳しく制限していた、という事情もある。それは逆に「個人」の価値を犠牲にすることになる。社会からの肯定の代償として、「個人」は社会や国家のための個人であり、あくまで政治的な意味を付与された「青年」の担い手としての個人となってしまう。

都市化が進んでいる中国現代社会の中、若者たちは中国社会をうつす鏡ではないだろうか。80年代の若者による「参軍ブーム」「政治ブーム」がやや様変わりして、現在の若者の間では、「消費ブーム」「遊びブーム」が広がっている。ファッションにめざとくなり、個人生活の質を高めることに大きな関心が寄せられている。彼らは生き方が多元化し多方向を目指すようになってきているが、その理由として、市場経済の発展や外来文化の流入が挙げられている。そして、新しいネットワークを若者の社会生活に即して主題化するのなら、趣味活動はその重要な一部をなすはずである。

趣味縁が探求にあたいするものであると考えるのは、それが現にあり、若者によって楽しまれているという事実があるからだ。社会参加にしろ、公共性にしろ、そこへの通路はゼロから立ち上げられるものというよりは、すでにあるものの中に見いだされるべきであろう(浅野 2011:3)。若者たちは、社会関係が多様となり、ネットワークの構成が変化し、範囲も広がっている。個人の生活要求が高まるなかで、友人関係を中心とした弱い紐帯のネットワークが次々と形成されている。

人口移動による海外への移住も増える中で、在日中国社会における若者たちの中でも、来日の背景や時期、意識などが多様化してきている。在日中国社会では、南方出身が多い新・老華僑/華人だけではなく、留学生、就職者、家族滞在者など多様なグループがあらわれてきた。後者はいまや在日中国人の大半を占め、若年層や中流階層に属し、合理的な考え方をもち、北・東北部出身者が多いという。

## 1-2 在日中国社会における東北地方出身者の増加とその若さ

中国社会における都市化の急速な発展に伴い、海外への移民や都市への転入といった社会移動現象が活発化している。観光、留学、ビジネスなどの人数も急速に増えてきたと伝えられている。その中で、アメリカや日本をはじめ、留学や仕事などのさまざまな目的を持つ中国人が海外に移民している。

アメリカ等の移民社会では、エスニック・グループが出身地や移民してきた時期によって分化したが、ヨーロッパ諸国では、旧植民地だった国や地域からの移民が多く、その政

治・経済的権利や生活条件は政府の政策によって大きく異なる。日本の場合、第二次世界大戦での敗戦後、1980年代まで外国人労働者の受け入れには消極的な政策を続けてきたが、半面、戦前からの在日韓国朝鮮人や華僑華人の社会について多くの研究が蓄積されてきた。

1990年から2010年の間に日本における外国人登録者数は2倍に急増し、218万人に達している。また2007年に長らく最も多かった韓国朝鮮国籍を中国籍の人口が上回り、2010年には68万人に達し、韓国朝鮮国籍者を10万人以上超えるにいたっている。中国人が、これからも増え続けるのは確実な勢いである。その背景には特別永住者の高齢化や帰化もあるが、中国からの流入が急速に増えていることが最も大きな理由である。日本国内で在留中国人が最も多いのは東京都であり、2010年12月末現在では、在日中国人164,201人が東京都に居住している。神奈川県56,059人、大阪府51,056人の順となっている。そして、年齢別でみると、多い順に、20～24歳(152,657人)、25～29歳(145,129人)、30～34歳(101,663人)、35～39歳(66,421人)の順になっている(法務省入国管理局2010)。日本に在住する中国人の増加に伴って在日中国人に関する社会調査も増えているが、その多くは東京都を中心にしたものである。しかし、東京では中国人の飽和状態がみられ、中国人たちは徐々に他の都市に分散している(田嶋 2006:222-223)。大阪府の在日中国人の数は現在でも増え続けており、新たな在日中国人のエスニシティ問題を考える上できわめて重要な拠点といえる。

在日中国人社会の主要な変化として次にあげられるのは、彼らの出身地の変化である。従来の華僑華人は中国大陸南部の広東・福建省出身者が多くを占めていたが、入国管理局の統計によれば、現在は東北3省の出身者が上位を占めており、全体の3分の1を上回っている(法務省入国管理局 2010)。田嶋淳子も、近年の中国系移民が多様化する中で、東北地方出身の若年層が急増し、日本の地域社会に活発に参加していることを指摘している(田嶋 2005:24)。

中国本土および在日中国人の社会では、若者たちの間で、血縁や地縁あるいは家族などの伝統的なネットワークが現在でも重要視されており、基本的な関係として他のネットワークを支えてきた。しかし近年、若年層のネットワークの多様化につれて、それらの重要性は減少しつつある。反対に重要性が増していると考えられているのが、友人関係など個人レベルでの弱い紐帯によって結ばれる関係である。血縁・地縁ネットワークだけでなく、友人ネットワークも重要な結節点になっていることが示唆されている。

### 1-3 血縁・地縁から友人ネットワークへ

中国は世界有数の長い歴史をもつ多民族から構成される国である。その伝統社会は非常に広い地域にわたり、時代による違いも存在するため、単一の社会として解釈するのは難しい。だが、大きな特徴をひとつ挙げるとすれば、中国では家族を基本とする独特の伝統的社会関係が形成されてきたことである。これは社会関係が比較的個人中心に考えられ

てきた西欧諸国と対照的である。

「中国は農民の国だ」という認識のもとに農村社会の研究をおこなった費孝通は、伝統的な社会関係に注目し、「差序格局」「礼俗秩序」「血縁・地縁関係」という概念を提唱した。彼はその研究の中で、血縁や地縁が中国農村社会の中で中心的紐帯を形成し、人々にとって重要な価値を持つ資源になると論じた。また、伝統的なネットワークから結ばれる社会関係は波のようにだんだん広がっていくとともに、人々の合理的行為にも影響すると指摘した（費 1985:21-29）。すなわち、中国の農村における経済発展の背後には、家族を基本とする血縁・地縁の社会ネットワークが存在していたというのである。

転換期にある現代中国の都市では、これまでの血縁・地縁・業縁などのネットワークにかわって、個人レベルのネットワークが広がりつつある。また、それに加えて階層関係の複雑さも存在している。このような変化にあわせて費の理論は修正を加えられつつも、なおよく引用されている。例えば、発展社会学、組織社会学、産業社会学的な研究をおこなった李培林は、中国の農村が発展していく段階において、費の理論をより一般的なものとして適用しつつ、農村が都市へ変遷していく中で、血縁・地縁ネットワークが重要な役割を果たしていることを指摘している（李培林 2004:17,27-34）。また、周晓虹は、欧米の社会学の立場を踏まえつつ、中国の農村社会において、血縁・地縁の背後に郷地関係というさらに基本的な関係が存在すると主張した。周によれば、郷地関係とは、人と人の関係だけではなく、人と自然、農民と土地の関係をも含む、地縁・血縁よりも広い社会関係資本であると位置づけられるものである（周晓虹 1998:63-66）。

たしかに、費の理論から現代の中国社会をみた場合、問題を単純にとらえすぎてしまう可能性はある。特に、都市化が進んだ中国現代社会の中、若者たちによる社会関係では、少なくとも地縁・血縁ネットワークから生まれる自然発生的な関係は、今や主たる役割を担っているとはいいがたい。したがって、現代社会において、「個人」生活を重要視している若者たちは、自分たちの社会・余暇生活の質を高めようとの意識を強く持ち、友人ネットワークを広め、伝統的なネットワークより、友人ネットワークをますます重視してきていると言える。

#### 1-4 小括

近年、中国社会において、経済および都市の発展、経済文明の建設、そして、高学歴の若者を中心とする中流階層の拡大と多様化、国内・国際的人口の移動などが、改革開放以来の中国社会の特徴として見られてきた。それにつれ、中国の社会学の進展とともに、これらの中国近代社会の特徴に着目し、新たな社会問題を新たな視点から考察する研究者が増えつつある。中国社会の特色を意識した社会学界は世界から中国の理論と実践へと展開されてきた。その中で社会ネットワークの研究が注目を集め、とりわけ伝統的なネットワークから個人的なネットワークへの大きな趨勢が指摘されている。

中国社会では地縁・血縁ネットワークを基盤にする独特の伝統的社会関係が形成されて

きたことを多くの研究者が論じている。「差序格局」という概念を提唱した費孝通（費 1985:30-35）は、中国の経済発展の背後には、血縁や地縁が農村社会の中で中心的紐帯を形成し、家族を基本とする社会ネットワークが存在していた点が重要だという。そして、現在もなお、李培林（2004）と周曉虹（1998）は、社会ネットワークの変化にあわせて費の理論に修正を加えつつ、農村が都市へ変遷していく中で、血縁・地縁ネットワークは今もなお有効であると指摘し、また、張宏明（2004:27-30）が論じたように、中国人は、地縁・血縁関係をもとに社会ネットワークを広げて、様々な社会関係を構築している。本研究においては、趣味ネットワークに対して、社会関係資本論という考え方を補助線に用いながら接近する。

ここでは、本研究の課題を述べておく。

1) 中国の経済成長にともない余暇生活の重みが大きくなってきたところから、地域の変化や社会ネットワークの発達など、中国人若年層に関する特有の問題が、どのように位置づけられ何を意味しているのかを明らかにすることは、中国の社会ネットワーク研究を進めていくにあたっての重要な課題である。

2) 中流階層が拡大している中国本土社会、および在日中国人社会において、「高学歴」で「個人意識」が強いという特徴を持つ若者たちは中流階層に属している者が多い。若者たちの社会現象の新しい変化をどう扱っていくのか。すなわち彼らが持っている新しい友人ネットワークの中の生き様に光を当てることは、その社会の実像と今後の課題を解明することになるだろう。

3) 在日中国人社会における個人主義化のなかで、エスニックなコミュニティへの参加は趣味ネットワークに置き換えられるのか。同様に、中国本土においても趣味ネットワークによって伝統的な結合形態からの離脱が促される可能性も大きい。趣味ネットワークから形成される友人関係が若者たちの新たな社会関係資本の一つ形態になり、今後の重要な論点の一つになるだろう。

以下、第二章、第三章では、欧米ネットワークと社会関係資本の理論の導入や中国における階層やネットワークの研究を検討し、中国人に関する研究の整理を通して、中国人研究の歴史と今日までの軌跡を追うことで、現在の中国社会の現状を知り、問題の本質を探る。現代社会を分析するアプローチとしてネットワーク論の先行研究をレビューし、社会ネットワーク分析の基礎として最近注目されている社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）が展開されるまでを検討し、本研究への適用について論じる。第四章では、CGSSのデータから、中国社会の現象を検証し、社会ネットワーク理論を検証する。第五章においては、中国本土における調査として、瀋陽市の事例を分析し、中流階層の拡大する事情を明らかにする。その多く属している若者たちの間において、友人ネットワークが広がり、その形成過程に関して、四つの調査対象の趣味グループのアンケートやインタビューデータの分析から論じてみる。次に、第六章より、新たな在日中国人研究の展開において、集団中心の研究から個人中心の分析への大きな流れを検討し、大阪における事例調査分析へ

進む。第七章では、在日中国人社会における趣味ネットワークの増加を明らかにし、大阪にあるサッカークラブの事例を中心にフィールドワークからのデータを分析する。趣味ネットワークにより在日中国人の社会関係資本の新しい形成の問題について考える。中国人若者を対象とした本調査データから、趣味ネットワークと社会参加の関係について量的や質的な分析手法によって考察していく。

そして、終章の第八章では、二十一世紀の中国本土社会や在日中国人社会を考える際に大きなテーマとなる若者たちの個人レベルで結ばれた趣味ネットワークがどう展開していくか、硬い集団ベースから緩やかな個人ベースに変化してきたなかで、社会関係資本の形成を個人レベルの問題として捉えていくことを提案する。

中国の若者たちの新しいネットワークの実態がどのようなもので、具体的にどのように機能しているのかに関し、明確に定義することは難しいが、本研究では中国人若年層の新しい友人ネットワークとして「趣味ネットワーク」に注目する。趣味ネットワークを紹介して、あるいはネットワークという場における、若者たちのコミュニケーションの特性や社会の在り方について、それを社会ネットワーク論の立場から検討する。また、中国人ネットワークの地域展開過程におけるコミュニケーションの浸透が、若者たちの心理や友人関係、社会生活にどのような変化をもたらしているのか、彼らのネットワークの弱い連結の強み及び強い連結の弱み、さらに社会関係資本の形成について分析する。そして、地域ネットワーク、家族ネットワーク、友人ネットワークその他の中国人の若者の社会関係を含め、古いネットワークの形式から現在にいたって趣味ネットワークを形成してきたことを検討し、社会関係資本論からみる中国人若年層における社会関係の新しい変化を検証する。

## 第一章 注

1) この時点において「青年」という概念が、「学生および若い知識人」という特定の社会集団に限定され、さらに政治的な意味を付与されてしまったということである。「若者」といえば、日本であれば「20代を中心とする世代」をさすだろう。中国においても、近年は「80後」という概念がある。本稿では、20・30世代の人々を「若者」「若年層」と呼ぶことにする。

## 第二章 欧米ネットワーク理論の導入

19 世紀末、中国は帝国主義諸列強による植民地化の危機に直面していた。中国に対する軍事的侵略や文化的浸透がおこなわれ、最後の皇朝である清朝はますます腐敗し、封建制度はなお強固に残存していたものの、中国は国家的危機と社会的危機を迎えていた。清末は欧米近代に誕生した変革の思想が大量に流入した時代であり、洋務運動には失敗したが、資産階級の改善運動を促進した。同時に、中国の社会は、かなり不安な時代に突入し、中国の伝統文化の変容、西洋文化の導入は、止められないブームになっていた。マルクス主義は、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて欧米社会を席卷し、社会主義による革命運動の潮流が中国を含む資本主義社会全体を大きく揺り動かした。中国における社会学の導入には深い歴史的な基盤があるが故に、中国の社会学が回復・再建された 1979 年からは、中国の社会学者たちは古参世代の費氏や雷氏の指導の下で再び社会学を導入しようと研究や探索を始めた。

この章では、歴史的な視点から、欧米社会学における社会ネットワークや社会関係資本の理論の中国への導入に注目していく。

### 2-1 社会ネットワーク論

20 世紀前半の中国社会学界では、西欧の社会学理論およびイギリスやアメリカにおいて主流とされていた調査方法を用いて、当時の中国社会の様子を描きだしていた。呉文藻を代表とする社会学の中国学派は 1930 年代に誕生したといわれている。呉は当時、中国流の社会学理論の構築を目指し、社区研究の領域で社会学・人類学的な研究をおこない、中国社会学の発展に貢献した。

中国の初期社会学の幾つかの学派の形成は、梁漱や晏陽初を代表とする郷村建設学派にしても、孫本文を集大成者とする総合学派にしても、呉文藻や費孝通を代表とする社区学派にしても、マルクス主義学派にしても、どれも社会学の中国化を堅持した結果である。今日の中国において、社会学の中国化を排除し、西欧社会学をそのまま真似たりするだけでは、これはせいぜい中国での西洋学になるだけであって、古今内外の長所を取り入れて創造していく真の中国の学派を形成することができないのである。

現在、中国の社会学は発展の黄金期にあると言える。それは、中国の社会が社会転換加速期にあり、未曾有の激しい変化の中にあることの反映である。このような状態は度々訪れるものではなく、中国社会学の発展にしっかりした基礎を造ってくれている。このような条件の下で疑わずに社会学本土化の方向に沿って前進していけば、中国の特色を持つ社会学を造ることができ、世界に影響を与えつつ相互友好的・競争的な中国学派を造ることができるだろう。このようにしていくことによってこそ、中国の社会学は中国の社会をより良く認識し、中国社会の発展を推進し、真に世界の社会学と対等に対話できるような能力を持つことができるのである。



そして、現在の中国人社会を最新の視点で見る上で、「ネットワーク」は、その分析上のアプローチとしてのみならず、物理学、生物学、情報科学などを含む広範な「科学」の新しい理論展開を導く重要概念として大きな注目を集めている。グローバル時代の社会の特質をネットワークから見る視点は、社会学を中心とした社会科学の世界における「社会的ネットワーク分析」の研究系譜が長年にわたって発展し結晶化され、理論・方法論として洗練されてきたものである（野沢 2006:i）。本章では社会ネットワーク論について文献を読み理解を深め、次章で中国本土社会におけるネットワーク研究の進展について検討する。

## 2-1-1 グローバル化社会におけるコミュニティ

### <コミュニティの存続論と解放論，住民ネットワーク>

コミュニティ問題は、社会学の多くの領域に関わる論点を設定する。これまでの地域社会研究は、地域社会を特徴づける地域性と共同性が解体、再編、再構成されて行く様態を追究してきた。現代の地域社会研究の第一人者であるバリー・ウェルマンは、その人間・社会関係の特徴をネットワークとして捉えた。ネットワーク分析は、リンケージに焦点をあてるため、連帯的な集団や一定地区内だけを分析の対象にするという先験的な前提を回避できるからである。そして、この問いをめぐる三つの学説、すなわちコミュニティ喪失論、コミュニティ存続論、コミュニティ解放論をウェルマンは検討し、今日の地域社会の結びつきは、相互支援の包括的關係ではなく、広域にわたりながらも特化された關係であるとした（Wellman 1979）。

トロントのイースト・ヨークに住む成人たちを対象として、ネットワークがどのような構造を持ち、どのように使われているかを調査したウェルマンは、親密なネットワークが広く存在し、親族と非親族の双方を含む非地域的なネットワークがあり、非対称的な紐帯を含む、まばらな密度のネットワークであることを明らかにした。本研究においても、中国人社会を、多様な社会的な地位を持つ人々がいかに集まり、その活動を介して、友人関係をどのように形成するかをみる。在日中国人の社会では、日本がもともと移民国ではないので、在日中国人ネットワークが存在しているものの特殊な性質が生じてくる。その中で、中国人たちが求めている滞在資格などで中国人ネットワークが分かれていた。しかし、現在において、趣味ネットワークの誕生以来、滞在資格・出身・地域などに関わらず、趣味という同質性で在日中国人の人々がそれぞれのネットワークにまとまり、日本の都市の空間で活躍している。

都市という独自の空間に生活する人びとは、この空間の影響を受けてどのような関係を形成しているのだろうか。人口が集中している都市部では、地縁や血縁に基づく伝統的な人間関係から解放されることにより、さまざまな人間関係である社会的なネットワークは「個人により選択され、選択し直される」可能性が高いという知見が示されている（高橋・吉賀・朝倉 2006:107-108）。人々は、厳密に境界づけられた共同体に留まらず、ま

ばらな形で織られ、緩やかな境界を持ち、頻繁に変化するネットワークの中で、巧みに生きている。地域社会ないしは共同体は、近隣住区を離れ、支援と社交を与えるまばらなネットワークになっている。そして、プライベートな親密性が公共的な社交性に置き換えられている。すなわち中国本土の人々及び在日中国人たちは、公共空間に出ていって活動するのではなくて、プライベートなホームの中に公的なコミュニティを創造しようとしているのである。したがってコミュニティが家庭化され女性化されているのである。要するにウェルマンが言おうとしていることは、今日の地域社会における人間・社会関係は、パーソナル化・個人化され、エゴ、個人を中心とした関係になっているということである。したがって、今日、共同性、公共性が失われてしまったと嘆くことは当たらない、エゴ、個人、個人主義の背後に、それらのネットワークとしての、従来とは異なる共同性、公共性が存在する。そうした人間・社会関係の変化の背後には、既成の経済・政治・社会・文化構造の機能と意味の喪失という事態があることは言うまでもあるまい。まさしく現代地域社会の人間・社会関係がこのように変化した状況において、ITによるインターネットは登場した。それは、その人間・社会関係を支え、それを強化し、さらに個人間のネットワークを形成した。この意味で、本研究に関わる、中国の若者たちは、地域社会に進出しながら、IT・インターネットなどの手段を利用し、個人的なネットワークを形成し、中国本土社会及び在日中国人社会とつながっている。

ウェルマンはトロントのイースト・ヨークにおける親しい紐帯に関する調査データを用い、都市社会学におけるコミュニティ問題に関する論争に対して、社会的ネットワーク分析の結果を提示した。調査は、第一次的紐帯はどれくらい一般的な存在なのだろうか、友人関係と比較して、親族関係や近隣関係ネットワークは、どれくらい同質的なのだろうか、どれくらい自己完結的であったり、枝分かれしたりしているのだろうか、どれくらい密に編まれているのだろうかなどの論点に関わっている。あるいは、これら第一次的紐帯によって結ばれた人々同士の助け合いを促す構造的な条件とは、どのようなものだろうか。喪失論、存続論、解放論はこうした問題に対してそれぞれまったく異なった回答を示した。従来、都市において形成されている人間関係は、そこで生活している人の「性別」、「年齢」、「結婚しているかどうか」、「子どもがいるかどうか」、あるいは「所得の差」により生じるとされてきた。都市それ自体でなく、そこに生活する人の住民構成が都市の生活様式を決定するという見解は「社会構成理論」として位置づけられている。それに対して都市社会の新しい人間関係の形成に対する可能性を示したのが、ウェルマンの「コミュニティ解放論」である。ウェルマンは産業化・都市化・官僚制が都市社会の人間関係に与える影響を示しながら、都市の人間関係が一定の地理的範囲において形成されるというこれまでの常識を批判し、都市の人間関係に関する衰退論と存続論に対して、コミュニティ解放論に基づく新しい視点を提案する。それは、交通・通信手段の発達により、都市の親密な人間関係が地理的な制約から解放され、広域分散的なネットワークの形で存在しているというものである。ウェルマンは、調査の結果、多くの人々が地理的範囲の人間関係に限

定することなく、市内に分散する職場の友人やトロント都市圏に広がる親族などの関係のなかで生活している実態を明らかにした。都市の人間関係を分析する視点を確立することにより、地理的に限られた空間から解放することを意図していた。都市における人間関係は、多くの場合、近隣関係を越えて存在しているのにもかかわらず、これまでの都市コミュニティ研究が、近隣関係を越えて展開している第一次的な絆であるネットワークの研究を視野におさめてこなかったことを批判した。

ウェルマンは「第一次的絆が、今日では、まばらに編まれ、空間的に分散した分岐構造を形成する傾向がある」と空間に準拠した集団としての伝統的なコミュニティから、空間を越えたネットワークとしてのコミュニティについて論じた。伝統的な人間関係のうち、親類関係は現在も継続しているが、近隣関係は衰退し、近隣関係の代わりに、友人関係が、重要な親密な人間関係になったという。標本全体で見ると、全体のほぼ半分が「親類」、もっとも強い親密な絆は、直接的な親類（子ども、両親、兄弟姉妹）＝伝統的な連帯の絆である。近所の人および同僚は、親密さを感じていても、比較的弱いとみられる。親密な人間関係は、親類もしくは友人のいずれかに特化しやすく、親類関係のない人に対してよりも親類に対して強く親密さを感じている。親密な絆（親類、友人など）と、親密な人たちのグループ間の関係は、コミュニティ解放論を支持するが、親類関係の重要度の高さは、コミュニティ存続論を支持していた（Wellman 1979）。しかし、ウェルマンの結論について、本研究の調査から得たデータでは、コミュニティ存続論の一部と結びついたコミュニティ解放論を支持していたと見られ、中国人が元々家族を重視し信頼していることと応じている。けれども、近年の中国人社会において、その若者たちは友人を重視する点も強くなっており、友人との関係も十分信頼できるようになった。人を信頼していかないと自分も信頼してくれないと現在の中国人の若者たちは意識している。

コミュニティ喪失論とコミュニティ解放論を関係づけると、都市の人間関係は、表面的には、喪失論的に見えるが、詳しく人間関係を聞き出すと、解放論的なあり方が見えてくる。コミュニケーションに積極的で通信手段が利用できる人は、都市の人間関係に解放論的なリアリティを感じるが、コミュニケーションに消極的で通信手段が利用できない人は、喪失論的なリアリティを感じる（松本 1995）。本研究では、中国人社会のパーソナルネットワーク（人間関係）の実態を調査しても、都市における人口の集中が地縁や血縁に基づく「連帯」的な人間関係からの「解放」を促す点に特徴がある。

日本人の場合も、伝統的な地域の制約から解放された個人は、多様なネットワークの形成機会を増大させている。現在の中国人も、家族や近隣関係に基づく社会的な結合だけではなく、自分の好みに合う付き合い方を探し、新しい社会関係を生み出す。都市における親密な絆は、地理的な領域のレベルでは失われたが、このレベルを超えた空間的に散在するパーソナルネットワークへと変容したと考えられる。このように、中国の若者たちにおける社会関係を社会的ネットワークの研究対象として扱っていきたい。そして次に、よく論じられる家族ネットワークについて検討する。

## 2-1-2 家族ネットワークの多様性

### <家族ネットワーク・夫婦役割分離度>

夫婦役割関係における分離度は、家族的ネットワークの密度<sup>1</sup>に伴って直接的に変化するとの観点から、ボットは家族のネットワークが多様であることを明らかにした。夫婦役割遂行の在り方は夫婦によって多様であるが、これをどう解釈したらいいのだろうか？

「夫婦がどういった役割分担をしているか」という問題と、「夫婦をとりまく地域ネットワークが、どれだけ緊密であるか」という問題の関係を調べるという研究パラダイムを提唱したのが、エリザベス・ボットの研究である。これを敷衍して考えるに、「子育てに対する夫婦の関与」と「地域ネットワークへの参与の度合い」は、関係していることが容易に予想される。

ボットの調査は、統計的な相関を算出できないが、社会システムとしての家族一つ一つの内部に作用している様々な社会的・心理的要因の相互連関を研究することであった。ネットワークの密度には、家族ネットワークの中で、高度に結合したネットワークと分散したネットワークという用語を使って、図式で違いを分析した。そして、夫婦役割の分離度はネットワークの密度と関連していることが明らかになった。夫と妻の役割関係が高度に分離的な家族は、それぞれ別々に高度に結合したネットワークをもち、友人・隣人・親類の多くが相互に知り合いであった。夫妻の間に比較的な協同的な役割関係がある家族は、分散したネットワークを持っていた。親類・友人・隣人の間に知り合い関係はほとんどなかったのである (Bott 1971)。

夫と妻の役割関係における分離度は、家族の社会的ネットワークの密度に伴って直接的に変化する。女性は、子どもや家族の悩みで家族から理解されず、家庭内での負担が重いほど、夫からの情緒的サポートが少ないほど、夫婦関係満足度が低いほど虐待傾向も生まれてくる。性別役割分業の中で男女それぞれに課されている負担やそれによるストレスが、弱い立場にある子どもに向けられていることが示唆された (高木 2006:213-221)。ネットワークの密度が高いほど、夫と妻の役割は分離的である。ネットワークが分散的であるほど、夫と妻の役割の分離が少ない。夫婦役割分離度に影響する要因はネットワークの密度だけではないが、最も主な要因である。夫と妻の役割関係に対して外部の社会環境が与える影響をボットは論ずる。また、家族ネットワークの一般的な特性と多様性に影響を与える要因もいくつか考察した。調査対象全体で、社会学と心理学の両方の観点から家族ネットワーク研究法と組み合わせた調査技法を採用している (Bott 1971)。ボットがネットワークと夫婦役割の関連を論じるとき、データからの事例を挙げて、どの家族も組織化された集団ではなく、ネットワークによって構成されたものとした。

ボットの観点から、都市家族のネットワークは多様であると分かった。ネットワーク密度が多様であることは、周りの友人・隣人・親類などとのインフォーマル関係において特にはっきりと表われている。ボットは他の要因もいくつか論じている。そうした要因は、ネットワーク・メンバーが相互に経済的な紐帯によって拘束されている程度、近隣地区の

タイプ、同じ地域に住み続けていても新たな関係を作れるような機会、社会的な移動の機会などである。概念的には、ネットワークは、家族と社会環境全体との間に位置つけられるが、家族が直面し、選択を迫られている状況に対して、その家族全員がそのような反応をするかにかかってもいる。が、ネットワーク密度の多様性は、どのような単一の要因によっても説明することができない。そのような多様性が出現するのは、経済・職業などの制度的なシステムが複雑化・多様化していることによって複合的な力が生じ、家族に対して様々な仕方で影響が及び、家族による選択の余地が大きくなったためであるとみられる。

現在、日本では少子化対策、子育て支援策として、仕事と家庭生活を両立しやすいライフスタイルを広めていくことが求められている。女性の社会進出がすすむ中で、仕事と家庭生活の両立が難しいままであれば、夫婦共働きをしながら出産・育児をすることは困難になり、さらに少子化を進行させてしまうことが懸念される。日本社会の構造変動によって大きく女性が職場に進出した。しかしながら、現状の働き方をみると、特に妻が働いている家庭では、仕事と家庭生活の両立はまだ容易なものではないようである。そこで、ポットの観点から分析すると、夫と妻の役割関係における分離度は、家族の社会的ネットワークの密度に伴って直接的に変化すると考えるともっとわかりやすくなる。

中国でもあたりまえの存在のように考えられがちな家族の意味や形は、時代により、社会により、また個人により異なる。グローバル化と同時に多元化が進行する現代において、中国の家族も大きく変化している。夫は家長として経済生活や対外的な表舞台を担い、妻は家の中を守るケースもよく目にする。これが日本と同じく中国では昔からの家庭で伝統的な夫婦の役割である。家族の中で妻だけが他人という意味で別姓を通し、妻は息子を産んで初めて家庭における地位が安定するといった状況であった。しかし最近では拡大家族から核家族への増加や女性の高学歴化によって、夫婦が対等な権限を持つ傾向に向かっていく。家事分担などはいまだ対等とは言えないが、若い世代を中心に精神的な部分で夫婦は対等と考えている人は少なくない。家族を社会学的に理解するための理論や方法を学び、「近代家族」の現状と未来をジェンダーの視点から考察する必要もある。特に、在日中国人たちは、日本に特徴的な家族関係の影響を受けて、多元性が生まれてくる。例えば、居住状態の「単独」「夫婦のみ」「2世代（未婚子と同居）」「3世代」という世帯構成別に、都市と地域の社会的ネットワークおよびサポートが日本と中国でどのように異なるかを比較してみると、社会的ネットワークは別居子、近隣、友人、地域組織のそれぞれに対する接触頻度など夫婦役割関係によって変化していく。社会的ネットワークについては、都市と地方に共通して、別居子以外の親族、友人、地域組織との接触頻度はいずれも日本の方が中国と比較して高く、これはいずれの世帯構成でもみられた。社会的サポートについては、子供がいても子供から介護を期待できないという高齢者たちの割合が日本では中国と比べて高く、これは地域別・世帯構成別にみてほぼ共通していた。日本では最近、共働き家庭も増えてきたが、女性が働くのは容易ではなく、家事をして子どもや親族の面倒をみるほうがよいという考えが強い。親族との関係は緊密で、頻繁に行き来し、また友人や同

僚とも家族ぐるみのつきあいが行われる。そもそも昔から中国でも血縁・地縁などのネットワークが強い傾向にあり、企業のネットワークにおいてもこれらの要素によって団結と活性化がはかられる。家庭だけにとどまらず、社会においても「家族」を中心とした強い人間関係が形成され、時代の変化により、家族を中心としつつもそのネットワークは個人ベースに広がってきて多様性が生じつつある。

しかし、社会ネットワークは、地域・家族だけで全体的な構成を解明することができない、そのネットワーク上の繋がり強い・弱い紐帯に注目する研究者もいる。

### 2-1-3 ネットワークの弱い紐帯

#### <弱い紐帯の強さ>

弱い紐帯は強いネットワーク同士をつなげる“ブリッジ”として働き、情報が広く伝播するうえで非常に重要な役割を果たすということを明らかにしたのがグラノヴェッターであった。強い紐帯では、求心力ばかりが働き、そのネットワークは孤立を招く。情報伝播や相互理解のために弱い紐帯が必要だと言うのである。

グラノヴェッターは、現代の社会学に大きな影響を与えた社会学者である。彼の唱えた中で、最も洞察力を示す説は「弱い紐帯の強さ」(Granovetter 1973)として知られ、共同体の中での情報の伝播に関するものである。ミクロレベルの社会学理論を結びつけるための道具として、社会的ネットワーク分析を提案した彼の研究は、元々は転職を事例にした実証研究であった。

社会学理論の根本的な弱点は、ミクロレベルの相互作用がマクロレベルのパターンにしっかりと関連づけられていないことにある。これに対して、グラノヴェッターは個人間ネットワークの諸過程を分析することで、もっとも有効なミクローマクロの橋渡しとなると論じた。小規模な相互作用の一側面である個人間紐帯の強さ<sup>2</sup>だけに視野を限定するという戦略を採って、情報伝達・社会移動・政治的組織化・一般的な社会的凝集性など、マクロレベルの多様な現象と関連づけることができるのかを、ある程度詳細に示した。価値ある情報の伝達やイノベーションの伝播においては、家族や親友、同じ職場の仲間のような強いネットワーク（強い紐帯）よりも、ちょっとした知り合いや知人のような弱いネットワーク（弱い紐帯）が重要であるという社会ネットワーク理論は、1973年にグラノヴェッターがこの論文で示した仮説で、企業と労働者のジョブマッチング・メカニズムを明らかにするための実証研究に由来する。

グラノヴェッターによれば、弱い紐帯は強いネットワーク同士をつなげる“ブリッジ”として働き、情報が広く伝播するうえで非常に重要な役割を果たす。強い紐帯によって構成されるネットワークは同質性や類似性が高く、強い紐帯ばかりを重視すると求心力ばかりが働き、そのネットワークは孤立化を招くことになる。情報伝播や相互理解を促進するためには、弱い紐帯が必要なのである。また、弱い紐帯によって伝達される情報や知識は、受け手にとって価値が高いことが多い。強いネットワークの内部では接触こそ頻繁だが、た

わない話題などを交換しているだけのことが多いのに対して、弱い紐帯では関係性が弱いにもかかわらず連絡を取るほど、伝達内容は重要なのだということができらるだろう (Granovetter 1973).

社会学における「弱い紐帯の強さ」説はグラノヴェッターの名を高からしめた。これは緊密な社会的繋がり、例えば親友や核家族は力を行行使するには適当だが、密なネットワークは高度に冗長な情報を持つため、探索にはほとんど無用であるとするものである。一方、弱いつながり、即ち単なる知り合い関係では情報の冗長性ははるかに低いため、探索には極めて有効である。しばしば情報は力よりも重要であるから、個人が発展していく（求職など）には弱い繋がりの方が家族や友人関係よりはるかに重要となる場合がある。また、「よく知っている」同志は同一の情報を共有することが多く、そこから新しい情報が得られる可能性は少ないが、「あまり知らない」人は自分の知らない新情報をもたらしてくれる可能性が高いからだと考えられた。このような「あまり知らない」人を「弱い紐帯」といい、その重要性を明らかにしたのがグラノヴェッターの功績である。強い紐帯より弱い紐帯の方が情報収集機能を発揮したのである。

現実には弱い紐帯の方が強い紐帯より絶対多いはずなので、弱い紐帯の方がより広い範囲を網羅し、より豊かな情報をもたらすのは当然であるだろう。すなわち本当の問題は紐帯の数であり、弱い紐帯が優れているということではない。実際に、実証研究者がその後同様の調査をしても結果が安定していないようである。このような差異が文化的なものなのか、あるいはグラノヴェッターの理論に不整合を生じさせる何らかの条件が地域や場所や対象者によって存在するのかは難しいところである。

グラノヴェッターの論文で提示されたモデルは、ミクロとマクロのレベルを連結することを目指して踏み出された小さな一步に過ぎないし、ひとつの理論の一部分を示したにすぎない。例えば、紐帯の強さだけを取り上げることは、紐帯の内容に関するほかの重要な論点を無視してしまうことになる。紐帯の強さと紐帯の専門化の程度は、どう関連しているのか。また、紐帯の強さと階層構造との関連はどうか。敵対する個人間に見られるような否定的な紐帯をどう扱えばよいのか。紐帯の強さを連続変数として構築していくべきなのか。時間の経過とともに、ネットワーク構造はどのような発達段階をみせるのか、などの問題が解決されても、別の問題が生じることになる。しかし、彼の理論の本質は、紐帯の強弱によるその影響力の比較ではなく、ネットワーク内部の異なるグループをつなぐ「ブリッジ」<sup>3</sup>の機能の重要性を説いたところである。ブリッジの連結機能は情報伝達や社会統合に優れていて、強い紐帯より弱い紐帯の方がこのブリッジの機能を発揮することが多いというのが論旨であり、グラノヴェッターの功績である。異なるグループ同士をつなぐブリッジの存在が、現実社会の中で必要性を増しているのは、多くが認める地域の課題である。

現在の日本社会では、多くの人が小さな世界に閉じこもってしまっている。それは、家庭であったり、学校や会社であったりする。特に若者は、同年代の仲間構成された小さ

なネットワークの中にも閉じこもって生きるようになった。個人と社会のつながりが少なくなると、個人がばらばらになり人間関係が薄くなってきた。そして、外国人と日本社会の繋がりも弱く、外国人たちは自分が作っているネットワークの中で楽しんでいて、日本人との繋がりが弱い。グラノヴェッターの論文で提示された弱い紐帯の強みとは、家族や親友などの強いつながりで結ばれた人との関係より、知人と言われるような人との関係の方が、その人にとって有効な情報を得る機会を多く与えるというものである。この弱い紐帯は強い紐帯同士をつなげる役割を果たしている。人のつながりが薄くなったコミュニティは、他の人びととつながるため、新しく紐帯が成り立ってくる。

中国の若者たちは組織的なネットワークに参加しながら、その中に、小規模なグループや個人的なネットワークを形成し、それぞれのネットワークは地域社会とつながっていく。そして、地域社会も更新され、他の社会を受容できるようになってきた。中国の若者たちは社会での生活経験を積み重ねていくなかで、そこから自分の暮らし方についての意識を形成していく。その意識の中では、ネットワークの重要性が増している。自分のネットワークを作り、またいろいろネットワークと繋がらないと生活できないと中国人は思う。極論にはなるが、中国人特に若者たちのアイデンティティも、ネットワーク・社会関係を背景とした生活環境や生活意識から形成されていくもの、といえるのではないだろうか。これら中国人のネットワークとして機能しているエスニック・ビジネス・趣味ネットワークなどの中でも、その中核を成している緊密な関係が存在するはずだ。グラノヴェッターの理論を本研究においても、そのつど参照しながら検討していく。

## 2-2 社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）

社会ネットワークの分析視点として、家族・地域コミュニティ・社会関係資本の三つに大きく範囲を分類し、それぞれの分析基準で社会ネットワークについて網羅的に学ぶことができる。社会ネットワーク分析の理論として最近注目されているのが社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）である。今後、社会ネットワーク分析がどれほど社会関係資本を捉えることができるのか、説明可能なのかは重要な課題であるが、まず社会関係資本の主要な文献をレビューして、研究していくうえでの参考としたい。

### 2-2-1 社会関係資本論の定義と実証

#### <信頼・規範・ネットワーク>

1993年、アメリカ合衆国の政治学者であるロバート・パットナムは、『哲学する民主主義』（原題 *Making Democracy Work*）の中で、イタリアの北部と南部で州政府の統治効果に格差があるのは社会関係資本の蓄積の違いによると指摘し、人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を高めることができることや「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会的仕組みが社会関係資本の成立の条件であるとし、社会における信頼の在り方の格差がなぜ生じるのかを明らかにした。いわゆる「社会関係資本」（ソーシ



ヤル・キャピタル) 概念を明確に提示した最初の研究であり、「社会関係資本」と呼ばれる個人の間には存立する「信頼 (trust)」の網の目によって民主主義を論じた。パットナムは、治安、経済的繁栄、人種間の関係、人々の健康状態や幸福感などにくわえて、子どもの教育や福祉にも社会関係資本が影響を与えていることを明らかにした (Putnam et al. 1993)。

社会関係資本の議論は、パットナムを筆頭とするコミュニティの住民の帰属関係や信頼関係の重要性を論じる立場と、主体間の関係が生成する諸々の特性のうち、関係形成者に何らかの報酬をもたらす関係のあり方に注目する立場がある。パットナムは、前者のブリッジ型の社会関係資本を重要視し、その構築にはわれわれが社会的、政治的、職業的アイデンティティを乗り越え、自身とは似ていない人々とつながることが重要であるとした上で、社会関係資本の構築のためにチームスポーツが有効であり、加えて、芸術文化活動が同じぐらい重要でありながら、あまり活用されていないと論じている。芸術は因習的な社会障壁を乗り越える上で特に有益であるとし、社会関係資本は芸術活動の価値ある副産物となることしばしばあるとする。具体的な事例として、リズ・ラーマンの「ダンス・エクスチェンジ」や「ローサイド・シアター・カンパニー」、トニー・ブラックマンの「フリースタイル・ユニオン」、デビッド・シンプソンのマトルバレーなどの事例をあげていた。

社会関係資本を提唱する者としてはパットナムが代表的であるが、理論的な枠組みを提示したのはコールマンとバートだと考えられる。社会関係資本をその機能から分類すると、ある社会関係とそれがもたらす帰結 (便益) との関係を理論化することが難しくなる。

## 2-2-2 社会関係資本の理論的な枠組

### <人的資本の形成における社会関係資本・ネットワーク閉鎖論>

「社会関係資本」<sup>4</sup> という言葉はもともと俗語であった。それに類する概念を考えていたものも 19 世紀頃からいたと言われるが、それを掘り下げたのがアメリカのジェームズ・S・コールマン、フランスのピエール・ブルデューといった社会学者であり、アメリカの政治学者ロバート・パットナムがイタリア社会の絆にこの名前を名づけたことで、広く知られるようになったともいわれる。

最初に社会関係資本について体系だった分類・定義をしたのはピエール・ブルデューであり、社会的資源及び社会的価値を、文化資本、経済資本、社会関係資本 (人脈) の 3 つに分類し、社会的地位の再生産の議論に適用を試みた。また、社会関係資本の特質についても定義された。その後、地域コミュニティが衰退し、個人主義が蔓延しつつあった 1980 年代以降のアメリカを背景に、社会学者のジェームズ・コールマンが、信頼やつきあいなどの人間関係、中間集団などで、人的資本 (ヒューマン・キャピタル) ならぬ社会関係資本 (ソーシャル・キャピタル) が持つ意義を唱えた。彼の提唱をきっかけに、社会関係資本という概念はアメリカ社会学の世界で広く受け入れられることとなった。

ジェームズ・S・コールマンは、アメリカ合衆国の社会学者で教育社会学、公共政策などを研究し、『社会理論の基礎』は20世紀終わりの最も重要な社会学的業績とされている。彼は社会関係資本の三つの形態、すなわち恩義と期待、情報チャンネル、社会規範を検討し、社会関係資本の第一と第三の形態を促進する社会構造の閉鎖性の役割を論述した。コールマンはその研究の中で、社会関係資本の実体は、人々の社会的紐帯とそれがもたらす「互酬性の規範」（助け合いや協力を尊重する規範）や「一般的信頼」（他者は信頼できるという信念）であると論じた。社会関係資本は、教育に関しては、経済的資本や文化資本とならんで学力形成や教育達成に影響する資源と考えられている。この概念を早くから取り上げたコールマンは、カトリック系学校の高校中退率の低さに注目し、家庭における親子の結びつきや大人たちが同じ宗教的共同体に属していることが、生徒の中退を抑えていると解釈した。今日の米国では、社会関係資本は、貧困層の子どもの教育水準の向上や貧困層集中地域における学校改革の鍵だと考えられている。子どもを取り巻く大人たち（教師、親、地域住民）の協働と親の積極的参加は、家庭での学習支援や学校での教育活動を充実させ、子どもの学業的パフォーマンスを高めるというのである。本研究に即していえば、中国人たちの学校と家庭・地域社会の信頼・協力関係（社会関係資本）は、生活文化の変容と学力形成へとむすびつき（文化資本）、ひいては安定した雇用や収入（経済的資本）をもたらすということである。社会関係資本という元手を上手に使うことができれば、文化資本や経済的資本を蓄積することができる。学校と家庭・地域社会の間に蓄積される社会関係資本は、個々の中国人の人々の抱える不利な条件を克服する手がかりになり得る。

「社会的資本とはここでは、信頼、規準、ネットワークといった、コーディネートされた行為を促進することによって社会の効率性を改善することのできる社会組織の諸特徴に関連している」。コールマンは資本の他の諸形態と同様、社会的資本は生産的で、もしそれが無ければ得られなかったであろう、ある目的を達成することを可能にする」と述べた。たとえば、信頼していることをその構成員にあきらかにし、その信頼をお互いに外面化している集団はそうした信頼を相対的に欠いている集団よりずっと多くを達成しうるであろう（Coleman 1988）。

社会関係資本は「貧者のエンパワメントの手段」なのである。例えば、農村コミュニティには一人の農民が他の農民によって梱包された藁を得るところもあるし、農機具が広範に貸し借りされているところもある。社会資本はそれぞれの農民に道具や設備といった形態での物的資本をより少なくして、その仕事をさせることになる。明らかに、分化は役割の多角化にほかならない。デュルケムおよびパーソンズにしたがえば、分化は近代化の不可欠な条件である。それは選択を拡大し、任務遂行に対して報いるにつれて、帰属性への信頼を失墜させ、個人による支配を破棄させる。「要するに、成長・進展・文明に含まれている一つの原則は、問題となる諸社会構造がそれぞれ互いにいっそう分化するようになるということである」。コールマンもそう信じ、社会関係資本の熱心な主唱者になっている。

コールマンは高校生に関するデータを分析し、親と子の閉鎖的なネットワークが形成された学校では生徒の中途退学率が低いことに依拠して自らのネットワーク閉鎖論を論証しようとしている。しかし、コールマンの議論では、社会関係資本をマクロな社会変数で代位しており、ミクロな視点を主とするネットワーク分析の観点からすれば、マクロ社会分析的で、やや粗い尺度という印象を拭えない。これは、バートがネットワーク分析的に厳密な変数定義を行っているのとは対照的である。この弱点はパットナムの議論にも言えることであり、パットナムも社会関係資本を信頼度や結社の数のようなマクロな社会変数を使用して定義づけているため、社会関係資本論の議論に混乱を招いている。

合理性に基づく社会的連帯の創出について、コールマンはポジティブなサンクションがネガティブなサンクションより有効であると論じた。協力が成立するコミュニティの内部には、統制専門の公式組織が出来る。が、この組織の利害をどうコントロールするかという問題が出てくる。コミュニティの中にネットワークがあり、外部に対して閉ざされている場合、インフォーマルな統制が可能で、公式組織は不要になる。(コストも安上がり) フォーマルな統制は罰による恐怖心を使わざるを得ない。日本政府の外国人労働者への対応は上の観点からの解釈も可能であろう。合理的交換が全て市場で行われるわけではない。合理的選択理論は、経済学理論よりも包括的であり、市場だけでなく、巨大な団体組織が現代社会の特徴になっている。団体組織は個人よりも強い力を持つ、対抗するには、別の対抗的組織を作る必要がある。団体組織の世界の住人とは、団体組織が交換の当事者になっている面がある。個々人が組織を形成することは合理的であるとコールマンは考える。組織の中で、個人は団体の行為の構成要素となり、自分自身の直接目標ではなく組織の規範や指示に従う。組織は団体行為者としてふるまい、団体それ自体が合理的な意思決定者となる。それ自体の利害関心を持ち、利益を最大化、コストを最小化しようとする。団体行為者のレベルでは合理性のパラドックスは現れないのかどうか。新しい問題はあるのかどうか。コールマンは、団体組織のレベルに深刻な問題があると考えている。

すなわち、まず社会関係資本とは特定の社会の機能(信頼や規範)として定義される。その社会関係資本が社会に様々な利便性をもたらす。しかし機能としての社会関係資本をもたらすものとの関連性を首尾よく理論化することができない。もうひとつの流れは、先行の研究に刺激されたナン・リンによって始められた。それは社会関係資本を個人が持つ社会関係として、その効果を見極めようとするものである。

### 2-2-3 個人が持つ関係資本

#### <社会関係資本・社会構造・行為理論>

ネットワークの資源としてののはたらきに焦点を当て、社会関係資本(ソーシャル・キャピタル)論を展開したナン・リンは、代表的研究『ソーシャル・キャピタル 社会構造と行為の理論』(Lin 2001)の中で、個人の地位達成、社会の階層分化といった幅広い現象を科学的に分析した。現代社会は縦横無尽に張り巡らされたネットワークによって形成さ

れている。社会的なネットワークとそこから生まれる規範、価値、理解、信頼は、社会関係資本として、人々の間の協力を推進し共通の目的を実現しやすくすると考えられる。ナン・リンは社会学にとっての理解とは、社会関係の中での選択肢の研究であるといい、行為の動機を探究し、どういった選択肢が関係のなかに（認知されたものでも実際に存在するものでも）あるのかを調べ、そういった選択の結果について研究するものだと述べた。従って社会学にとって中心的課題は、行為と構造の両者、すなわち構造的な機会と制約のなかでの選択行動の分析である。そして、行為者はよりよい結果を得る目的をもって他の行為者の資源にアクセスするために、他の行為者と関わり合うという道具的・表出的な欲求に動機つけられている、という理論を検討した。

社会関係資本に関して、ナン・リンは資本理論の歴史的説明から始まり、社会関係資本の考え方を系統的に説明している。そして、構造的パースペクティブから出発して関係と行為に「下る」ダイナミクスの理論を論じ、ネットワークを含む構造のなかにもどのように資源が埋め込まれているのかを説明した。また、相互行為、行為者の選択及び理論の要素の命題や体系立てに対して有用性を立証し、地位達成と社会関係資本の不平等性について重要な研究課題に光を当てた。研究分野に応用しつつある社会関係資本論は、先ほどのダイナミクスを逆転し、選択行為から出発して制度的・構造的コンテキストを説明していた。

ナン・リンの社会関係資本論では、理論の定式化や論理を展開していたが、関係資本の有効性の一つとして「影響力」を挙げていて、これは要するに「相手の威を借りて自分の立場を優位にする」ということと理解した。集合的資産としての社会関係資本については考察を省いて、論考の結果として、社会関係資本の理論上・実証上の有効性は、なされた定式化を拡張すれば導くことができるものであって、ことさら分離・独立して存在しているわけではないということを確認したからである。ピラミッド型の社会システムを前提として、埋め込まれた資源、アクセス可能性、行為の三つを重視し、埋め込まれた資源を物質的あるいは象徴的な財として定義する (Lin 1982)。物質的な財とは、人々の性格を維持し、高めるのに必要となる基本的な物質的資源であり、象徴的な財とは、個人や集団によって意味を与えられた資源である。象徴的な財の意味や意義がどのように資源に割り当てられるかについては、三つの仮説的原理<sup>5</sup>を提案した。社会関係資本の特徴として、直接的、間接的なつながりによってアクセスできる資源であり、その資源は他者の所有物(彼らの個人的資源)または他者の社会的地位(彼らの地位的資源)に帰属した資源であると定義している。例えば、社会構造がピラミッド型であると仮定されたが、市民参加型のイベントでは、かならずしも、ピラミッド型の社会が想定されているわけではない。参加する人々は、どちらかといえば、地位的資源を明示するような状況をさけ、パットナムの言うとおりに、水平的な状況を望み、また、そうした関係を構築しようとするケースが多い。つまり、ブリッジ型のコミュニケーションを求めながらも、道具的見返りを求めるより表出的見返りを求めていると考えることができる。ゆえに、地位を明らかにするような自己紹介を避け、同類性原理が働くような趣味や興味、関心を開示する自己紹介方法を選

択している。イベントへの参加は、選択し参加している人々であるがゆえに、ブリッジ型の性質をもつ人が多い。異質な人々が出会い、あたらしくボンディングしながら、組織やプロジェクトを構築するという意味では、ソーシャル・イノベーションのためのレジームを形成していくことになる。参加型イベントに参加する人は、地位に埋め込まれた資源を他の参加者に示すことはまれであり、そうした地位に帰属する資源を獲得しようと近寄る人間を避ける。もしくは、その地位から離れて、コミュニケーションを求めているともいえる。逆説的だが、そのために、埋め込まれた資源が視覚化されず、各人が、道具的見返り（富、権力、名声）にブリッジすることを妨げ、資源を相互に活用する機会も減少してしまうので、結果として活動を活性化することを妨げてしまう。社会関係資本としても、社会関係資源にもなりきれない部分がある。逆にいえば、どちらの要素も持ちうるともいえる。

ここで、社会関係資本の要素としての信頼について経済学の視点からみると社会関係資本の構成要素は組織間でみると組織間の合意の履行を保障する制度への信頼性を示す「制度的信頼」、相手組織の能力への信頼性を示す「能力的信頼」、相手組織の意図に関する「意図的信頼」の三つがある。これらは市場の取引に完璧に反映されるわけではなく、経済学でいう外部性を持っている。外部性とは個人や企業などの行動に対して市場を通じないで影響を与えるものであり、便益を与えるものを「外部経済」損害を与えるものを「外部不経済」と呼ぶ（若林 2003）。もともとネットワーク分析と社会関係資本論は別々に社会学的发展し、分析の強力な手段として積極的に取り込まれた。社会学からの支援はいうまでもないと考えられる。いろいろな視点から分析されているが、社会学における関係資本の研究とは主に以上の人々の主張から発展してきたといえるだろう。

### 2-3 小括

以上、欧米社会ネットワークと社会関係資本理論について、レビューしながらまとめてきたところで、本研究における趣味ネットワークでは、家族や地域社会におけるプライベートな親密性が、公共的な社交性に置き換えられているといえる。それは拡大しつつある中国の若者たちのネットワークの中に存在している非親族、非地域的かつ親密なネットワークである。最初はまばらな密度だと見られるネットワークが、しだいに緊密な密度になってきている。社会ネットワーク論とコミュニティ解放論に基づく新しい視点から分析する必要があるだろう。中国人の家族ネットワーク密度も多様であり、どのような単一の要因でも説明できない。経済・職業などの制度的な複合的力が、人々の社会的相互作用と精神的健康に与える影響を実証的に検討しなければならない。その家族ネットワークの密度について明らかにすることが要請された。

若者たちが、仕事・勉強・家族などの生活様式および地域の構造変化から、個人的欲求が強くなり、趣味のために新しいネットワークが形成される。従来の集団ベースの硬い関係より趣味の個人ベースの緩やかな関係から様々な情報を手に入れ、質的に豊かな生活を

実現してきたと考えられる。そして、その趣味ネットワーク内でどのくらいのクラスターができるかを、ネットワーク内の到達のしやすさとして扱っていきたい。

中国人社会では時代の変化により、元々の形で地縁や血縁に基づく伝統的な人間関係から解放されることにより、さまざまな新しい人間関係（狭く特化された関係）の社会的なネットワークが個人により選択され、選択し直される可能性が高いほど、多様なネットワークの形成機会を増大させた。したがって、ネットワーク内部における紐帯の強弱によるその影響力が生じ、異なるグループを形成し、「ブリッジ」としての機能を通じて繋がっていくプロセスを分析するべきだろう。社会ネットワークの変化から社会関係資本の形成にまで至るプロセスを明らかにできるかどうかを分析し、社会関係資本は、教育・経済的資本・文化資本・学力形成・教育達成に影響する資源と考えられてきた。本研究に即していえば、中国若者たちが学校・家庭・地域の信頼・協力関係（社会関係資本）を得ることで、生活文化と学力形成（文化資本）、ひいては安定した雇用や収入（経済的資本）を獲得できると考えられる。コールマンによれば、ネットワークが社会関係資本となり、規範形成や社会統合に寄与するのは、その構造が閉鎖的であることが決定的であり、社会関係資本をマクロな社会変数で代位しているが、ミクロな視点を主とするネットワーク分析の観点からするとやや粗い尺度という印象を拭えない。これは、バートがネットワーク分析に厳密な変数定義を行っているのとは対照的である。存在しない関係のもつ力を特定するのだから、具体的に実在するものや人の影響力を特定するよりも巧みな理論展開が要求される。

欧米社会学理論から強い影響を受ける中国社会学は今日、特に階層変化も生じる中国現代都市社会において、研究者たちが注目する研究分野はどう進展しているのか、次の章から検討する。

## 第二章 注

1) ネットワーク上の家族密度とは、家族関係を維持している人々の間で、実際に相互に関係をもつ割合のことを指す。

2) 個人間の紐帯の強さと言われて直観的に思い浮かぶ様々な考えは、共に過ごす時間量・情緒的な強度・親密さ・助け合いの程度、という4次元を組み合わせたものである。グラノヴェッターは、任意に選ばれたAさんとBさんのいずれか、あるいはAさんとBさんの両面につながりを持つすべての個人Cさん、Dさん、Eさん・・・の総体をセットSとして、二者間の紐帯をより大きな構造と関連づけてくれるような仮説「二者の紐帯が強いほど、弱い紐帯か強い紐帯のいずれかによって両方につながる個人がS内に占める割合は大きくなる」をたてた。そして、A、B間の紐帯が存在しない場合に最少になり、A、B間の紐帯が弱い時にそれらの中間になると予測できると論じた。

3) 現実社会では純粋なブリッジについてはみられないので、定義を緩和したものがローカルブリッジであるとグラノヴェッターは概念を取り上げてはいるが、その後の検証をみてもローカルブリッジはきちんと作業定義を与えられモデル化されていない（安田 2001:118-121）。

4) 人間関係のつながりなどソフトな意味での社会的な資本として、社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）は理解されている。社会における信頼関係と規範のあり方、社会の効率性向上等との関係について考察を加えた場合、厳格な上下関係（階層構造）で構成される人間関係よりも、フラットな関係で協調的な行動によって社会の効率性も高められるという考え方に立脚して展開された理論である。この用語には多様な定義が含まれているが、基本的な定義としては、共同体や社会において人々が持ちうる協調や信頼関係のことを指している。

5) a) あらゆる集団やコミュニティにおいて、資源の相対的な重要度をメンバーに知らしめるために、合意、または影響力によって資源に個別の価値が付与される（Lin 1982）。資源の価値付与は次の三つのプロセスのうちのひとつを通して、達成される。それは「説得」「請願」「強制」である（Lin 1973:201-220）。 b) すべての行為者はチャンスがあれば、価値ある資源を維持・獲得することによって、自己の利益を高める。 c) 価値ある資源の維持・獲得は行為の主要動機であり、かつ前者の動機は後者の動機に優先する（Lin 1994）。

### 第三章 中国における階層移動とネットワークの研究

欧米社会学における社会ネットワーク研究に関して、様々な視点から検討してきた。今までの社会ネットワーク研究を振り返ってみて分かることは、かつては集団的なものととらえられていたネットワークが、個人的なものとしてとらえられるようになってきた、という大きな流れが存在していることである。

この章は、中国社会学において社会ネットワーク研究にどのように進展が見られるかを概観し、検討することを目的とする。そこで、中国の社会ネットワーク研究の大きな方向性をおさえつつその知見をまとめ、さらに今後の研究のいくつかの指針を見出すことがねらいである。

#### 3-1 中国社会におけるネットワーク研究の進展

20世紀後半にいたると、中国社会学では多領域にわたって研究がおこなわれるようになり、都市や農村社会を分析する際によく応用される費孝通の「差序格局」<sup>1</sup>理論など、現代の社会学研究に大きな影響を与える研究が数多くなされた。それ以降、文化綜合学派、人口学派、農村社会学研究、社区研究、社会心理学研究などが展開されている。

社会ネットワーク研究と社会関係資本研究についても、国際的な社会学界の流れに沿うかたちで中国においてさまざまな議論がなされてきた。2003年からのCGSS調査が開始されるなど、近年、中国国内および香港・台湾も含めて、農村や都市における社会ネットワークに関する様々な研究が注目されている。そこでは、欧米の社会ネットワークや社会関係資本に関する主要な理論の検討と、中国社会の実証的研究による解明と新たな課題の導出がおこなわれている。

伝統的な社会関係に注目してきた中国の社会ネットワーク研究であるが、改革開放以降の社会変動をふまえ、現在では新たな段階に入りつつある。特に、最近の中国社会における文化的ネットワークや友人ネットワークから生まれている社会関係資本は、人々の生活にアプローチする際に重要な論点のひとつとされている。

具体的には、次のような流れで論じていくことにする。まず、近代化以降も重視されてきた地縁・血縁などの基本的ネットワークおよび家族関係に関する研究について概観する。次に、ネットワーク研究の中で重要な位置を占める社会関係資本について、企業社会とのかかわりもふまえて述べていく。さらに、著しい変化が起きている農村社会と都市社会に焦点をあてた研究についてまとめる。そして、都市化によって個人の生活要求が高まるなかで、次々と形成されている新たな友人関係を中心とする弱い紐帯のネットワークに言及していく。

##### 3-1-1 中国社会における家族ネットワーク

家族は、個人の社会関係が発展する原点だとされ、家族社会学の領域では多くの研究が



おこなわれている。とりわけ、家族を大切にすることが伝統・習慣となっている中国では、家族関係から広がる社会関係が重要な位置を占めることになる。またそれは、費孝通が中国社会における血縁・地縁ネットワークの重要性を指摘している点からも推察できる。そこで次に、家族ネットワークに関する研究についてみておこう。(費 1985:30-35)

費は上述の研究のなかで、西欧の家族と中国農村の家族を比較・検討している。費によれば、当時の西欧社会における家族は夫婦関係を主軸とする集団であり、その中で子どもは時が来れば集団を離れるいわば脇役と位置づけられている。これに対し、中国の農村社会における家族では、成員数こそ少ないものの、父子間・母子間関係を主軸としており、夫婦関係が脇役となっている。そして、この父子間・母子間関係は持続性を持ち、ときには親族を介する大きな氏族ネットワークを形成すると費は論じている。

また、張宏明は、中国における社会ネットワークの中心的な問題になりうるものとして、家族関係を挙げている。そして、中国人は、地縁・血縁関係をもとに社会ネットワークを広げて、様々な社会関係を構築していると論じている(張 2004:27-30)。

さらに、中国では家族が企業<sup>2</sup>を形成することも多いが、それに焦点をあてる家族企業の研究においても家族関係ネットワークの強みが注目されている。

一般的にいつて、企業は経済的な組織であるため企業成員の個人的な目標と企業全体の目標との違いによる葛藤が起りやすい。ところが、豊富な社会ネットワークや社会関係資本を保有する家族企業は、家族企業内のそういった葛藤をある程度まで軽減することができる。このため、家族企業ネットワークの分析では、社会ネットワークや社会関係資本は家族企業の管理に効果的であることがしばしば指摘されている。

家族ネットワークに関する研究の中でも、ジェンダーに関わる問題は数多く取り上げられている。例えば、費は男女の区別がはっきりと設けられている中国農村社会では、男性を中心とするネットワークが構築されており、それは人々の心理や行為規範に影響を与えているという(費 1985:21-29)。また、周大鳴は、そのような農村社会において、女性が結婚前にもっている社会ネットワークは、結婚後には相手のネットワークに取って代わられることが多いと指摘している(周 2007)。

改革開放以降、中国では一般的に女性の社会的地位の上昇がみられ、以前とは大きく異なってきた。それは農村女性においても同様であり、生活スタイルが変化していくとともに、職業をもつ女性がかかり増えている。これにともない、農村女性の社会ネットワークにも大きな変化が起り、彼女ら独自の生活および職業上のネットワークが形成されつつある。

ところが、周大鳴によれば、このような経緯をもつ農村女性の社会ネットワークは、決して安定したものではないという。彼によれば、農村女性が保有するネットワークは(1)地縁と姻縁(結婚)から結ばれた社会関係が多いこと、(2)教育・技術・政治に基づく社会関係は乏しいこと、(3)特に、結婚して間もない女性はネットワークを形成しにくいこと、などを指摘し、彼女らのネットワークは総じて男性よりも脆弱なものになりがちであ

ると指摘している（周 2007）。

以上に述べたように、中国社会では、基本的な構成要素としての家族から広がり、いろいろな新しい社会ネットワークが誕生し、個人的なレベルの社会関係が形成されていく。そのように形成される社会関係は、人々の生活において重要な役割を果たしていることが、家族関係に注目した研究から明らかにされている。ただし家族関係とはいっても、現代においても男女でその意味合いが大きく異なっている点には注意が必要だろう。

### 3-1-2 中国社会における社会ネットワークと企業の関連

#### <社会ネットワークから得る社会関係資本>

ところで、社会ネットワーク理論を用いた研究は、大きく2つに分けられると思われる。1つはネットワークの形成や構造に注目するものであり、もう1つは社会関係がもたらす資本、すなわち社会関係資本を論じるものである。社会問題や社会統合について何らかの解を求める際に、社会における人びとの結びつきに注目することが多い中国では、2つのうち後者について頻繁に議論がなされている。

欧米の社会学者らはそれぞれ社会関係資本に関する概念を自身の研究領域に結びつけて定義し検討することが多い。そのようにさまざまな蓄積がなされた欧米の社会学における社会関係資本の定義はあらゆるところで引用されており、それは中国のネットワーク研究においても例外ではない。だが、先に述べたような独特の社会関係が存在する中国社会では、社会関係資本研究もまた独自の展開を見せている。

辺燕杰は、中国社会における社会ネットワークを介した就職プロセスに注目する研究をおこなっている。彼はその研究の中で、ネットワークの構造とともに弱い紐帯がもつ効果と強い紐帯がもつ効果のそれぞれを、社会資源や社会関係資本論、構造理論といった理論を用いて検討した。結果として、中国社会では弱い紐帯だけでなく強い紐帯も就職に対しては効果をもっていることが明らかにされ、その後のネットワーク研究や社会関係資本研究に具体的な構想を提供することになった（辺 1999）。

罗家徳は、社会ネットワークと社会関係資本は密接に関連しているという立場から研究をおこなっている。彼によれば、一般的に中国社会においては、強い紐帯が多く存在するネットワークの中では重複する紐帯の数が多いのに対し、弱い紐帯が多く存在するネットワークでは重複する紐帯の数が少ない傾向があるという。さらに彼はそういった中で個人レベルの社会ネットワークと組織レベルのネットワークを分けたうえで検討をおこない、個人レベルのネットワーク間やネットワーク内に存在する、強弱どちらの紐帯においても相互の情報交換は綿密に行われていること、組織レベルのネットワークに存在しているブリッジは弱い紐帯として働いていることを明らかにした（罗 2008）。

張文宏は、さらに階層論的な視点もふまえて社会ネットワークを研究している。彼は、社会関係資本は社会ネットワーク、具体的には社会構造の中で人々が行なう目的行動の中から生まれ、社会ネットワークと社会関係の中に存在するものである、と主張している。

ただし彼は、同時に現代中国社会において社会関係資本がもつマイナス機能への認識が不足していることを指摘している。彼によれば、集団の利益としてネットワークから社会関係資本を得ることは、個人レベルの利益を犠牲にすることになるという（張 2008）。

中国のネットワーク研究においても、社会関係資本をどのようにとらえるのかについては、研究者によって立場はさまざまである。だが少なくとも、関係の頻度や親密さの程度など、それぞれの紐帯を比較することで知見を得ている点は多くの論者に共通している。そして、そのなかでも、個人のキャリアが発展していく際に、友人などとの弱い繋がりによって形成される社会関係資本がはたす重要な役割（張文宏 2008:73-80）が、大きな論点として挙げられている。

また、羅（2008）や張（2008）の研究に見られるように、社会関係資本研究をミクロな視点とマクロな視点の双方で展開させている点もまた、中国における研究の大きな特徴の1つだといえる。

#### <中国の企業および労働者における社会関係資本の機能>

社会ネットワーク研究の中では、企業・職業などにおいて社会関係資本が果たしている役割を明らかにすることも1つの大きな検討課題となっている。現在の中国の市場は需給のバランスが崩れ、土地および自然資源などの価格変動が激しくなるなど、企業にとっては危機的状況を迎えている。そのような状況の下、中国の社会学会では、ネットワーク研究が今後の中国企業の発展や成長を左右しうるものとして、大いに注目を浴びている。

実際、2007年に中国社会学会が社会ネットワークと社会関係委員会が開催した「第3回社会ネットワークと社会関係管理に関する検討会」では、社会ネットワークと企業成長問題というテーマが取り上げられている。その中では（1）企業における信頼と社会ネットワークの問題、（2）新しい知識を生み出さる知識ネットワークの管理、（3）組織ネットワークと組織内での行為の管理、などといった点について議論がなされている。いってみれば、中国の社会学者たちは、中国企業の成長の問題に関わる研究を新しい段階に進めているのである。

社会関係資本もまた、企業の発展や成長に対して重要な要素となりうるものとして考えられている。先にも少し触れた辺燕杰は、企業の社会関係資本に関する研究もよくおこなっている。辺らは、広州にある188の企業に対して行なった調査の結果から、企業における強弱それぞれの紐帯は企業の社会関係資本を形成・拡大する手段となっていることを指摘した。そして、その社会関係資本は企業の経営能力に直接的な影響を与えていることを明らかにしている（辺・丘 2000）。

企業レベルでの社会関係資本、すなわち企業社会関係資本は内部の管理と外部の経営活動から形成されるネットワークを介して得る信頼関係だと考えられることが多い。これに対して、個人レベル、すなわち労働者の社会関係資本は、仕事をとおした社会实践活动への参加から得る個人的名誉や社会関係である。こうした労働者の社会関係資本に関しても、

いくつかの研究が見られる。

中国社会において、職業的地位を獲得する際に社会ネットワークが果たす役割は、社会関係資本の主たる課題として研究されている。辺燕杰・張文宏は、天津における労働力の移動に関する調査をおこない、職業資格審査が比較的厳しいなかで、流動する労働者は社会ネットワークを介して情報を獲得し、人脈を形成していることを明らかにした。それはつまり、強い紐帯は市場の転換過程のなかでも効力をもちつづけることを意味し、ひいては社会ネットワークが強い社会関係を通じて中国の再分配体制の具体的な計画にまで影響を与えることになる、と述べている（辺・張 2001）。

趙延東（2002）は、武漢市で仕事を失った職員たちが再就職する過程の事例分析を通して、社会転換期における社会関係資本と人的資本（教育を受ける程度）の機能やその変化を検討した。調査結果から、仕事を失った70%の職員たちは再就職する際に社会ネットワークの手段を利用していることが明らかになった。そして、社会関係資本のそうした機能が最も際立つ段階とは、労働市場がまだ建設されていない時期だと述べている。

中国における社会学研究の流れでは、社会関係資本とは、信頼や互酬性の規範からなりたつ社会ネットワークと、そこに埋め込まれた社会的資源としてとらえられている。そして、企業組織レベルの社会ネットワークと社会関係資本は、企業間での継続的な取引や協力関係においても大きな意味をもってきた。また近年、国際的にも国内的にも、複数の企業が協力して事業を展開するという企業間ネットワークを有効に利用する戦略が一般的になっている。つまり、企業の社会関係資本は、中国社会の経済を効率化し、企業発展を促進させるさまざまな機能を果たしているといえよう。

また、特に最近では、仕事上の支援ネットワークの研究が多くなされてきている。例えば、趙方杜・夏麗は、支援ネットワークによって中国現代企業において仕事を獲得する過程を論じている（趙・夏 2009）。こうした支援ネットワークも、中国企業の成長を左右するものとして注目を浴びている。

### 3-1-3 現代中国における地域社会のネットワーク

現代の中国社会では、急速に都市化が進んでいる。都市に住む人々がもつ社会ネットワークは、もはや農村におけるそれとは大きく異なったものとなっている。また、都市社会では今までに見られなかった新たなネットワークも生じてきている。

そこで次に、社会支援ネットワークに焦点をあて、伝統的な農村における研究との違いを明確にしつつ、都市における研究をまとめよう。それとともに、都市で生まれてきた新たなネットワークに関する研究についてもまとめることにしよう。

#### <農村における社会支援ネットワーク>

近年、中国の農村では、農民が従来よりも自由な立場になり、自ら発展するために市場競争に参加することが可能になった。それにともない、農民たちがもつ社会ネットワーク

も今までのものとは異なってきている。例えば、都市に移動した農民がもつネットワークは、かつての強い紐帯で結ばれた伝統的な血縁・地縁などの基礎ネットワークから弱い紐帯で結ばれたネットワークへと変化している。また、中国の市場経済が発展するにつれて、農村における社会関係資本も新しいものへと変化している。要するに、中国の農村では人々の社会ネットワークが著しい変化を見せているのである。そこで、次に、農村から都市へという動態の中での社会ネットワーク研究についてみていくことにしよう。

中国農村をフィールドとする社会ネットワーク研究では、ネットワークの中でも社会支援ネットワークに注目するものが多い。例えば、張文宏の調査チームは、天津の農村をフィールドとして、社会支援ネットワークに注目した質問紙調査をおこなっている。そしてその結果から、天津の農村の支援ネットワークは収束性が高く、異質性が低く、緊密性が高いといった特徴を示すことが明らかになっている（張・阮 1999a）。

劉軍は多くの欧米の研究をふまえ、中国北方の農村における社会関係を全体的な視角から検討すべく質的および量的な研究をおこなっている。その中で彼は、中国農村の研究では「二人関係」や「三人関係」といった視点での研究が多いが、それらにとらわれず支援ネットワークの全体構造にも注目した研究が必要だと述べている。その上でさらに、支援ネットワークの中に、支持関係だけでなく、中立関係やマイナス関係も存在しており、それぞれ農村での生活において影響力をもっていることを明らかにしている（劉 2006:135-168）。

農村社会学および社会ネットワークの研究をする賀寨平は、農村のなかでも高齢者の社会支援ネットワークに注目して、その構造や社会的地位と社会支援ネットワークの関わり、および社会支援ネットワークが高齢者におよぼす心理的・健康的な影響と効果を検討した。その中でも特に、配偶者の支援度は高齢者の生活満足度と健康状態に強い影響を与えており、また、高齢者は社会支援ネットワークに依存していることが明らかにされている（賀 2004:210-230）。

中国における人々の社会生活や社会移動の様子は都市よりも農村の方が単純であるが、農村の間にも村落間格差が存在する。この点においても、費孝通の研究、中でも彼の「差序格局」という概念を抜きにして語ることはできない。ここで紹介した研究のうち、劉軍の研究は「差序格局」という概念をさらに深めて補完するものである。そして、さまざまな研究結果から、欧米の社会学における知見とは異なる、中国農村独特の結果がもたらされているといえるだろう（劉 2006:23-35）。

#### <都市における支援ネットワーク>

都市と農村の支援ネットワークを比較することに関心をもつ中国研究者は、中国においても社会支援ネットワーク研究の進展につれて増えてきた。張文宏・阮丹青は、農村住民と都市住民の支援ネットワークの比較研究から（1）親族が社会支援ネットワークの中で非常に重要な機能を担うことは都市・農村に共通であること、（2）親族が経済支援ネット

ワークの重要な役割を果たすのは、農村において顕著であること、(3) 友人が精神的な支援ネットワークの重要な機能を果たすのは、都市において顕著であること、などを明らかにしている(張・阮 1999b:14-19)。

李沛良らは、家族関係に注目した研究をおこない、香港と北京の住民の支援ネットワークに関する調査をおこなっている。その結果、近親は支援を提供する際に重要な機能を発揮しており、核家族の関係が香港と北京の住民支援ネットワークの中で最も重要であることが明らかになっている(李・阮・張 2004)。

また、中国社会では少子高齢化が年々進行しており、これにともない都市社会における高齢者の支援ネットワークを分析する研究も多くなされてきている。劉精明らは、社会階層や人口流動といった視点をふまえ、北京とリバプールのそれぞれにおける高齢者支援ネットワークの特徴を捉え、文化背景が異なる2つの都市の共通点や相違点を検討している。そして、北京とリバプールは背景の違いによる影響はあまりないが、高齢者の共通点が多く、支援ネットワークも類似している。そして、北京では高齢者の教育レベルは他の国よりやや高いものの、男性より女性の教育レベルが低いため、高齢者支援ネットワークが家族に依存しやすいことを明らかにしている(劉・Wenger 1998)。

李沛良の研究では、政治制度と社会発展のリズムが異なるにも関わらず、2つの都市の間で個人支援ネットワークの形成プロセスが非常に似ていることが示されており、こうした傾向は多くの中国の都市部に共通したものであるという(李 2001:370-377)。さらに、劉らの研究からは、中国都市部の社会的ネットワークは、欧米の都市部におけるネットワークとの類似性が示唆されている(劉・Wenger 1998)。この欧米社会との類似性は、中国都市部における社会的ネットワークの特徴だといえる。

また、現在、中国都市部では、改革開放以後の政策的変化に伴い「社区」建設と呼ばれる基層管理体制の改革が進められている。今後の中国都市部においては、こうした「社区」が大きなインパクトを与えるものになると考えられている。それゆえ、こうした「社区」は、都市部のネットワークを大きく変容させる可能性があり、新たに独特な傾向がもたらされるかも知れない。いずれにせよ、今後「社区」に関わる社会的ネットワークについての研究には注目する必要があるだろう。

### 3-2 社会ネットワーク研究の新たな可能性—友人ネットワークへ

既に述べたとおり、中国社会では血縁や地縁、あるいは家族などの伝統的なネットワークが現在も重要視されており、基本的なものとして他のネットワークを支えている。しかし近年、ネットワークの多様化につれてそれらの重要性は減少しつつある。反対に重要性が増していると考えられているのが、友人関係など個人レベルでの弱い紐帯から結ばれる関係である。たとえば、前に紹介した張・阮の天津における調査結果からも、地縁・業縁ネットワークだけでなく、友人ネットワークも重要な結節点になっていることが示唆されている(張・阮 1999a)。

こうした個人レベルのネットワークは、中国社会の中で新たな動きを見せるものであり、今後も重要になると考えられる。そこで、最後にこうした個人レベルのネットワークに関する動きをまとめ、今後の研究の方向性について検討することにしよう。

### 3-2-1 友人ネットワークへの注目

#### (1) 相談ネットワーク

中国人民大学が2003年からおこなっているCGSS調査では、相談ネットワークに関する質問が設けられ、分析がおこなわれている（第四章で紹介する）。この中でも興味深いのは、相談ネットワークの中で友人が親族や仕事上の同僚より優先されている点である。経済と文化の発展にともない、家族に代表される旧来のネットワークだけでなく、友人関係という友人ネットワークが人々の生活の中で拡大し、重要な位置を占めるようになってきている様子がここから見てとれるのである。

#### (2) 拜年ネットワーク

中国において社会ネットワークを検討する際に、「関係」を大切にする中国人の日常生活や習慣に着目して議論をおこなう研究者が多い。その中でも、近年、拜年ネットワークに関する研究がおこなわれてきている。

拜年ネットワークとは、最も伝統的な祭日である春節期間に、人々が新年の挨拶をおこなう際の社会ネットワークのことを指す。これは中国の伝統文化の下で人々が人脈関係を維持し発展させるための独特なネットワークといえる。この拜年ネットワークに関しても、日常生活の重要な問題を相談するネットワークと同様に、個人レベルのつながりが広がりつつある傾向がみられている。

CGSS2003, CGSS2006 のデータを用いて、拜年する対象の構成と数の比率が検討されている。その結果、親戚は拜年ネットワークの中で、なお主な部分ではあるが、その次には友人が挙げられている。しかも、2006年では2003年よりも友達の割合が増加してきていることが明らかとなった（第四章で紹介する）。

相談ネットワークだけでなく、拜年ネットワークにおいても、友人関係が重要性を増してきている。このことから、友人ネットワークが重要な社交手段になりつつあるという先に述べた傾向は、中国社会において広く当てはまる可能性を示しているといえるだろう。

#### (3) 家族

先に論じたように、家族関係は中国社会において最も基本的な社会関係となっている。その家族関係からも、友人ネットワークの形成の動きが見られる。

家族を大切にする半面、現代中国では、若者たちが個人の自立と自己責任の確立、自由と安定の両立が求められている。そこで、このような個人の自立を支援し、自由な個人を結びつける新たな社会ネットワークをつくる必要が出てくる。すなわち、伝統的家族関係

を基盤としながらも、そこから新しい個人レベルの友人ネットワークが形成される可能性が出てくるのである。

近年、「社区」活動団体等などの新しい組織・ネットワークが現れ、それらが中国の人々のある種のよりどころとなっている。「社区」における活動に参加している人々が、基本的に老年層が多く、太極拳などの活動をよく目にする。従来の家族関係を保持しつつ、生活の場以外で形成されるこうした友人ネットワークは、上記の新たなネットワークの最たる例だと考えられる。これまでの生活の場に比べ、開かれた場であるこのような集団ネットワークは、人と人との新しい交流の場として、また、中国都市の市民意識の発露の場としてのさまざまな可能性を有しているといえよう。

### 3-2-2 階層論的な研究とその限界

また、既に若干指摘したが、社会ネットワーク研究では、社会階層を射程に含む検討が多くおこなわれている。

張文宏は、都市市民の相談ネットワークの構造を検討する際、そのネットワークの特徴と形態は所属する階層によって異なるという仮説のもとに実証をおこなっている。調査データから、各社会階層に属する人々により、相談ネットワークの構造および相談内容、コミュニケーションのとり方にはかなりの違いが存在している。そして、個人の特性よりもむしろ、社会的地位のほうがネットワークの特徴を決定する要因となっていることを主張した（張 2006:170-185）。

拜年ネットワークについて検討をおこなった辺燕杰も、類似の指摘をおこなっている。彼によれば、階層間の拜年ネットワークは階層内のそれほど緊密ではなく、階層ごとにその形態もかわってくることを明らかにしている（辺 2004）。

また、辺燕杰・李路路も、CGSS データの分析を通して、農村社会の階層構造や変容について論じている。その中で彼らは、都市や農村の友人ネットワークの拡大とその発達は、社会の流動性を促進すると主張している（辺・李 2008:290）。

張文宏をはじめとする研究は、社会ネットワーク研究における階層論的な研究の重要性を指摘するものである。たしかに以前の中国社会では経済格差が大きく、日常生活の水準にもかなりの差があったため、人々のネットワークも限定的なものになりがちであった。そしてその後、経済発展によって低い階層に属していた人々が徐々に上に移動していくにつれ、そのような階層内ネットワークにも限界が生じている。こうした意味では、階層論的な視点は重要であるといえる。

だが、経済発展がさらに進むと、中流階層の範囲がさらに拡大し、多くの人々が中流階層に属するようになる。そうになると、これまではそれぞれに大きな特徴を生み出していた階層格差があまり意味をなさなくなる可能性がある。つまり、今後の中国社会においては、社会ネットワークの階層間の差異に関する検討だけではなく、階層内部での多様性にも注目する必要があるといえるだろう。



### 3-2-3 趣味ネットワークの可能性

以上、中国における社会ネットワーク研究を概観してきた結果、友人ネットワークの広がりという大きな流れのあることが明らかになったが、さらに新たな可能性をもつものとして趣味ネットワークをあげることができる。

中国経済が発達するにつれて市民の余暇生活も豊かになり、人々は余暇時間を重視するようになってきた。その中で、仕事あるいは勉強以外の、趣味のためのクラブやサークルに参加する者が急速に増えてきた。現代の中国社会、特に都市部においては、趣味のため余暇時間を利用することが、市民の精神的な健康をもたらしているのである。

近年の中国において、趣味活動として最も頻繁におこなわれているものといえば、スポーツである。特に、最近の中国都市社会では、社区において市民が自発的につくるスポーツサークルなどがたくさん現れてきている。スポーツに関して大きな注目がなされていることは、研究の面でも同様である。2008年に北京でオリンピックが開催されたこともあり、中国のスポーツ社会学<sup>3</sup>も研究領域や研究範囲を拡大し、研究者も増えてきた。例えば、スポーツ文化に関する研究者である韓春利は、中国社会におけるスポーツの発展や、スポーツ運動からおこる社会現象を取り上げ、中国社会の発展におよぼす影響について論じている（韓・曹・孫・王 2008）。

さて、趣味に割く時間が多くなればなるほど、当然ながらそうした生活の中で形成されるネットワークにも変化が生じることになる。すなわち、趣味のためのクラブやサークルなどの中で形成されるネットワークが増えていくことになる。さらに、その趣味の活動に重きが置かれるようになればなるほど、そこでのネットワークというものもまた、人々の生活の中で重要な位置を占めるようになるのである。

そして、趣味によって形成されるネットワークは、人々を緩やかに結びつける新しい社会関係を形づくる。人々は趣味活動の楽しさゆえに、ネットワークに参加する。したがって、旧来の伝統的な社会関係に比べ、より緩やかなつながりが生じることになる。しかし、緩やかではあるがネットワーク内でのコミュニケーションは活発なものであり、人々の心を繋がりやすくする。さらにコミュニケーションの浸透により、社会生活に関する便利な情報を得やすくなるという、情報交換の手段としても機能するようになるのである。

「趣味ネットワーク」とも呼ぶことができるこの新しいスタイルの社会ネットワークは、個人が自らの趣味のために参加するクラブやサークルを通じて形成されるため、友人ネットワークの一部として位置づけることができる。しかも、人口が集中している都市部においては、人々が伝統的な人間関係から解放されることにより、社会ネットワークは個人により選択されるようになってきている。それゆえ、趣味ネットワークのような緩やかな友人関係は、現代の人々にとって非常に重要なものとなりうる。自己実現の「場」を求めスポーツなどの趣味活動へ参加する現代中国の人々にとって、そのネットワークがさらに彼らの社会生活を豊かにしていく可能性が大きいともいえるのである。このような視点からの研究は、今後の社会ネットワーク研究の中でも重要なものとなるだろう。

### 3-3 中国本土社会ネットワークの転換

血縁や地縁あるいは家族ネットワークといったものは、かつて何よりも基本的なものとして存在し機能していた。しかし、時代が進むにつれてその機能はだんだん縮小していき、現在では個人的なネットワークを生み出す基盤としての機能をもつにいたっている。つまり、集団的な側面における機能だけでなく、個人的な側面における機能もまた重要な役割を果たすようになってきたのである。中国社会が伝統的農村を中心とするものから都市を中心とするものへと変化していく流れに沿う形で、こうした転換が起こっているといえる。さらに、ネットワークのこのような変化を受け、社会関係資本に対しても、集団的だけでなく個人的なものとしてとらえる研究も出てきている。

そして、こうした友人ネットワークへの転換の中で、本稿では趣味ネットワークというものが今後重要な論点となる可能性を示した。経済発展とともに都市化が進む中国社会における人々、特に、若者たちの社会ネットワークを論じるうえで、「緩やかな友人とのつながり」という新たな視点をもった研究が重要になるだろう。個人主義と自由への志向が強い中で、相互信頼を形成するために、趣味ネットワークは重要な社会的基盤となりうる。また、集団ベースの硬いものではなく、緩やかな個人ベースの社会関係資本として個々人に与える影響は少なくないと考えられる。現在のところ、このような趣味ネットワークに関する研究はほとんどなされていないが、今後さまざまな研究が生まれてくることが期待される。

ただし、独自性と多様性を兼ね備えた中国人社会における社会ネットワーク研究を、欧米に代表される一般的なネットワーク研究の中に位置づけることが、残された大きな課題だといえる。こうした問題に取り組むことで、グローバル化によって 21 世紀の社会共通の課題となった「多文化共生」という大きなテーマに対して、中国のネットワーク研究が今後果たすべき役割が明らかになると考えられる。

### 3-4 小括

中国社会学の進展を歴史的な視点から見た流れや、中国における社会ネットワーク研究を検討してきたと言えるのは、中国若者たちの間に、友人ネットワークの広がりという大きな変化があることが明らかになった。

また、趣味によって形成されるネットワークは、人々を緩やかに結びつける新しい社会関係を形づくる。グラノウェッター (Granovetter 1973) の理論において、緩やかではあるがネットワーク内でのコミュニケーションは活発なものであり、人々の心を繋がりやすくする。それにより、社会生活に関する便利な情報を得やすくなり、情報交換の手段としても機能するようになるのである。

本研究から、趣味ネットワークとは緩やかな関係であり、「弱い紐帯」を選択できる幅広い関係性だと考えることができる。欧米社会学理論、中国本土社会における階層やネッ

トワーク研究の進展，中国社会ネットワークの変化について，検討してみた。

次章では，CGSS のデータから，中国社会の現象を検証し，社会ネットワーク理論を検討する上で，中国本土や在日中国人若者を対象とした本調査データから，趣味ネットワークと社会参加の関係について量的や質的な分析手法によって考察していく。

### 第三章 注

1) 「差序格局」とは，中国人の自己を中心とする強弱関係を説明する概念である。詳しくは，費孝通の著作（1985:21-29）を参照。

2) 現代の中国においては，家族企業は，家族関係，あるいは経済関係の具体的な表現形式の1つだということができる。この家族企業というシステムは，中国の経済と文化の発展を受け，今後も長期的に発展していくことになり，特に経済の現代化が進んできている農村部では，家族経済および家族企業が大規模に形成されると考えられる。

3) スポーツ人文社会学とは，スポーツ教育・スポーツ社会学・スポーツ管理学・スポーツ心理学・スポーツ宣伝学などを研究領域とするものである。なかでもスポーツ社会学では，スポーツが人々日常生活の中で存在する重要性が，社会学理論を応用して論じられている。

## 第四章 CGSS データにみる友人ネットワーク

「中国総合社会調査 (CGSS)」は、2003 年から 2008 年まで、(2007 年を除く) 毎年実施された大規模調査である。本章では、2009 年に出版された調査報告書を参照しつつ、公開されたデータの一部を分析することによって、本論文で研究対象とする友人ネットワークの社会的背景を明らかにしていきたい。<sup>1</sup>

### 4-1 CGSS の概要

CGSS データは、2007 年に公開されてから、中国における最も重要な社会調査として、中国内外の各分野の研究者によって、様々な視点から分析されている。また、2006 年から International Social Survey Program (ISSP) の共同調査に参加し、日本の JGSS、韓国の KGSS、台湾の TGSS とともに、East Asian Social Survey (EASS) として 2 年に 1 回、共通モジュールの調査も実施している。

CGSS の調査方法は、年ごとに細部の調整があるものの基本的には一貫しており、中国全体を 28 の省・市・自治区、125 の区・県、500 の街道・郷鎮、1000 の居委会・村委会に層化した上で、19 歳以上 70 歳未満の男女計 10,000 人を抽出する標本調査として設計されている。具体的な調査項目は、調査対象者の個人属性と家庭・居住状況を基本としつつ、実施年によって以下のような重点項目が設定されている。

<2003 年> 戸籍変更、社会ネットワーク (社交)、教育状況、職歴、現職、社会への評価、アイデンティティ、社会 (政治) 的態度と行為

<2004 年> 価値観、アイデンティティ、高齢化と健康状態、人口移動

<2005 年> 精神的健康、経済と社会への評価、社区生活とその制度管理、農村改革管理、村委会の基本状況

<2006 年> 職業と現在の状況、企業改制と経済改革、社会経済的な活動と態度および意識、アイデンティティ

<2008 年> 教育と職業、性格と態度、社交 (ネットワーク) と就職、社会的不平等、グローバル化

2009 年には、中国人民大学の中国調査データセンターが『中国総合社会調査報告 2003-2008』を出版し、全 8 章にわたって分析結果を報告している。本章では、その報告書を参照しつつ、データを入手した上で、学歴、階層帰属意識、相談・拜年ネットワークのデータを中心に分析し、中国社会における友人ネットワークの社会的背景を明らかにしていく。

### 4-2 中国における学歴社会化と中流階層の拡大

経済改革の開始以来、中国社会では階層構造に非常に激しい変動がおこっている。李強によれば、1977 年の大学入試の復活によって、学力や学歴が社会的地位の達成に大きな

影響を及ぼすようになった（李 2002）。

表 4.1 CGSS (2006) 世代（生年）別にみた学歴（%）

世代	最終学歴(行%)					N	合計 列 (%)	平均教育 年数	P
	小学校以下	中学校	高校	専門・短大	大学以上				
1937-1946	60.5	22.1	10.5	3.8	3.1	1300	12.8	5.8	0.000
1947-1956	48.3	31.5	15.6	3.6	1.0	2034	20.1	6.6	
1957-1966	27.4	37.9	27.3	5.4	2.0	2386	23.5	8.1	
1967-1976	27.2	36.8	21.5	9.7	4.9	2424	23.9	8.8	
1977-1988	9.3	32.2	27.6	19.4	11.4	1999	19.7	10.9	
合計	32.2	33.2	21.5	8.6	4.5	10143	100.0	8.2	

CGSS (2006) データから集計

たとえば、2006年のCGSSデータをみると、中国社会では、20代から30代を中心とする若年層の教育レベルが急上昇している（表4.1）。若年層の教育レベルが中高年層のそれを上回り、特に大学以上の教育を受けた人の割合は、年齢が下がるにつれて著しく増えている。1977～88年生まれ（調査時点で18～29歳）のグループの平均教育年数は10.9年で、高校2年生のレベルに達している（調査対象者全体の平均教育年数は8.2年＝中学校2年のレベル）。それは、経済が発展するとともに、特に高等教育の規模が拡大し、中国は学歴社会になりつつあることを示している。

表 4.2 CGSS (2006) 性別・生年別にみた学歴（%）

性別	生年	小学校以下	中学校	高校	専門学校 (中専)	短大	大学以上	合計	N
男性	1937-1946	54.2	24.6	5.3	7.5	4.4	4.1	100.0	683
	1947-1956	40.3	34.6	13.2	6.4	4.2	1.3	100.0	980
	1957-1966	19.5	41.6	24.6	5.9	5.8	2.6	100.0	1067
	1967-1976	19.1	39.2	14.0	11.1	9.3	7.3	100.0	1053
	1977-1988	7.5	31.7	13.4	17.9	17.4	12.1	100.0	898
	計	26.5	35.2	14.8	9.7	8.3	5.5	100.0	4681
女性	1937-1946	67.2	19.4	5.3	4.5	1.8	1.8	100.0	665
	1947-1956	54.3	28.6	7.8	6.0	2.3	1.0	100.0	1065
	1957-1966	34.2	35.7	20.0	4.9	3.9	1.4	100.0	1338
	1967-1976	32.5	34.5	12.5	9.2	7.9	3.4	100.0	1344
	1977-1988	10.1	32.9	11.6	17.1	17.5	10.8	100.0	1050
	計	37.1	31.5	12.4	8.5	6.9	3.7	100.0	5462

『中国総合社会調査報告（2003－2008）』p. 40 から編集

また、1976年以前に生まれた（30歳以上の）男性は、女性より全体的に学歴が高かったが、1977～88年生まれの20代における中・高等教育を受けた人の割合では、男女がほぼ同じになっている（表4.2）。また、民族別に見ると、少数民族に対して漢民族の学歴が高かった。（漢民族の女性は、少数民族の男性より高い。）そして、戸籍種別に見ると、都市戸籍を持つ人の学歴は、農村戸籍の人より高かった。

さらに、本人が18歳時の父親の職業別に学歴分布をみれば、父親が農業を営む男性の学歴は、父親が農業以外の男性のそれを大きく下回っている。女性の場合は、その差がさ

らに大きくなっている。特に、父親が管理職や専門・技術職に就いていた人の学歴が高く、反対に、父親が農業の場合、小学校以下の学歴の割合が非常に高かった（表 4.3）。

表 4.3 CGSS (2006) 父職別にみた学歴 (%)

性別	父親の職業	小学校以下	中学校	高校	専門学校 (中専)	短大	大学以上	合計	N
男性	管理職	10.1	27.8	23.6	13.2	14.4	11.0	100.0	327
	専門技術職	6.7	22.1	25.6	14.4	19.5	11.8	100.0	195
	事務職	6.6	21.6	31.5	12.2	16.0	12.2	100.0	213
	サービス職	9.0	30.6	20.2	14.9	14.9	10.5	100.0	134
	農業職	38.4	39.0	9.4	6.5	4.2	2.6	100.0	2665
	工業職	9.3	36.9	20.4	14.6	11.7	7.0	100.0	861
	その他	42.4	32.6	12.0	5.4	2.2	5.4	100.0	92
女性	管理職	12.6	27.8	21.4	16.5	13.6	8.1	100.0	406
	専門技術職	10.7	25.5	18.9	18.1	14.4	12.4	100.0	243
	事務職	9.3	22.9	25.9	14.0	19.1	8.9	100.0	236
	サービス職	18.9	36.7	21.3	12.4	7.1	3.6	100.0	169
	農業職	55.0	31.7	6.0	4.1	2.5	0.9	100.0	3133
	工業職	10.9	37.5	19.8	13.6	12.2	6.0	100.0	979
	その他	37.0	25.9	11.1	6.2	6.2	13.6	100.0	81

『中国総合社会調査報告（2003－2008）』 p. 48 から編集

なお、報告書では地域による学歴差も分析されているが、中国東部地域の人の学歴は、中部・西部地域よりかなり高い。ここから、経済と教育のそれぞれの発展水準が、互いに関係していることが推測される。

次に、CGSS（2006）の調査データを用いて、学歴と世代別の収入分布を分析する。社会全体における個人年収の分布は、表 4.4 をみればわかるように、「0～1 万元」が 67.4% で最も多く、「1～5 万元」が 23.0% でそれに次いでいる。ところが、5 万元以上 50 万元未満の層は非常に少ないものの、「50 万元以上」は 8.5% いて、上下に大きな格差があることがわかる。他方、学歴別に見ると、大学以上の学歴を持つ人の中では、50 万元以上の個人年収がある人が 21.5% を占め、5 万元以上の人が 3 割近くを占める。ここから、現在の中国社会では、高等教育を受けるほど、非常に収入が高くなるという相関が成立している。

表 4.4 CGSS (2006) 学歴別にみた個人年収

最終学歴	個人年収(2005年分)(行%)					N	計(列%)	P
	0～1万元	1～5万元	5～10万元	10～50万元	50万元以上			
小学校以下	87.0	5.8	0.2	0.0	7.1	3266	32.2	0.000
中学校	73.6	19.7	0.6	0.1	6.0	3369	33.2	
高校	51.4	37.4	1.0	0.2	10.0	2179	21.5	
専門学校・短大	34.2	50.3	1.7	0.5	13.3	874	8.6	
大学以上	22.2	49.2	5.9	1.1	21.5	455	4.5	
合計	67.4	23.0	0.9	0.2	8.5	10143	100.0	

CGSS (2006) データから集計

次に、CGSS（2006）のデータから、階層帰属意識をみていきたい。図 4.1 は学歴別に

見た階層帰属意識の分布である。まず、大学卒以上のグループでは、自分が上層・中上層・中層に属すると思っている人の割合をあわせて 59.4%で一番多かった。反対に、教育を受けたことがないグループでは、82.9%の人が自分は中下層・下層に属すると思っている。現在の中国では、学歴が高いほど社会的地位の自己評価も高くなるという正の相関関係が存在し、その中で中流階層が拡大していることがわかった。先の表 4.1 から、若年層の学歴が突出して高いことをあわせて考えると、特に若年高学歴層に中流意識をもつ人が多いと考えられる。

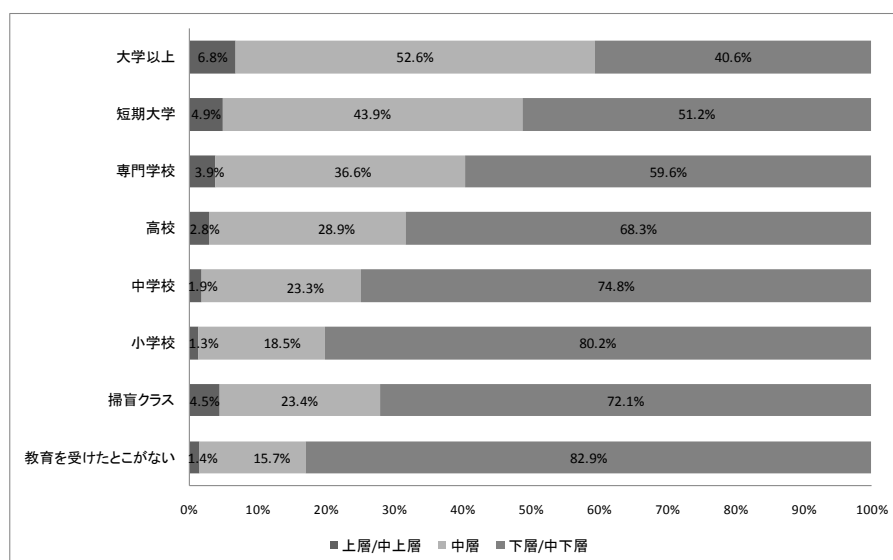


図 4.1 CGSS (2006) 学歴別にみた階層帰属意識 (N=9635)  
CGSS (2006) データから集計

最後に、学歴と初職の関係を確認しておく(表 4.5)。学歴が小学校以下のグループでは、農業を初職としている人が 70.2%と最も多く、中学校のグループでも 44.2%でやはり最も多かった。それが高校卒業レベルになると、工業が 32.9%と最も多くなり、さらに短大・大学卒業以上の人には、専門技術職が 23.8%・43.7%と最も多くなる。ここから、短大・大学を卒業することが、初職でホワイトカラー層に入る重要な条件であることがわかる。

表 4.5 CGSS (2006) 学歴別にみた初職の分布 (%)

	管理職	専門技術職	事務職	サービス職	農業職	工業職	その他	合計	N
小学校以下	1.5	0.6	0.9	2.6	70.2	10.6	13.8	100	3266
中学校	4.5	2.4	3.4	6.9	44.2	25.5	13.2	100	3369
高校	6.9	7.4	7.8	13.2	18.4	32.9	13.4	100	1369
専門学校(中専)	5.6	17.2	9.4	12.1	12.1	28.8	14.9	100	919
短大	7.2	23.8	19.6	6.4	4.7	15.0	23.3	100	765
大学以上	8.1	43.7	11.9	2.6	2.0	9.9	21.8	100	455

『中国総合社会調査報告 (2003-2008)』 p. 72 から編集

以上にみた中国社会における階層構造の変動は、一応、各国に共通な近代化の経路に沿うものではあるが、急速な経済発展とともに、巨大で多様な社会における都市と農村、あるいは民族間の格差が広がるのみならず、教育制度の変革がさらにそれを加速化している。ここで注目すべきは、都市の高学歴で高収入の若年層という他とはやや隔絶した階層が形成されつつあることである。

### 4-3 職場での付き合いと重視する関係

前節でみたように、中国社会の階層構造は、世代・学歴・出身地と戸籍および出身階層によって複雑に分化しており、同じ職場の中でも単線的なキャリアパターンを描きにくい。したがって、職場における付き合いも、組織的なものよりも個人的な関係が中心になると推測される。

表 4.6 は、CGSS の 2003 年と 2006 年の調査データを用いて、職場の人間関係について集計したものである。それぞれの調査では関係の種類別に「よく付き合う」「ときどき付き合う」「あまり付き合わない」の選択肢を選んでもらっているが、ここでは各関係において「よく付き合う」が選択された割合を集計した。

表 4.6 CGSS (2003;2006) 職場でよく付き合う相手〔多項選択〕

	同僚	顧客 クライアント	同僚(後輩)	上司	来客	お得意先 サプライヤー	上級部門 機関	下部部門 機関	他の部門 機関	N
2003 %	67.8	41.3	28.4	26.2	20.9	18.7	13.2	12.9	9.6	
2003 N	4677	4295	2750	4593	4394	3774	4419	2912	4316	5894
2006 %	57.3	45.0	20.3	19.0	31.4	26.7	7.4	6.1	4.6	
2006 N	5681	6109	3817	5597	6086	5816	5240	4293	5152	6749

CGSS (2003, 2006) データから集計

ここでは、2003 年と 2006 年の結果の違いを変化としてみるよりも、両調査に共通する傾向を読み取ってみる。まず、もっともよく付き合う相手として職場の同僚があげられるが、これは職場の後輩や上司、あるいは関連機関の人よりも圧倒的に多いことから、上下関係よりも同格関係、公式的な関係よりもインフォーマルな関係が強いことがわかる。

また、同僚の他には、顧客や来客、お得意先との付き合いが、全体的に職場内での付き合いよりも多いことも読み取れる。これは、職業上の付き合いが組織的なものよりも個人的・対人的な性格の強いことを示唆している。

古来、中国は関係を大事にする社会といわれ、現代においても仕事上の付き合いが重視される点は変わっていない。しかし半面で、より対等で緩やかな個人ベースの関係が志向されつつあるといえる。

### 4-4 パーソナルネットワークにおける友人関係

パーソナルな関係に注目する研究は、社会ネットワーク研究の世界的な活発化を受け



て、中国においても調査研究が進められている。ここでは、相談ネットワークと拜年ネットワークに関するデータの分析を試みる。

相談ネットワークとは、日常生活の中で、自分が重要な問題について相談する相手から形成されるネットワークである。相談する内容について、CGSS (2003) の質問文では、「具体的な用事」「感情・精神的な問題」「生活・仕事・その他に関する社会的な問題」が中心になっている。ここでは、最終学歴別に相談相手の変化をみる。表 4.7 より、まず合計で、1 人目と 2 人目の相談相手として家族が最も多く、次いで多いのが友人である。そして、3 人目以降では友人を相談相手にあげる人が最も多くなっている。しかも、友人は、親戚・同僚・近隣よりも常に上位にあげられており、その重要性がわかる。

表 4.7 CGSS (2003) 学歴別からみる相談の相手 (列%)

最終学歴	相談相手	一人目	二人目	三人目	四人目	五人目
小学校以下	家庭成員	59.5	35.5	26.9	18.8	12.3
	親戚	14.0	25.0	26.9	28.5	26.4
	友人	11.2	14.8	15.7	15.0	19.2
	同僚	4.2	6.8	8.8	12.1	14.6
	近隣	10.2	16.5	20.2	24.4	26.1
	その他	0.9	14.0	1.4	1.2	1.5
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
中学校	家庭成員	55.4	27.7	19.6	13.5	11.6
	親戚	13.5	25.8	26.7	26.4	24.3
	友人	15.5	22.4	26.2	29.5	31.8
	同僚	8.9	11.9	13.4	14.2	14.0
	近隣	7.7	10.6	12.7	15.3	17.3
	その他	1.0	1.6	1.4	1.3	1.1
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
高校	家庭成員	52.3	26.7	16.2	9.0	7.4
	親戚	12.8	21.8	23.1	22.1	19.9
	友人	18.0	27.1	32.2	36.0	36.5
	同僚	10.8	16.5	18.7	21.5	23.8
	近隣	4.4	6.0	7.2	8.8	8.8
	その他	1.8	1.9	2.5	2.6	3.7
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
専門学校・短大	家庭成員	53.1	27.9	15.9	10.3	8.5
	親戚	8.8	18.9	20.0	18.4	14.3
	友人	21.0	28.8	35.3	37.5	41.4
	同僚	12.8	18.8	22.7	25.8	27.7
	近隣	1.5	2.9	3.0	4.1	4.3
	その他	2.8	2.7	3.2	3.9	3.8
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
大学以上	家庭成員	55.2	29.2	19.3	7.2	5.6
	親戚	8.2	13.9	13.2	9.9	12.0
	友人	21.5	33.2	38.9	49.2	48.6
	同僚	10.9	18.2	22.9	28.7	26.8
	近隣	0.7	0.9	1.4	1.1	2.1
	その他	3.5	4.6	4.3	3.9	4.9
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
合計	家庭成員	54.9	28.8	19.0	11.9	9.5
	親戚	12.0	22.2	23.1	22.4	20.1
	友人	17.0	24.6	29.3	32.4	34.8
	同僚	8.9	14.3	17.0	19.6	20.8
	近隣	5.5	7.9	9.3	11.2	12.1
	その他	1.7	2.2	2.3	2.4	2.8
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	<i>P</i>	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000

CGSS (2003) データから集計

学歴別にみると、相談相手全体の中で、学歴に応じて友人の割合も高くなっている。そして、反対に、親戚の割合が、学歴とは逆に低くなっている。ここから、相談ネットワークにおいて、社会階層が高い人ほど友人の重要性が大きいと考えられる。

次に、選択した相談相手に対して、「お互いにとてもよく知っている関係」だと回答し

た割合，すなわち相談相手同士の親密度を図 4.2 に示した．そこで，本人と 1 人目および 2 人目の相談相手との親密度が高いのは家族が多いから当然といえるが，3～5 人目との親密度も全て 90%以上となっており，3 人目以降の相談相手として友人が最も多いことは表 3 からわかっているので，相談ネットワークにおいて，友人との親密度が高く，友人が重要な存在であることがわかる．

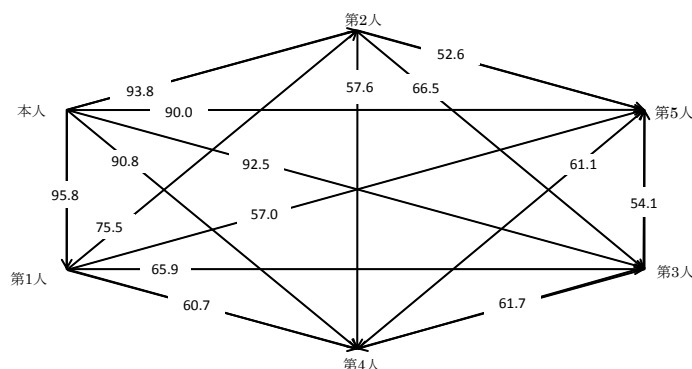


図 4.2 CGSS(2003) 相談ネットワークにおける各成員間の親密度 (%)  
『中国総合社会調査報告 (2003-2008)』 p. 169 から引用

他方，調査報告書によると，調査対象者全体の 5.1%の人が過去半年間以内に，他の人と相談したことがなく，35.6%の人は 1～2 人とだけ相談したという．さらに 44.7%の人が 3～4 人と相談し，6 人以上に相談したという人は 14.6%だった．したがって，広い相談ネットワークをもつ人は，社会全体の中ではむしろ少数派だといえる．また，相談ネットワークにおける性別関係をみると，1 人目の相談相手は，男性から女性へ (25%) と，女性から男性へ (31.6%) が同性同士よりも高かったため，婚姻状況も相談ネットワークに影響すると思われる．相談ネットワークにおける年齢近接度では，1 人目，5 人目，4 人目の順に近く，学歴の近接性では，5 人目と 4 人目が近いので，ここからも，夫婦を除けば，社会的距離の近い友人が最も重要な相談相手であることがわかるが，広い相談ネットワークをもつ層と狭い範囲にとどまる層の格差も指摘できる．

次に，拜年ネットワークの分析をおこなう．拜年ネットワークとは，第三章で紹介したように，最も伝統的な祭日である春節期間に，人々が互いに新年の挨拶をおこなうネットワークを指す．これは伝統的に人々が人脈関係を維持し発展させるための独特なネットワークといえる．

表 4.8 は，学歴別に拜年相手数を集計したものである．まず全体をみると，親戚相手の拜年は回答者の 41.1%が 11 人以上と答えており，多くの中国人は新年に 10 人以上の親戚に挨拶をおこなっていることが分かる．それには学歴による差がほとんどみられない．

他方で，友人相手の拜年は親戚ほど多くなく，全体でみると 1 人から 5 人という回答が 33.8%で最も多い．ところがそれを学歴別にみると，高学歴になるほど拜年する友人数

が多くなり、大卒以上の層では、6人から10人の友人に拜年する人が38.4%、次いで11人以上の友人に拜年する人が25.9%と、親戚への拜年数に近づいていく。これは学歴が高い人々の友人関係の幅が広く、親戚に匹敵する重要性をもつことをあらわしており、ここでも友人ネットワークの階層的特徴がわかった。

表 4.8 CGSS (2006) 学歴別にみた拜年の相手 (行%)

最終学歴	拜年相手	0人	1~5人	6~10人	11人以上	合計	N	P
小学校以下	親戚	5.9	19.8	33.8	40.4	100.0	984	0.066 0.000
	友人	26.1	35.7	25.4	12.8	100.0	971	
中学校	親戚	6.3	18.8	35.2	39.7	100.0	1792	
	友人	19.0	36.5	29.3	15.2	100.0	1781	
高校	親戚	4.8	18.4	36.2	40.6	100.0	1664	
	友人	14.3	33.7	32.0	20.1	100.0	1675	
専門学校・短大	親戚	4.0	16.0	35.0	45.1	100.0	732	
	友人	8.7	30.0	34.2	27.1	100.0	734	
大学以上	親戚	7.5	17.7	31.6	43.3	100.0	402	
	友人	11.2	24.4	38.4	25.9	100.0	401	
合計	親戚	5.6	18.4	34.9	41.1	100.0	5574	
	友人	16.9	33.8	30.7	18.6	100.0	5562	

CGSS (2006) データから集計

また、2005年の調査では、どのような人が信頼できる相手であるかをたずねている。それを学歴別に集計したのが表4.9である。全体的にみると、親戚に対する信頼度が最も高く、次いで職場の同僚があげられているが、学歴が高くなるほど親戚への信頼度はやや低くなり、逆に学校時代の同窓やボランティア活動の友達など、血縁や職業を離れた関係に重心が移っている。

表 4.9 CGSS (2005) 学歴別にみた信頼できる相手 (%)

最終学歴	よく信頼できる相手																	
	親戚			古い同窓			同僚			余暇活動の友達			宗教活動の友達			ボランティア活動の友達		
	列%	行%	N	列%	行%	N	列%	行%	N	列%	行%	N	列%	行%	N	列%	行%	N
小学校以下	37.8	89.2	3828	30.2	61.2	3079	33.3	68.6	3045	29.2	29.4	1928	38.8	29.2	1707	26.5	31.1	1909
中学校	29.7	87.1	3081	31.7	65.7	3016	30.2	68.4	2768	28.1	29.3	1863	27.4	25.9	1359	27.6	34.0	1822
高校	17.2	86.8	1785	19.4	68.5	1770	18.6	70.8	1649	20.7	30.5	1313	16.4	24.7	853	21.8	38.3	1276
専門学校・短大	12.0	86.6	1257	14.6	73.0	1250	13.9	70.7	1229	17.3	32.4	1033	12.9	27.7	600	17.4	39.9	978
大学以上	3.3	83.7	361	4.1	70.3	364	4.0	70.5	352	4.7	27.6	333	4.4	30.8	182	6.6	46.5	316
合計	100.0	87.6	10312	100.0	65.9	9479	100.0	69.3	9043	100.0	30.0	6470	100.0	27.3	4701	100.0	35.5	6301
P	0.012			0.000			0.641			0.454			0.186			0.000		

CGSS (2005) データから集計

さらに、同調査では、社会生活のトラブルに遭遇した場合、それをどのように解決したかについてもたずねている。その解決方法として、親友などよく知っている人に調停してもらった人が30.7%、我慢した人が26.5%、政府機関などを利用した人が20.5%の順になった。この結果から、友人関係は現実の生活面でも重要な役割を果たしていることがわかるだろう。

#### 4-5 小括

本章では、CGSS の調査結果の分析をつうじて、中国社会において友人ネットワークが増殖する社会的背景の解明を試みた。まず、注目すべきは 1977 年に大学入試が復活したことにより、それ以後、すなわち現在の 40 歳代の世代を境に急速に高学歴化が進んだ点である。それは男女差の縮小をもたらす反面、教育環境の異なる漢民族とその他の少数民族、さらには都市戸籍をもつものともたないものの格差を押し広げる結果となった。同時に、ホワイトカラー層の父親をもつ家庭の出身者に進学に有利な環境をもたらした。そして、若年層に偏した都市の高学歴者には他の経済先進国と変わらぬ収入をもたらす一方で、国民の 9 割にはその 1 割に満たない生活を強いている。当然ながら、それは両者の階層意識の分極化にも反映されている。

このように新しく発生した階層格差は、従来の親族と同郷を基盤とした強固な人間関係を浸食しつつある。職場においても、上下関係や組織上の関係から、対等で個人ベースの関係に重心が移りつつある。

その傾向は、相談や拜年などのパーソナルネットワークの分析をつうじて、より明確になった。少子化が進む中で核家族の紐帯はなお強固であるが、親戚や職場の同僚や近隣の関係よりも、多くの人々が友人とのつながりを重視していることがわかった。特にそれは、学歴が高い層においてより顕著にみられる。さらに行政など制度への不信感からも、友人への信頼が重視される。

次章では、都市における事例研究をつうじて、友人ネットワークの実態をさらに詳しく分析していく。

#### 第四章 注

1) Chinese General Social Survey (CGSS ; 中国人民大学社会学系・香港科技大学調査研究中心による実施) は 2003 年から開始された総合的社会調査である。2010 年 6 月 22 日、中国人民大学社会学系 CGSS 研究センターからデータ利用の許可を得て、CGSS(2003,2005,2006)のデータをダウンロードして本稿における分析を行った。CGSS については既に調査報告書が出版されている(中国人民大学調査与数据中心 2009)が、本稿で表に示したデータは筆者が元のデータから再計算した結果であり、上記報告書の結果と細部において相違があることをことわっておく。

## 第五章 瀋陽における趣味ネットワーク

現代の中国社会においては、社会関係が大きく変わりつつあり、こうした急速な変化と多様化の現状を分析するために、集団関係に加えて、ネットワーク的視点の導入が必要だと考えられる。

前章で CGSS のデータを分析した結果から、経済発展につれて高学歴の都市若年層を中心とする中流階層が拡大している趨勢がわかった。さらに若者たちの社会ネットワークが変化するとともに範囲も広がり、伝統的ネットワークから友人関係を中心としたネットワークが優勢になりつつあり、また彼らが多様な友人ネットワークを持ち、特に余暇活動への参加意識が高まっているとの指摘もある（李 2008, 李・王 2009）。本章では、その余暇生活の中で、趣味活動のネットワークに参加する若者たちの事例をとりあげる。量的質的両面からの分析を通じて、若者たちが趣味ネットワークを介して新たな社会関係を形成し、中流階層に着地していくプロセスを明らかにしていく。

### 5-1 調査の背景と概要

中国経済が発達するにつれて市民生活も豊かになり、人々は余暇時間を重視するようになってきた。その中で、仕事あるいは勉強以外の、趣味的なクラブやサークルに参加する若者が急速に増えてきた。この背景には、近年、中国政府が国民健康のため、公共の施設を余暇活動に提供する政策を進めていることもある。特に都市部では、スポーツ・芸術・文化など余暇の趣味活動が多様になっているようだ。また、若者が自発的につくるクラブやサークルなどをたくさん目にする事ができる。

瀋陽は、中国東北部（満州）三省の1つ遼寧省の省都であり、満民族が多く住んでいる。経済的重要性から省クラスの自主権をもつ副省級市にも指定され、市区人口は 506 万人、都市圏人口は 786 万人と東北地方最大の都市である。日本の札幌や川崎の姉妹都市として、文化交流などをおこなっている。工業が盛んであり、郊外には多くの重化学工場があり、中国政府も東北開発を重点的に支援し、瀋陽も近代都市に変貌しつつある。現在、近隣にある撫順と鉄嶺を合併し直轄市への発展をめざしている。

近年、「都市新移民」の流入が増える東北地方の典型的な都市として、大規模な社会調査（李 2012）もおこなわれている。CGSS の第 1 期調査（2003-2008）で、瀋陽市は重要なサンプル都市となっている。第 2 期（2010-2019）の計画においても、瀋陽が、最終サンプルで重要な位置を占めている（中国人民大学、2010「中国综合社会调查抽样设计方案」）。そこで以下の趣味ネットワークの事例研究にあたって、瀋陽を対象都市とすることにした。

2010 年 6 月と 2011 年 7 月に、瀋陽市で趣味ネットワークのフィールドワークを行った。まず、遼寧省社会科学院を訪ねて、瀋陽市で余暇活動をおこなっているグループの紹介を受け、参加者の社会階層・年齢・性別などの基本属性も考慮して、毬球・バドミントン・

アウトドア・書道の4つの趣味グループを調査対象に選択した。選択するにあたっては、高学歴の若年層の事例が比較的多く集められるグループにしぼった。それによって、CGSSデータでは十分に解明できなかった都市若年層のネットワークの実態をさらに詳細に調査できると考えたからである。そして、参与観察を経て、個人・グループへのインタビュー、さらにアンケート調査を実施した。

## 5-2 調査対象4グループの特徴

毬球（ジエンキュウ）は、現在、中国で最も人気のあるスポーツの1つである。近年、競技人口が急増し、参加する人数が最も多い趣味でもある。筆者はその中の「A チーム」を対象に調査した。年齢層は30～55歳、毎月10元の会費を徴収して道具や施設の利用料を支払っている（予算を超えた経費は割り勘で負担）。彼らは平日の朝夕や休日に活動する最も庶民的なグループである。

バドミントンは毬球よりも道具や服装にお金がかかり、若年の中流階層以上の人が主に参加するスポーツである。若い人たちの間で最もよく流行しており、仕事上の新たな関係を求めて参加する人も多い。筆者はその中の「B クラブ」を調査した。年齢層は20～40歳、月会費は200～300元の幅で変動する。これは毬球と同じ場所で練習する場合でもコートの利用料が数倍の高額に設定されているためである。活動は基本的に週末、体育館でおこなわれるが、仕事で忙しい人が多いので、自分の都合がつく時間に参加している。また、参加者はブランドのウェアやラケット等を購入して、それを互いに見せ競うような雰囲気も感じられた。

アウトドアは、大学生も含めた若年層に盛んな活動である。キャンプ、登山、自転車、テニス、水泳など様々な野外活動をおこなう。筆者が調査した「C クラブ」の活動は週末におこなわれるが、各自がQQというチャットソフトで毎日連絡を取り合っており、都合がいい日を決めて参加している。クラブ以外でも食事会や旅行で集まることもあり、夫婦で参加する場合もある。会費は決まっておらず、活動当日に発生する料金はそのつど参加者が負担し合う。

書道クラブは一般的に中年層の参加者が多いようだが、筆者が調査した「D クラブ」のメンバーは広い年齢層にわたっていた。毎週の活動とともに、書道展を開催したり、他の書道展に作品を出展したりしている。会費は毎月変わるが、基本的には50～100元の間ということだった。会費は活動場所の利用料や道具を購入するためである。

以上4グループの参加者は常に変動しているので、正確な会員数は把握できなかったが、アンケートの調査対象として紹介されたのは、毬球のAチームが134名、バドミントンのBクラブが188名、アウトドアのCクラブが9名、書道クラブのDクラブが19名、計350名だった。

### 5-3 アンケート調査データの分析

参与観察，個人インタビューやグループインタビュー結果を検討した後，2011年7月に4つのクラブに参加している計350人を対象者として，アンケートを配布した．329人の有効回答（回収率94%）を得た結果を，以下に分析する．質問紙は中国語で作成したが，ここでは筆者が翻訳したものをを用いる（巻末の資料を参照）．

#### 5-3-1 調査対象の社会的背景と参加するクラブの相違

まず，調査対象者の社会的背景の特徴を確認しておく．表5.1から，調査対象者の年齢層をみると，18歳以上30歳未満の人が73.8%を占めており，若年層が大部分であることが確認された．また半数近くが大学を卒業しており，高等教育を受けた人は全体で9割近くにおよんでいる．そして若年層ほど高学歴である．さらに表5.2より，上層あるいは中流階層に属すると意識している人は，大卒以上の87.9%で，高卒以下の43.9%の2倍となった（しかも，高卒以下で自分を上層か中流の上と考える人は皆無だった）．このような傾向は前章のCGSSデータでもみることができたが，本調査の調査対象グループでは，それが強調された構成になっている．

表 5.1 世代別にみた最終学歴

世代	最終学歴(行%)			N	合計 (列%)	P
	高校以下	専門・短大	大学以上			
20代(18-30歳)	6.0	28.9	65.1	83	25.5	0.000
30歳代	9.6	38.9	51.6	157	48.3	
40歳以上(41-55歳)	29.4	50.6	20.0	85	26.2	
合計	13.8	39.4	46.8	325	100.0	

表 5.2 学歴別にみた階層帰属意識

最終学歴	階層帰属意識(行%)			N	合計 (列%)	P
	上/中の上	中	中の下/下			
高校以下	0.0	43.9	56.1	41	13.1	0.000
専門・短大	22.6	50.0	27.4	124	39.5	
大学以上	23.5	64.4	12.1	149	47.5	
合計	20.0	56.1	23.9	314	100.0	

次に，個人年収の分布をみよう．表5.3は，世代別に個人年収の平均値を出したものである．その結果，18歳以上30歳未満では55,983元（約80万円），30歳代では75,015元（約100万円），40歳代以上では46,779元（約65万円）だった．この結果からわかることは，40歳を境に若年層の年収のほうが高いということである．

表 5.3 世代別にみた個人の平均年収

世代	平均年収(元)	N	標準偏差	有意確率
20代(18-30歳)	55983.3	83	83885.519	0.187
30歳代	75015.6	161	156905.057	
40歳以上(41-55歳)	46779.4	85	58277.198	
合計	62919.1	329	121613.442	

さらに表 5.4 をみれば、学歴によって平均年収に大きな違いがあることが明らかであり、ここから表 5.3 における年齢と収入の逆転が説明できるだろう。

表 5.4 学歴別にみた個人平均年収

最終学歴	平均年収(元)	N	標準偏差	有意確率
高校以下	29356.4	45	25925.680	0.001
専門・短大	41534.6	128	21741.807	
大学以上	86006.0	152	160034.331	
合計	60647.3	325	113112.956	

彼らの具体的な生活状況を見るために、表 5.5 では学歴別に居住形態をみた。その結果、全体的にみても 4 分の 3 の人が自分で購入した家に住んでいるが、その割合は高学歴になるほど高い。反対に親から相続した家に住む割合は高学歴になるほど低くなっている。

表 5.5 学歴別にみた居住形態

最終学歴	居住形態(行%)			N	P
	賃貸住宅	親から相続した家	自分が購入した家		
高校以下	18.6	30.2	51.2	43	0.000
専門・短大	8.0	21.6	70.4	125	
大学以上	4.0	10.1	85.9	149	
合計	7.6	17.4	75.1	317	

近年、マスメディアでは、不動産価格の上昇と中流階層による自宅購入熱を重ねて報道されることが多い。階層研究者である陸学芸によると、現代中国の中流階層とは、25 歳～35 歳で大卒以上の学歴をもち、3.5～10 万元の年収があり、都市に暮らす社会資源分配の中間に位置づけられる人々であり、主に、金融・証券・IT・ハイテクなど新興産業・知識集約型産業の専門家、外資企業の管理職とホワイトカラー、党や政府の幹部と知識人、民間企業家、国有企業の中間管理職、株式会社の従業員等によって構成されている。したがって、本調査対象者の主要部分は、まさにその中流階層の典型である。彼らは中国社会の中でやや突出した存在で、同年代・同階層との付き合いに熱心なことも理解できる(陸 2002)。

次に、彼らが参加している趣味のグループの種類による相違点がないか分析してみる。



調査対象者のうち「バドミントン」に参加している人が 53.8%で最も多く、次に「毬球」が 38.4%である。二つを合わせると全体の 92.2%となり、逆に「ハイキング」と「書道」のグループは統計上、個別的に分析するためには人数が少なかったため、ここでは、「毬球」と「バドミントン」の二つクラブを特にとりあげ、階層的背景に特徴がないかを比較した。

表 5.6 で、二つのクラブの年齢層を比較すると、「バドミントン」のほうが 30 歳未満のメンバーが多く、全体的により若い人が中心となっている。また表 5.7 で、学歴別に集計すれば、「バドミントン」クラブの参加者の学歴が高かった。さらに表 5.8 で、両クラブのメンバーの平均年収を比較すると、「バドミントン」は「毬球」より二万円ほど高かった。「バドミントン」クラブに参加している人々の社会的なイメージは、「金持ち」で「若い」人々というもので、それが若者の間でバドミントンが流行している理由になっているようである。総じて都市において趣味のクラブに参加している人々が、中流層と重なっていることは先にみたとおりであるが、ここにみた二つのクラブの違いは、中流層の中でも所属クラブによる差別化が occurring ことを示している。

表 5.6 世代別にみたクラブの構成

世代	参加しているクラブ				N	P
	毬球		バドミントン			
	行%	列%	行%	列%		
20代(18-30歳)	23.1	14.0	76.9	25.3	65	0.002
30歳代	49.2	60.7	50.8	51.4	132	
40歳以上(41-55歳)	45.0	25.2	55.0	23.3	60	
計	41.6	100.0	58.4	100.0	257	

表 5.7 学歴別にみたクラブの構成

最終学歴	参加しているクラブ				N	P
	毬球		バドミントン			
	行%	列%	行%	列%		
高校以下	50.0	12.3	50.0	8.8	26	0.438
専門・短大	44.4	41.5	55.6	37.4	99	
大学以上	38.3	46.2	61.7	53.7	128	
計	41.9	100.0	58.1	100.0	253	

表 5.8 参加クラブ別にみた個人平均年収

参加するクラブ	平均年収(元)	N	標準偏差	有意確率
毬球	58766.86	107	126569.945	
バドミント	78891.50	150	141580.759	
合計	70512.76	257	135642.701	

現在、中国では、所得格差の拡大が社会の不安定化をもたらし、社会問題を生んでいる。

格差を是正し中流層を育成していくことが、政府にとって喫緊の課題となっている。なぜなら、中流の拡大が相対的に貧富の格差を縮小することになると期待されるからである。2000年代に入り、「中流階層」をめぐる議論も活発になっている。改革・開放が始まって以来、中国人一般の生活水準は著しく向上し、外見上は先進諸国に見られた「中流社会化」の様相をあらわしているが、この調査結果によって、中流化が都市の中において、平等化だけでなく、世代や学歴、さらには生活様式や趣味グループの違いによるあらたな格差を生んでいることがあきらかになった。

### 5-3-2 日常生活における友人ネットワーク

経済改革にともない、中国の都市においては著しい社会変動がおこっているが、地域・行政・産業と相互関連させながら、個人の生活や活動の多様性を解明する研究の積み上げが求められている。

中国では、友人（朋友）という言葉によって、個人間だけではなく、ビジネスや政府間の関係まで保とうとする。また「関係社会」といわれるほど、親族をはじめ、社会的地位のある先輩や友人との人間関係やコネを非常に大切にする伝統がある。他方、中流社会化にともなって、仕事以外の余暇生活を大事にする傾向も強まっているが、それは人間関係のあり方にどのような変化をもたらしているのだろうか。前章のCGSSの質問フォーマットにそって、瀋陽の趣味グループ参加者のパーソナルネットワークを分析していきたい。

ネットワーク調査では、一般的に「ふだん付き合う相手」と「相談する相手」に分けて質問することが多いが、まず、日常生活でよく付き合う相手を3人目まで集計した結果が表5.9である。そこで注目すべきは、最もよく接触するのは当然のことながら家族だが、その割合が高学歴になるほど減少し、かわりに（特にクラブやサークルの）友人が占める割合が増えるということである。大学卒業者にいたっては2人目から家族を上回っている。他方、高校卒業者において少し親戚との関係がみられ、職場の同僚との付き合いは高学歴ほど増える傾向にある。しかしそれらも家族および友人との関係にはおよばない。そして近隣との付き合いは最も少ない。ただし、この結果は、彼らの多くが若年層に属することも考慮に入れて分析しなければならないだろう。

表 5.9 学歴別にみた日常に付き合う相手 (列%)

最終学歴	付き合い相手	1人目	2人目	3人目
高校以下	家庭成員	86.0	69.8	67.4
	親戚	0.0	4.7	9.3
	近隣	2.3	0.0	4.7
	同僚	0.0	7.0	7.0
	クラブ・サークル友人	4.7	18.6	9.3
	他の友人	7.0	0.0	2.3
	N	43	43	43
専門・短大	家庭成員	84.9	63.5	42.7
	親戚	0.0	0.8	2.4
	近隣	0.0	0.0	0.0
	同僚	4.0	8.7	12.1
	クラブ・サークル友人	7.9	19.0	25.0
	他の友人	3.2	7.9	17.7
	N	126	126	124
大学以上	家庭成員	71.1	30.9	20.4
	親戚	0.0	0.0	1.4
	近隣	0.0	0.0	1.4
	同僚	6.0	18.1	14.3
	クラブ・サークル友人	14.1	36.2	43.5
	他の友人	8.7	14.8	19.0
	N	149	149	147
<i>P</i>		0.017	0.000	0.000

表 5.10 は、相談ネットワークの集計結果である。ここでわかったことは、前の表 5.9 と比べて、全体的に友人の割合が高くなっていることである。ただし先の付き合いネットワークの場合、クラブやサークルの友人のほうが多かったが、この相談ネットワークでは、それ以外の友人や同僚の割合も高い。したがって、日常的な付き合いの関係と相談をする関係を彼らは使い分けているようだ。

表 5.10 学歴別にみた相談の相手 (列%)

最終学歴	相談相手	1人目	2人目	3人目
高校以下	家庭成員	66.7	60.5	58.5
	親戚	0.0	0.0	7.3
	近隣	0.0	0.0	4.9
	同僚	4.4	16.3	12.2
	クラブ・サークル友人	13.3	14.0	9.8
	他の友人	15.6	9.3	7.3
	N	45	43	41
専門・短大	家庭成員	76.8	50.0	39.2
	親戚	0.0	1.6	4.2
	近隣	0.0	1.6	1.7
	同僚	7.2	14.3	11.7
	クラブ・サークル友人	4.8	23.8	29.2
	他の友人	11.2	8.7	14.2
	N	125	126	120
大学以上	家庭成員	70.2	34.0	15.0
	親戚	0.7	0.0	2.0
	近隣	0.7	0.0	0.7
	同僚	5.3	12.0	17.0
	クラブ・サークル友人	9.3	32.7	44.9
	他の友人	13.9	21.3	20.4
	N	151	150	147
<i>P</i>		0.669	0.002	0.000

以上の結果から、友人とのネットワークには、日常生活の中での功利的なネットワークと個人の感情的なネットワークがあると考えられる。次の表 5.11 は日常生活に必要な情報をどこから入手するかを、学歴別に集計したものである。

表 5.11 学歴別にみた日常情報の入手先（多項選択 行%）

最終学歴	親戚	友人	新聞/雑誌 /書籍	インター ネット	テレビ/ラ ジオ	専門的情 報提供 サービス 機関	趣味ネッ トワーク	職場	他の社会 活動の参 加	その他	N
高校以下	62.8	67.4	37.2	46.5	72.1	4.7	37.2	51.2	23.3	0.0	43
専門・短大	35.2	77.9	48.4	82.0	76.2	2.5	58.2	38.5	17.2	2.5	122
大学以上	24.3	96.1	30.9	90.8	86.1	8.6	80.9	30.3	19.1	0.7	152
合計	33.8	85.2	38.5	81.4	80.4	5.7	66.2	36.3	18.9	1.3	317
<i>P</i>	0.000	0.000	0.013	0.000	0.042	0.091	0.000	0.034	0.684	0.302	

表 5.11 からわかるのは、情報の主要な入手先は、友人関係とメディア関係に大別できるが、いずれも高学歴になるほどその比重が高まっている。また、大卒にとって趣味ネットワークが重要であることもあらためて確認できた。友人（趣味）ネットワークには、友人の紹介によって入ることが多く、またそこで様々な人に会って情報を得る。反対に、高卒以下の人々は、親戚や機関あるいは職場など、直接的な関係があるところから情報を入手している。したがって、高学歴者にとって、メディア・リテラシーというまでもないが、友人をつくり、そのネットワークを広げていく能力が重要である。

趣味ネットワークになぜ参加するのかをたずねたところ、最も多い回答は健康のためというもので、交友はそれに次いだ。いずれにせよ、全体として、人々に自分の生活を豊かにしたいという意識が強くなるのがわかる。このアンケートでは、参加をつうじて生活への満足感や、仕事や学校などへの積極的態度がどのように変化したかを4段階できいた。

表 5.12 趣味ネットワークの重要性と生活満足度および積極性への影響

	趣味クラブに参加して以来、生活に関する満足度の変化	趣味クラブに参加して以来、日常生活上に対する積極性
趣味ネットワーク重要性意識	.388**	.311**

\*\*、相関係数は 1% 水準で有意（両側）

記述統計量

	平均値	標準偏差	N	P
趣味ネットワークの重要性意識	1.725	0.610	291	0.01
趣味クラブに参加して以来、生活に関する満足度の変化	1.220	0.594	300	
趣味クラブに参加して以来、生活に関する積極性	1.207	0.637	300	

表 5.12 は、自分の生活の中での趣味ネットワークの重要度と、参加による満足度および積極性の向上の相関関係をみたものであるが、いずれも正の相関関係があった。

表 5.13 趣味ネットワークへの参加期間によるネットワークの拡大

趣味ネットワークに参加期間	平均値	度数	標準偏差
0～1年	3.7969	64	.40551
1～3年	3.9070	172	.44925
3～5年	3.9348	46	.24964
5年以上	4.0000	16	0.00000
合計	3.8926	298	.40437

続いて、表 5.13 は、趣味ネットワークに参加して以来、人脈関係が広がったかどうかをやはり 4 段階できいた結果である。その結果、1 年未満でも非常に高い割合の人が人脈が広がったと答え、5 年以上参加している人では 100% が最も高い評価をしている。むしろこの結果から、人々は人脈を広げるためにこそ趣味ネットワークに参加していると考えられるべきだろう。また、別の質問では、94.7% の人々が、趣味ネットワークで生活に有用な情報を得たと答えていることから、参加による功利性の追求が感じられる。

以上のアンケート結果の分析からわかったことは、瀋陽という都市の中で、高学歴かつ相対的に高収入の若い中間層という突出した性格を持つ階層が形成されていることである。そして、彼らはさまざまな趣味のグループを形成し、互いに差別化をはかりながら、そのなかで情報を得たり人脈を広げたりすることによって、自分の仕事と生活に対する積極的な態度を養い、かつ満足感を高めている。今後、全世代にわたって高等教育の機会が開かれていけば、このような突出性は緩和されていくのか、あるいはますます強化されていくのか、その解明には政府による政策の影響も注視していかねばならないだろう。

#### 5-4 インタビュー調査の記録

2011 年 6 月から 7 月にかけて、瀋陽市内で、調査対象各クラブの活動や食事会に参加し、共に生活することによって、参与観察をおこなった。そして、個別とグループそれぞれに集中的なインタビューを実施した結果を本節で分析する。

##### 5-4-1 個人インタビュー

###### (1) 生活の安定から自由の希求へ

改革開放以来 30 年、中国人の中に自我と権利の意識が発達し、個人主義の社会が到来したとよくいわれる。とりわけ、中流階層に属する多くの若者の価値観は、伝統から近代へと向かい、欲望の解放による自我の拡大から、社会参加は自己本位的になっている。

以下の個人インタビュー記録では、年齢・性別・仕事・参加時間などを考慮して、8 人の内容を以下に示す。

**Bao (女性, 34 歳)** 大学を卒業した後、国営企業の OL をしている。高校時代からバドミントンを始めたというが、見るからに若々しい女性である。「昔と比べると、最近

は、やっと“小康”に入っている感覚です。給料も増えてきて、かわりに物価も高くなってきたけど、みんなが貯金したお金を使えるようになったと思う。仕事はもちろん大事ですが、もっと自由な時間や豊かな生活を暮らしたいと強く思う。そして、組織的な組合の活動だけではなく、もっと、プライベートな動きをしたい。そして、平等な立場でいろいろな身分を持つ人と出会い、遊びたいです。」(2011年6月27日)

**W (30歳, 男性)** 大学卒業後、区役所の公務員として約8年働いている。「みんなから公務員で羨ましいと言われるが、自分はちょっと仕事で疲れている。うんざりもしている。中国では、区役所という政府機関で働くのは、安定した良い仕事だという目で見られる。でも、それには厳しいところもたくさんある。仕事で真面目な自分を見せ、上司たちに“拍馬屁(媚びること)”することに飽き飽きしている。そして、自由にできる時間がたくさんほしい。もっと自分の場所を探して作りたい気分だ。友達と自然な雰囲気交流したいと思う。」(2011年7月16日)

若年層の若者たちは、年長者と価値観で大きな違いがあり、「自我意識」の強い世代であると見られている。その行動様式の特徴は、余暇生活においてパーソナルなネットワークをつくることに熱心な点で、そこに参加することによって、新しい自分が生まれると多くの若者が考えている。

**Yao (27歳, 女性)** 不動産の社員をしている。「給料が高くなってきて、もっと豊かな生活をしたいという気持ちが強くなってきた。株とかもやっている。自分のため、将来のため、経済的な状況をもっとよくするために頑張っている。社会には不安を感じているので、将来はどうなるのか分からないです。けれども、消費したいと思う。服とかじゃなくて、もっと社会で生きていけるように、自分自身に様々な知識や才能を身につけたいと思う。もちろん、余暇生活でも、友達との時間ももっとほしいし、もっと豊かになりたいです。精神的に満足感を増やしたいのです。」(2011年7月5日)

上記のインタビュー記録から、中国社会は、経済的な要素以外に、社会の文化的状況の変化が人々の意識に大きな影響を与えることを看過していた点、特に80年代以降、文化的状況が大きく変わったことに敏感でなかった点において、大きな限界を抱えているといえよう。要するに、個人的な生活のペースや自由時間への要求が高まり、自意識を強く抱く若者たちが、新たな社会生活を求めている様子がうかがわれる。

## (2) 趣味グループの発足と拡大

中国では、毎日朝晩、特に週末に、公園や住宅街の公共スペースで、様々な活動をしている人々たちをよく見かける。毬球というスポーツは参加しやすく、メンバーも多様で、とてもポピュラーな余暇活動である。

余暇時間といっても、基本的に男性より女性には用事が多くあり、家事・子供や老人の面倒・買い物などに追われて、趣味クラブに参加している女性も、男性より少ない傾向にある。

**Xia (35 歳, 男性)** 4 年前から、毬球クラブの監督を担当している。今は体育館に勤めている。彼から、毬球クラブの広がりについて、たくさん話を聞かせてもらった。「毬球というスポーツは、全国で数万人がやっていると思う。もともと会社から結成されているチームが多くて、今は、自発的に地域から結成されるチームが多くなってきた。毬球は中国から始まったスポーツだが、ドイツ、日本、アメリカでもスポーツの一つとしてやっている。2004 年から 2005 年にかけてルールが統一整備され、各地で試合に参加することができるようになった。」(2011 年 6 月 29 日)

なぜ毬球がそれほど流行っているのかについて、「毬球の参加費が安いからでしょう。毎月 5 円で参加できる。また活動も行いやすい。基本的には、公園などを利用して、少しのスペースがあれば、みんなで楽しくやれる。健康にもいいし、いろいろな人とも出会うし、コミュニケーションが活性的になるし、みんなが楽しくなるから」という。メンバーは、基本的に女性より男性の方が多い。クラブの友達と活動の時だけ会うのではなく、普段も一緒に食事をしたりお茶を飲んだりする。クラブの友達の結婚式に参加したりもする。中国人はもともと余暇にテレビを見る時間が非常に長かったが、テレビを見る時間を他の趣味の活動に利用する人が増えている。それだけ人との交流を重要視している人が増えているからだそうだ。

活動場所については、もともと家の近くの公園が多かったのが、最近、住宅の区内にも専用スペースが作られている。「僕は友達の紹介で参加した。いつもの活動場所が家から近いので、行きやすかったという理由もあった。でも、もともとスポーツが好きなので、趣味のために楽しい時間を作りたい、クラブの友達と交流しやすくて、友達になりやすい。楽しい会話をしながら、人脈ネットワークが広がっていくことも楽しみだ。バドミントンも非常にはやっているが、経済的な負担がかかってくる。クラブ会費も少し高くて、道具も高い。毬球と比べると、上等なイメージもする。」(2011 年 6 月 30 日)

毬球チームの名前も面白く、いろいろな名前がある。参加の仕方も、近くのチームに参加する、友達の紹介で参加する、仲の良い友達がいるチームに参加するなど、自由である。インターネットでチームを見つけて、参加する人もたくさんいる。また、毬球の技術を向上させるため、レベルの高いチームを探し、参加する人もいる。各チーム間で試合を行い、試合をつうじて気が合い友達になるケースもたくさんあるという。

**Yao (27 歳, 女性) 前出** (バドミントンクラブでコーチを担当している)。もともと、会社でバドミントンをやっていたのが、4 年前、自発的な趣味クラブに参加して活躍している。「バドミントンは、最近の数年で若者の間で人気が出てきている。夫婦とか恋人など、カップルか、家族で参加しているケースをよく見かける。また、友達のグループ的な参加者もたくさんいる。毬球よりバドミントンをやっている人は若いです。私は、バドミントンだけじゃなくて、テニスもする。同じバドミントンクラブの友達も、いろいろな活動に参加して、試合をしたりしている。毎日、趣味クラブで練習して、その友達と交流しながら、試合などの情報を教えてもらう。今のバドミントンクラブは、参加者メンバー

が毎日変わるが、よく来るメンバーは決まっている。」

瀋陽市のバドミントンクラブは 20 ほどある。その他、毬球・アウトドアなどの自発的な趣味クラブもいくつか定期的に活動を行っている。一つだけの趣味クラブに参加するだけでなく、多数のクラブの活動に参加するメンバーが少なくないようだ。その活動場所も、中国の政府が提供する公園や体育館等以外にも、彼らが自ら作っている場所もある。

バドミントンクラブの場合、活動する場所が見つからないときもある。その時に、メンバーのみなさんが自発的に練習場所を譲り合う。「やっぱり、みんな活動したい気持ちを強く持っていて、やる気も強い。そして、最近、バドミントンがすごく流行っているので、小学生、中学生、高校生まで、習いたい人がたくさん現れて、バドミントンを教えることも増えてきて、私の仕事の一つにもなっている。」(2011 年 7 月 5 日)

中国では、余暇生活が豊かになり、趣味ネットワークがますます広がっている。そして、小学校からいろいろな競技的スポーツや才能を伸ばすために芸術を学ぶ子供たちも増えている。技能を学ぶ多くの私立専門学校も成立されている。そこに様々な技能を教える先生という職業も現れている。

### (3) 趣味ネットワークによる精神的サポートと情報の獲得

余暇活動に参加して、余暇生活の時間を有効に利用でき、精神的にも元気になったという声がよく聞かれる。現在の中国社会では、いろいろな運動会にも毬球種目を含めるようになってきている。参加する会員たちも毬球に熱心で、趣味クラブのメンバー同士が友達になりやすいこともあり、一緒に活動を行い、一緒に過ごす時間が長く、交流する時間も長くなるので、さらに友人関係を形成しやすい。活動後、あるいは、活動以外の時間でも、食事会を開き、会話を楽しんでいる。

**Li (41 歳, 男性)** 毬球協会に会長として勤めている。毬球の趣味クラブではコーチを担当している。彼は 6 年前から、余暇活動として自発的な毬球クラブをつくらうとしていた。「仕事でもスポーツと関係しているが、毬球クラブに参加して以来、生活の中で、精神状態が向上している。できれば、毎日参加したいくらいです。最近も、朝・晩ほとんど毎日参加している。その人々と会話するのをすごく楽しみにしている。他のチームの話とか、日常生活の話など、いろいろな話題で交流している。」

毬球は、1984 年に正式的な体育種目になっている。遼寧省は、毬球というスポーツが、全国的にみても急速に発展している地域である。体育協会から支持を得て、80 年代中期に、急速に広がった。また「毬球は買いやすく、多様な市民が参加しやすいこともあって、大衆に人気がある活動だ。中年層の人が多いが、最近、若者がすごく増えてきた。彼らは仕事のストレスが溜まって、ストレスを発散するために趣味クラブに参加している人が多いね。」(2011 年 7 月 2 日)

実際に趣味活動に参加してみると、年齢の差をほとんど感じない。クラブの間でも、多様な年齢層で試合を行い、交流している。道具などが壊れたりすると、自発的に修理して



くれる人が現れる。みんなが大きなファミリーのようなイメージである。

**Zhao (37歳, 男性)** 石油会社の営業部で勤めている。バドミントンクラブによく参加しているメンバーである。「最初、このバドミントンクラブに参加した理由は、お得意先の顧客と仲良くしたくて、彼がよく行くバドミントンクラブを見つけて、そちらに行くようになった。そのおかげで彼と仲よくできて、仕事もうまくいったよ。」

趣味ネットワークに参加する理由は様々である。健康や交友のためという人が最も多いが、仕事の関係で、お得意先や上司と仲よくしたいという気持ちで趣味ネットワークに参加する人もいる。「活動に参加するのは、大体週末になる。平日でも活動を行っているが、仕事があるからなかなか行けない。でも、毎日やっている人が多くいる。毎週、クラブ内を組に分けて、小規模的な試合を行う。家庭・カップル・友達グループ・社区などの単位で組を分ける。最近、メンバーの人たちが、他のチームとの試合の際に、自分たちのクラブを応援するために、自発的にチアリーダーを結成しているよ。」(2011年7月8日)

趣味ネットワークを介して友人関係を形成することは、矛盾が生じにくい。各クラブ間、クラブ内でも、集団としての一体感をよく感じる。各職場にもバドミントンチームがあるようだが、自発的な趣味ネットワークに参加するほうが、より自由な感じがするのだろう。また、バドミントンは、負傷しにくいスポーツなので、参加しやすいメリットもある。

**Sui (48歳, 男性)** 2006年からバドミントンの学校を経営している。彼はかつてバドミントンの選手だった。全国大会でよく優勝していた。今は、国家級審判員であり、余暇生活には自分の学校の監督をやっている。全部で200人ほどいる四つの分校もある。さらに、ボランティアとして、他のバドミントンクラブの監督・コーチをしている。「私の学校でコーチをしている人たちは全員が私の学生でした。彼らの中には、仕事を失った人もいて、経済的な問題を抱えている。彼らのためにバドミントン学校の経営を始めたのです。毎月、私の学校で1000元ほど儲けています。それで、自分の子供が結婚することもできた。自分の学校で教えるのはもちろん、バドミントンが大好きなので、最近広がっているバドミントンクラブに、ボランティアで教えに行ったりもしていますよ。」

趣味ネットワークに参加する際、休憩時間にみんなで楽しく会話したり、ゲームをしたりしている。彼らは、その際のコミュニケーションを「言論影響」だとよく言う。それは、活動する際は、お互いに行動で影響しあい、休憩時間や活動以外の時間では、食事会などの交流をつうじて、言葉でお互いに影響を受けているという意味である。趣味ネットワークに参加すると、生活・仕事・勉強などに関する情報を手に入れることができるし、人脈も広がっていく。「バドミントンが流行って以来、企業でもよくやっている。例えば、石油会社・鉱務局・移動通信・銀行などの大きい企業で、自分のチームをもっている。でも、自発的なバドミントンクラブが一般的になって、とてみにぎやかに活動している。それは、自発的な趣味クラブでこそ、いろいろな人と出会うチャンスがあつて、コミュニケーションも生き生きしてくる。バドミントンは、お金もかかるし、おしゃれな余暇活動というイメージがあり、若者の間でとても人気の活動だ。みんながいろいろなブランドのスポーツ

ウェアを着て、プロ用のラケットも使ったりして、格好をつけていくことも大事みたいだね。」(2011年7月10日)

**Miao (21歳, 女性)** 大学4回生である彼女は、大学では学生会長をしている。アウトドアが大好きな彼女は、友達で紹介で、2年前にボランティアなアウトドアクラブに参加した。「大学の友達とハイキングに行ったりしていたのですが、もともと運動しながらいろいろな人と交流するのが好きで、今のアウトドアクラブを見つけて参加しました。ここでは、学校の友達と出かける時と全然違う雰囲気がします。夫妻などカップルで参加しているメンバーが多くて、毎回の活動を楽しんでいる。ハイキング、テニス、キャンプ、水泳など、いろいろなアウトドアの活動をしている。毎回、参加しているメンバーが変わるし、みんなが自分の都合で参加している。経費は、毎回ごとにみんなが分担して、自由な形です。仕事をしている人が多いけど、たまたま他の大学生もいたりして、いつも違う人とコミュニケーションして、様々な情報を得ることで生活の役に立つと思う。現在の生活に必要な時間となっています。」(2011年7月12日)

アウトドアクラブの事例は、毬球やバドミントンクラブと少し異なり、活発に活動するわけではなく、みんながQQ(チャットソフト)上でもグループをつくり、そこで連絡しあっている。みんなの都合がつく日を決めて、食事会を開いたり旅行したりしている。

#### 5-4-2 グループインタビュー

個人に対するインタビューに加えて、調査対象の中から活動中の7つのサブグループにインタビューを実施した。個人インタビューでは得られない幅広い情報を引き出すことを考慮した。インタビューを実施したのは、2011年7月15日から18日かけてで、各グループは13名から18名までで、男女比はほぼ半数ずつ、年齢構成もアンケート調査と同様に30代を中心とする若年層とした(ただし、一部で50代の人も含まれる)。

グループインタビューからの共通点として、活動スペース(公園、体育館など)に限りがあるので、待っている間に、会話したり、トランプをしたりしている。また活動の後、食事会に行ったりする。それ以外にも、年中行事であれ結婚式であれ、趣味の友人と交流するのが一般的で、趣味クラブを介して知り合う友人とは緩やかな関係を保持し、生活と仕事などに関する社会的な情報を交換していることがわかった。すなわち、趣味ネットワークは趣味の範囲にとどまらず、社会関係資本としての機能を帯びつつある。特にバドミントンのクラブのように、そこに参加すること自体が社会的成功のイメージをとまなう場合、趣味ネットワークの一部は階層的な特徴をもっている。

趣味クラブに参加する経緯は、友達紹介、家族・親戚紹介、インターネットによる発見、会社・学校からとなっている。参加する目的について、「健康のため」「多様な友人を作るため」「社会地位が高い人と出会うため」「趣味のため、余暇生活を豊かにしたい」「社会関係を広げたい」「家族と一緒に活動したい」「競技レベルが高い人と一緒に活動しながら学びたい」「仕事のため」という声が聞かれた。

また、趣味ネットワークに参加するメリットに対しては、「いろいろな友達が増え、社会関係が広がっている」「親友関係も増え、安心感が生まれる」「仕事上の上司、お得意先の人と仲良くできて、仕事もうまくいった」「健康的で、毎日生き生き生活を楽しみ暮らし、余暇生活も豊かになってきた」「ストレスを解消、精神的上で向上する傾向がある」「仕事をするときも、楽しくできた」「空が美しく見えてきた」「家族との喧嘩などが減っている」「家庭関係がよくなった」「家族と一緒に出かけの機会が増えた」「生活、仕事の情報を得て、転職・ビジネスなどに役に立った」「競技レベルが高くなった」「たくさん試合に参加できた」「性格が明るくなって、人々とのコミュニケーションがうまくなった」などの声をよく耳にした。デメリットとしては、「友達がたくさん増えてきて、年中行事・結婚式など忙しくなって、お金もかかりすぎた」という話を聞いた。

## 5-5 社会関係資本としての趣味ネットワーク

中国人は人間関係を非常に大切にする民族であるといわれる。前章と本章の結果から、核家族化や少子化の影響はみられるものの、中国人にとって血縁はなお重要なものであることがわかった。ただし、血縁といっても、今やそれは夫婦や親子という直接的な範囲にとどまり、親族・親戚との関係はそれほど強くない。さらに伝統的に強いとされていた同郷や職場の関係も薄れつつあるようだ。他方、血縁と並んで、現在、重視されているのが友人関係であることも明らかになった。特に、本章で調査の対象とした趣味グループのような選択的な友人ネットワークが、自由な関係という点から好まれ、個人の生活の質を高める手段としても広まりつつある。これは、人間関係を重んずる中国人のエスニシティの本質的な変化なのだろうか。

### 5-5-1 中国人社会における「友人関係」の変容

古来、友人（朋友）との信頼関係を築く上で、中国人は付き合う時間の長さを重視する。「路遥知馬力，日久見人心（道が遠いほど馬の力が分かり，日時が経つほど人の心が見える）」という言葉が表すように、時間こそ友情の真偽を確かめる試金石になるというわけである。もちろん「一見如故」（初対面だが、まるで古い友人のような親しみを覚える）といった付き合いもあるが、基本的には、長期的な視点が求められる。「一回生，二回熟，三回四回是朋友（一回目は他人，二回目は知人，三回，四回と会うことを重ね朋友となる）」これが中国人の友人づくりなのである。

その上で、「朋友」と付き合う中で、相手が自分を必要としているときに顔を出せば、最高のタイミングであり、自分に用がなくなると分かれば、察して姿を消す。友人との付き合いでは、顔を合わせる回数だけでなく、タイミングと中身も重要なのである。また、友人同士は時に相手を許す必要がある。友人というのは、本質さえ良ければいくら弱点が

あっても、それをいちいち気にしない。相手を大目に見れば、感情のつながりも深くなる。友人となったからには、その人物の全てに対して寛容にならなければならない。

中国では国や組織において権力闘争を繰り返す動乱の歴史が続いたため、中国人は人間に対して不信感を抱きがちになる。そこで自分を守るために、深く付き合っていない他人をすぐに信頼することは非常に危険だと考える。交友関係を確立するために、時間をかけ、相手をじっくり観察し、人格や能力および性格などを見極めるのが、中国人的な人間関係づくりである。中国人は時間をかけて築きあげた友人を、互いに「老朋友」と呼ぶが、この「老」という一文字こそが、まさに歳月の重みを物語っている。

しかし、20世紀に入り、社会主義革命がおり、その後の急速な近代化や改革開放経済は、長期にわたる人間関係の構築をむずかしくした。親子の間でも、時代と社会の体験が大きく異なっている。同世代内においてさえ、学歴が異なれば、経済力に格差が生まれ、付き合う友人の数も種類も違ってくる。近代化の結果として、帰属主義から業績主義への転換が生じ、学歴社会の中で人間関係は大きく個人主義化した。

伝統的な関係に代わる、新たな近代的な社会関係の構築は、欧米的な市民社会モデルをそのまま適用できないアジア共通の課題である。それでも日本の場合、組織や制度の中に疑似家族的な関係を残しながら、近代化を進める時間がまだ残っていた。しかし、中国は、巨大な人口と多くの民族を抱えながら、都市と農村、および世代間の断絶を克服しながら、さらに急速な近代化を成し遂げなければならなかった。

そこで、特に都市中間層にとって新たな「老朋友」の機能をもったのが、共通の趣味を媒介とした友人関係だったのではないだろうか。趣味ネットワークは、高い社会的同質性ゆえに、出会いから「老朋友」までの道を短縮する。いつも目の前にいれば、互いに親しみを抱きやすい。血縁関係を重視する中国人でさえも「遠くの親戚より近くの友人」なのである。また、職場よりも友人関係を築きやすいのは、組織内の上下関係のない、平等で利害からも自由な関係を実感しやすいからだろう。

第二章で検討したネットワーク理論からみると、現在の中国社会においては、かつての家族・親族や地域社会における親密性が、趣味ネットワークのような社交に置き換えられつつあるといえる。社会ネットワーク全体の中で、非親族的・非地域的なネットワークが重要性を増している。最初は疎らだと見られた友人ネットワークが、しだいに緊密な密度になってきている。それは、あらためて「コミュニティ解放論」に基づく新しい視点から分析される必要があるだろう。特に都市中間層は、家族を軸とする生活様式および地域社会の構造から解放され、個人的欲求を強くもち、趣味のための新しいネットワークを形成しつつある。

## 5-5-2 趣味ネットワークから社会関係資本へ

社会ネットワーク研究は、関係の質的变化や多様性をはかる方法としてあるが、同時にその関係から何らかの「財」を得るプロセスも明らかにしてくれる。たとえば、瀋陽の趣

味グループの調査を通じて、彼らが趣味による緩やかなネットワークから様々な情報や仕事を手に入れ、質的に豊かな生活を実現していることが明らかになった。さらに、趣味ネットワーク内のどのサークルに属するかによって、情報の入手しやすさが異なることもわかった。

趣味クラブは、もともと社区や会社から結成されることが多かったが、メンバーシップの単一性による弱さがあるため、より自発的な趣味クラブが求められ、多様な社会的身分を持つ人々が集まるようになった。そこで、自分と異なる仕事や背景をもつ人々とのコミュニケーションが活性化され、新たな生活・社会的な情報が伝達されるのである。さらに、それは一部の階層のみならず、今後、全中国人市民に一般的な関係の基盤として、趣味ネットワークの役割はますます重要になると予想される。

このように関係から「財」を得ることを社会関係資本というが、個々の行為主体がもつ個別財としての社会関係資本と、ある集団全体に存在する集合財としての社会関係資本があり、その相互関係は、社会学理論におけるマイクロ＝マクロ連関の一例としても理解することができる。近年、パーソナルネットワークから社会関係資本の形成に至るプロセスがさかんに研究されているが、本研究に即していえば、中国人は文化的資本や経済的資本を新たな社会ネットワークを介して獲得しつつあると考えられる。

改革開放以降、経済の高度成長によって家庭収入が増大し、個人の財産の膨張はとどまるところを知らないかのような有様である。少し前まで、中国人は人に会えば、“もうご飯を食べたか”と言うのが習慣になっていたが、今ではあまり聞かれなくなっている。“食”が中国人の生活に占める割合はますます小さくなってきている。この数年間で、食にとらわれなくなり、辛い仕事にセッセと励む単調な生活から離れようとする人が増え、その生活は単に豊かになっただけではなく、きわめて多彩になってきているといえるだろう。また、食にとらわれないかわりに、趣味の活動の後には非常に活発に食事会が開かれている。それは、個人が「個別財」を得る機会であると同時に、各グループおよび都市コミュニティ全体にとっては「集合財」でもある。すなわち、趣味によるネットワークは、マイクロとマクロの社会関係資本を結ぶリンクになりつつある。

## 5-6 小括

中国では、経済発展とともに市民生活が豊かになり、余暇時間の充実が求められている。それは特に、都市の中流層に顕著にみられる現象である。そこで、本章では中国東北部を代表する都市、瀋陽でフィールドワークをおこない、4つの典型的な趣味グループ（毬球、バドミントン、アウトドア、書道）を対象にその中の階層的特徴および友人ネットワークの実態を解明するために、質問紙調査と個人・グループインタビューを実施した結果の分析を試みた。

質問紙調査の対象者は、4分の3が40歳未満の若年層で、かつ半数近くが大学を卒業した高学歴層であった。これは、前章のCGSS調査で浮き彫りにされた都市中間層の特徴をよ

りははっきりとあらわしている。彼らは全体的に高い階層意識をもち、また30代を中心に高い収入を得ており、しかも若年層の中では、年齢が低い方が高学歴で年収も高い傾向がみられた。

次に、趣味グループの中でも合わせて9割を超える毬球とバドミントンのグループを比較すると、後者に20代が多く、やや高学歴で、収入も高いことがわかった。(サンプルとして少数ではあるが、アウトドアはより若く、書道はより上の年齢層が多かった。)

さらに、彼らの社会ネットワークの内容を分析すると、高学歴層になるほど、家族親戚の割合が減少し、逆に趣味グループの友人が多くなる。また、この調査対象者は全体的に地域の近隣との付き合いが少なかった。ただし、単なる付き合いではなく、相談相手のネットワークとなると、趣味グループ以外の友人や職場の同僚の割合が高くなる。したがって、友人ネットワークや趣味ネットワークといっても、そこには様々な機能が含まれていることもわかった。

そこで、具体的に趣味ネットワークがどのような役割を日常生活の中で果たしているかについて分析を進めると、高学歴層にとって、新聞雑誌等のマスメディアや職場での付き合い以上に、重要な生活情報の入手先となっている。さらに、趣味ネットワークは、生活の満足度を高め、積極的に人脈を広げる手段になっていることが明らかになった。したがって、これらのネットワークは、都市中流層にとって一つの社会関係資本となっているといえる。

さらに、インタビューによってその内実を聞いてみると、まず生活が豊かになるとともに、自由な時間・消費や文化的活動への欲求が高まりつつある背景があり、その受け皿として趣味グループがある。中でも毬球は参加費用が安く、庶民的な性格をもち、全国的に拡大しているという。社会政策的に、公共スペースの有効活用、および参加者の健康増進が目標になっている。参加者にとっても、それまで家でテレビを観ていた時間が毬球グループへの参加に変わること、趣味をこえた社交、さらには人脈づくりに役立っているという。したがって、毬球のような趣味ネットワークは社会的安定にも有効な社会関係資本の性格をもっている。

他方、バドミントンのグループに参加するには高い会費と道具やユニフォームを揃える必要があり、より高く(若い)階層の人々を中心になっている。彼らは複数のクラブで活動することも多く、社交に積極的な人が多い。また、バドミントンをする人は、仕事上の顧客や職場の上司と同じクラブに入ること、交流を深め、職業上の成功に結びつけようとの目的をもつこともよくあるようだ。したがって、バドミントンには毬球と比べても、より功利的な社交手段の面が強い。近年はバドミントンのコーチや学校経営が仕事や事業としても成立しつつあるという。ただし、バドミントンのグループにおいても、基本的には多様な友人との自由なコミュニケーションが第1の目的になっており、その点では毬球と共通性をもっている。

スポーツをはじめとする文化的交流は、中国と他国との関係にも影響を与える重要な要素である。中国内の社会ネットワークの変容は、他国・他地域との相互交流や人の移動にも大きな影響をあたえる。また、中国内の新たな都市間のネットワーク、文化圏形成にも繋がってきており、伝統的な親族・地域関係より友人関係を中心とする新たな人間関係が生み出されつつある。現在は、海外における中国人の活動もこれにともなって新たな枠組みの中で行われている。そこで現地社会で必要な情報を入手し、生活の質を高め、仕事や学業に役立てるためのネットワークが展開されている。次章以降では、在日中国人のネットワークに関する先行研究を概観した上で、大阪の趣味ネットワークのフィールドワークの分析を通じて、友人ネットワークおよび社会関係資本への考察を深めていきたい。

## 第六章 華僑・華人研究から現在の海外中国人研究への展開

中国人の海外移住の歴史はかなり古くまで遡ることができるが、大量移住はアヘン戦争（1840～1842）以後になる。現在、在日中国人の研究資料においては、1980年代中期から在日中国人のマスコミによる新聞や雑誌などの発行物が約200種類・数万点もあって多様である。この多様であるということは、在日中国人社会が変化しつつあり、直ちに、華僑・華人研究の困難さに直結することを意味している。

日本における華僑・華人研究は、近年、華僑・華人に関する諸問題に取り組む若い研究者も年々増加している。2003年3月、日本華僑華人学会も設立された（山下 2005:18,25-40）。華僑・華人に関する研究が本格化になってきたのは20世紀以来のことで、その問題関心は、日本対アジア関係の膨張と収縮に密接に連動している。主に経済・歴史の視点から地縁・血縁を基盤にして行われ、1980年代以降はエスニシティ研究のアプローチに見られるように、アイデンティティ・同化の視点を持つ研究が主流となってきた。

多様であり、重層的であり、多軸的であり、複合的であり、相互関係的であり、不断に交渉とネットワーク化を繰り返す「華僑・華人状況」とも呼び得る現象は、ひとたびそれを検討し、議論しようとするとき、単に「マルチディシプリン」に、とだけ繰り返してはられない広さと深さ、そしてなによりも、日々刻々変動する態様に直面する。これまで、華僑研究は、ひとつの「事情研究」や「動向研究」に留まっていたということも十分領けるところである（濱下 2006）。

本章では、そこに至る華僑・華人に関する代表的な研究を取り挙げ、それらをネットワーク的視点から検討してみる。

### 6-1 在日中国人社会における量と質の変化

21世紀の初め、日本で外国人労働力への需要が高まるにつれて、日本の外国人関連の制度が規制緩和され、就学生、研修生も留学生及び就職者と同様に在日中国人社会の構成母体となっている。彼らは、異なる身分（滞在資格）を持ち、日本社会において異なる場所で勉強、仕事、生活をしている。昔の華僑・華人と比べると、彼らには価値観、行動意識などに大きな違いがあり、新しい在日中国人社会を形成している。ここでの分析の焦点は中日国交正常化以後の近年になり、新・老華僑だけではなく、就職者・留学生・家族滞在中も含む最近来日の中国本土の人々、特に東北の出身者が大勢いる若い中国人グループにある。

日本華僑華人の歴史は、世界の移民史の一部であり、同時に現代の先進国における華僑華人史の重要な構成部分である。今までの華僑華人研究の中で、朱慧玲は新・老華僑華人を研究対象として、在日中国人を一つの全体として探究した。多様な理論を運用し、多角的かつ総合的な比較研究を行った。そして、新・老華僑間の相違と共通点について比較、日本華僑華人社会の相対的な発展形勢を探究した。日中関係史の視点、社会学の視点、歴



史学と社会学の視点から最近の先進国の華僑華人社会全体の発展形勢とその直面する課題を探究した。現在の在日華僑華人社会における「量」的激増と「質」の多元化、すなわち、数の増加と職業構成、出身、教育レベルなどマクロの視角から論じ、特に台湾系華僑華人を強調している。新華僑華人の「予備軍」としての留学生及び留学から就職までの現状、日本人の配偶者になった新華僑について描いている。そして、伝統的な課題である政治的・文化的アイデンティティの華人化の視点から、日中関係正常化以前における日本の華僑・華人社会の状態を検討して、現在に至る新老華僑の進展変化の要因を明らかにしている。

日本留学ブームを歴史的な視点から、朱はその隆盛期を詳しく述べ、新中国成立以降の三つの段階、及び、改革開放以降の三つの時期の在日中国人留学生の進展変化を検討している。その在日中国人留学生の変遷を問い、昔と今の中国人留学生の違いについて現在の在日中国人社会の変容と比較している。昔の中国人留学生は、日本に来て、精一杯勉強し、学業を終えて、帰国する場合が多かった。そして、大学や研究機関などに入り、科学技術分野で中国に大きな貢献を果たしてきた。現在の在日中国人留学生は空前の規模となっている。朱のデータによると70年代以来、中国大陸から海外への留学生数は50万人を超えている。しかし、中国の経済発展とともに、彼らは昔の留学生の真剣に勉強した人々より、もっと活躍し、新しい高学歴志向のグループになっている。学校を卒業して日本の企業で働き、社会的地位を求め（永住ビザを取り）、日本社会に長期滞在にすることを目的にしている。彼らは今の在日中国人社会の中心として、グローバルな社会の中で最も優れたグループとなり、21世紀の中国と日本、ひいて世界に重要な社会的影響を及ぼしつつある。

新華僑・華人の社会的境遇、生活状況に対して、朱の論述によると、彼らは日本での生活に基本的に満足しており、生活は安定してきていると結果が出たが、本研究の調査に関するデータでは、日本における外国人に対する政策により、滞在資格が多様であり、取得するのも簡単ではないので、まだ不安定な日々を暮らしている人がたくさんいる。しかし社会的な地位を求め、自分の信頼性を築き、日本社会に融合していこうとする彼らは、昔の稼ぐグループより生活が豊かになり、これから安定しつつあると予想されている。

朱慧玲は現在の在日中国人社会を巨視的な見方で論述し、マクロレベルでまとめているが、それぞれのミクロレベルの問題を、論じる研究者や論文も現れてきた。本章では、日本の中国人社会が急速に高学歴化・低年齢化する影響を本研究の結果から明らかにしてみたい。

## 6-2 在日中国人社会における多様化と若年化

1990年代以降、在日中国人の急増に直面し、以前から華僑華人を対象にしてきた研究者も新たな調査をおこなっている。たとえば、横浜をはじめ伝統的なチャイナタウンの研究をおこなってきた山下清海は、東京の池袋にできた新華僑街の形成に注目している（山下 2000）。また、江・山下は、埼玉県川口芝園団地の華人ニューカマーズの調査をおこ

なっている(江・山下 2005)。これらの調査事例は、ニューカマーズの商業活動や一定地域内に集住する在日中国人に焦点を当てたものである。

社会学においても、奥田道大と田嶋淳子がやはり東京の池袋や新宿の調査を通じて、大都市インナーエリアに集住し活発化する在日中国人のライフスタイルやネットワークに着目している(奥田・田嶋 1995:29-52)。彼らは同じ地点で調査を繰り返すことによって、池袋がアジア系外国人の一時受け入れ地として機能し、多層化する外国人および日本人ネットワークの核になっていることを示している。これらの研究は、新しい在日中国人社会の動態を解明する上でも貴重な知見を提供しているが、多様化する流入者の中からどのように新しい層を見いだしていくか、あるいは地域的に分散しつつある全体像をどのように分析すればいいのか、課題も残っている。

在日中国人社会の変化については、中国人研究者からも様々なアプローチが試みられている。主要な論点の一つとして、急増する留学生への注目がある。王維の調査によると、1996年の入国管理法の改正以前は、身分保証人の条件が障壁となって、日本に親族や知人がいないと中国からの留学はむずかしかった。しかし、改正後は一定の費用を払えば受け入れの学校側が保証人になることが可能になり、それによって留学生が急増し、その半面、血縁や華僑団体の重要性が相対的に薄れることになった(王 2006)。

また、朱慧玲の調査によると、留学生を送り出す中国本土の経済・社会的発展によって、現在の留学生の大半は1990年代以前の留学生よりも経済的に豊かな生活を日本で過ごし、余暇生活の質にも高い欲求水準をもっている。彼らによって、在日中国人社会の若年化と高学歴化が進んでいる(朱 1999:130-158, 2003:88-93)。さらに殷燕軍は、留学生はいまや在日中国人全体の70%に達しており、その多くが豊かな中流階級以上の一人っ子として育ち、留学後も自らのアルバイト収入よりも家族からの仕送りに頼って生活している者が多く、その趣味や行動様式は上の世代よりもむしろアメリカや日本の若者に近いという(殷 2005)。

在日中国人社会における東北出身者の台頭についてはまだ調査も少なく注目されていないが、王維は、サンフランシスコの中国人社会を調査する中で「東北新移民」が現代の中国移民の主要グループになっていることを示している。彼らは伝統的な移民あるいは他の地方の出身者と異なり、自らの同郷団体をもたないゆえに結束に乏しい集団に見えるが、インタビュー記録を通じて、実は彼らの友人間の弱い紐帯のネットワークが重要な役割を果たしているという(王 2006)。また、ヨーロッパにおける中国系移民について、PiekeとXiangは、特に1990年代後半から中国東北部出身者(主に都会の出身)のイギリスへの流入が増加していると述べ、その特徴として、彼らは留学からそのまま移住するが多かったという(Pieke and Xiang 2007)。

以上のように、近年の多くの調査研究によって、在日中国人社会で留学生を中心とする若年層が増えており、相対的に高学歴で経済的にも豊かな階層を形成していることが明らかになった。日本に関して言えば、もともと親日的な人が多い東北地方出身者が留学生と

して、日本の大学で学び、そのまま日本の企業に就職することで、在日中国人社会に合理的な気風をもたらしているという指摘もある（五十嵐 2011）。これらの変化は、在日中国人の新たなエスニシティを考える上で無視できない点であろう。

### 6-3 趣味活動の広がり新たなアイデンティティの形成

以上に、述べたように、中国本土社会において、2000年以降の長期的な経済発展につれて中流階層が拡大し、その階層構成が多様になっている。さらに個人の生活要求が高まる中で、社会ネットワークの内容が変化するとともに範囲も広がり、強い紐帯で結ばれてきた伝統的なネットワークから友人関係を中心とした弱い紐帯のネットワークが優勢になりつつある。

CGSS（第四章で紹介したように）により、社会ネットワークに関する質問項目が多く設けられている。急増している中流階層の人々が多様なパーソナルネットワークを持つようになり、余暇活動への参加意識も高まっている（李 2008）。その社会ネットワークのなかで、友人関係が最も重要な社交手段として機能しているという（李・王 2009）。パーソナルネットワークに注目する辺燕杰は、代表例として拜年ネットワークを分析し、階層ごとにその形態が異なること、そして、友人関係の比重が高まっていることを明らかにした（辺 2004）。

近年、日本でも在日外国人による余暇活動のグループが多く形成されている。例えば、駐日ブラジル大使館の支援のもと、在日ブラジル人の若者が余暇を過ごすためのスポーツや芸術などの文化活動グループが増えてきたという（清水 2004）。来日する中国人も増加するだけでなく、多くの人々がアルバイトで生計を立てる等の貧困状態から脱して中流階層の仲間入りを果たし、質の高い精神的生活を求めるようになった（中国人民網日本語版 2011）。たとえば、中国総合情報サイト「ALA 中国」では、在日中国人向けのイベント情報が数多く紹介され、娯楽・スポーツ・文化の活動グループが紹介されている（ALA 中国 2011）。

華僑・華人のネットワークについては、さらに新たな視点からの実証的な研究が必要となっている。特に、最近の在日中国人社会における文化的ネットワークや友人ネットワークから生まれている信頼関係は、彼らの生活にアプローチする際の重要な焦点のひとつである。総じて彼らの交流は、ネットワークとしての開放性を高めつつあり、新しい刺激を在日中国人社会にもたらしている。例えば、東京では中国人の社交ダンスシーンが現れている。これは中国人留学生が組織した無料のパーティとして1990年代半ばに始まり、現在にわたって定期的なイベントとして開催されている（ファーラー 2006）。中国人と日本人のスポーツグループ、特にサッカークラブも多く生まれてきた。バスケットボールクラブも成立し始め、徐々に広がっている。社交ダンスに参加する人々が興味にもとづいて友達になり交流する様子の描写には、本論文の趣味ネットワークと同様な視点がある。

#### 6-4 グローバル化社会におけるエスニック・コミュニティ

エスニシティ概念に含まれる人種・民族・宗教・国籍・言語・地域・文化などの要素は、社会学が生まれる前から存在する研究領域である。ただし、社会の近代化と国際化にともなってクローズアップされた経緯を考えるならば、エスニシティの内容はむしろ時代や社会とともに変化するものであり、常に再検証が求められる。

エスニシティは「一定の文化的絆によって相互に結びついていると感じる人々の集合体全体」（梶田 1988:18）と広く定義されているが、エスニック集団のネットワークとアイデンティティがその社会的分析の対象だということができるだろう。この論文の目的は、大阪にあるサッカークラブの調査を通じて、近年急増する在日中国人のエスニシティ、すなわちそのネットワークとアイデンティティが、人口急増とともにどのように変化したのか、さらに変化を分析するためにどのような方法が妥当かを論じていることである。本部では、まず近年における在日中国人社会の変化とその研究を検討したうえで、事例調査の分析をしていく。

エスニック・グループは「元から自然に」存在していたものではなく、具体的な人々により作り出されていくものである（永野 2010:18-19）。エスニシティ研究で培われた理論は、現在の在日中国人に関する同化やアイデンティティ研究にとって依然として有効であると考えられる。過放は、在日華僑の婚姻の意識、アイデンティティについて、地縁や血縁を基盤にした華僑社会の強い結合と相互扶助の関係を維持しており、華僑内部での結婚が華僑社会を維持し、自らの中国人アイデンティティのための基本的な紐帯であったとしている（過 1999:225-241）。過放の研究において、華僑の帰化傾向は目立っているにもかかわらず、大多数の華僑の帰化は生存の必要によるものであり、彼らがすでに日本社会に融合しやすくなったことを意味しない。

在日中国人は中国の伝統的な家族理念の影響を受けると理解すれば、首藤によると今後の中国の親族ネットワークは衰退し、核家族の孤立が生じる可能性がある（首藤・落合・小林編 2008:169-174）。そして、今日の中国人は、アメリカ人以上に個人主義的であり、自己主張もきわめて強く、自己中心的な傾向が強くみられる。中国人の若者たちは、民族意識を通奏低音として形成し、現代的な価値観を身につけ、かなり多様な様相を呈していると考えられる。

日本社会の都市におけるエスニック集団の集住地区について研究する奥田道大と田嶋淳子は、日本の地域社会に新たな知見を示し（奥田・田嶋 1995:20-21）、都市の「リアリティ」をとらえている（広田・町村・田嶋・渡戸編 2006）。そして都市社会学が「変容する都市コミュニティの普遍」を再テーマ化する必要性があることを提起している。それにもかかわらず、山下が取り上げるチャイナタウンに説得力を感じられる理由は、中国からの世界規模での華僑・華人の送り出し状況や受け入れ国での現状といったものとの関わりの上で、日本のチャイナタウンの事例を位置づけることができるからである。

さらに、最近の在日中国人社会において、近代化されたパーソナリティの中で、先行研

究の中から中国人としてのエスニシティが変容しつつ、消滅していく可能性もあると考えられる（王 2001:48-59）。

在日中国人における東北出身者の調査は少なく注目されていないが、王維は、アメリカにおけるサンフランシスコの中国東北地方出身者の事例を取り上げている。彼によれば、「東北新移民」はすでに現代中国人移民の主要なグループとなっていると指摘し、他の地域の出身者および伝統的な移民社会と異なり、彼らは自ら組織する団体が存在せず、内部の結束のない集団だと論じた（王 2006）。そして、インタビュー記録から、弱い紐帯の友人ネットワークは現代的な中国人移民に大きな役割を果たしていると主張した。

移民が増えることによって、スポーツは移民たちの余暇生活の中に浸透しやすくなる。尾崎はオーストラリアにおける移民たちのスポーツ活動やエスニシティ問題に関する研究を行なった。オーストラリアにおけるさまざまな国、特に大量流入している中国人移民も含め、オーストラリア社会に与えたインパクトの大きさについて、移民とスポーツをテーマとして論じている（尾崎 2005）。特にサッカーに対しては「脱エスニック化」を生じさせ、サッカークラブはエスニック・コミュニティの象徴として位置づけられているが、そのことが逆に活動の広がりや阻害するとも指摘している。

これからの中国人移民に関するエスニシティ問題は変容すると考えられるが、スポーツ活動はエスニック・マイノリティなどの意識を消滅させていく可能性もあるだろう。

## 6-5 集団中心の研究から個人中心の分析へ

社会学がさまざまな社会生活の領域を研究しながら、ひとつのまとまりをもつ科学といえるのは、社会学がさまざまな領域に共通してみられる個人や集団の活動をさぐる科学だからである。

日本における華僑・華人の研究は、過去 30 年の間に様々な視点から変遷、発展してきた。在日中国人研究の流れの中で「新・老華僑・華人」の出現から現在に至り、華僑・華人という枠組の中では定義できない在日中国人グループが誕生してきた。さらに、ネットワーク、定住化、家族・婚姻問題、同化・アイデンティティおよび価値観について、歴史学と社会学の視点を結合しつつ考察されてきた。

ネットワークの視点から見る華僑華人研究の最前端である地縁・血縁を中心とする研究の中で、山下の代表的な華人ネットワーク・チャイナタウン論に注目にした。そして、日本の都市における中国人の集住化に対して、奥田と田嶋が都市論の見方として、集住化生活ネットワークを扱っていた。一方、中国社会を見るには家族ネットワークからの観察も重要であり、近代中国家族に対して、落合と首藤が「個人と家族」を取り巻く社会関係といかに相互作用するかを論じ、中国の家族構造が変容して生まれた多様性を分析した。それにより、過放が二次世界戦争後の華僑問題に関心を持ち、家族・婚姻問題を論じてきた。80年代から注目された同化・アイデンティティ問題について歴史と社会的視点を結合して全体的な華僑華人社会を見る朱慧玲が量的・質的として今の在日中国社会を考察

して論じた。また、華人史を中心にし、在日中国人ネットワークを地域化観点から分析した廖赤陽などの研究者が徐々に登場し、在日中国人に関する研究は新しく展開していくようになった。現在の在日中国人社会を最新の視点で見るとしたら、朱の研究の中で提起した華僑・華人の予備軍としての留学生、就職者のニューカーマンズグループに焦点を当てなければならない。

従って、現在の在日中国人社会では、組織ネットワークから解放され、個人的レベルから要求された、新しいネットワーク（趣味ネットワーク）に関する中国人研究がまだ空白であり、注目されていないようだ。現在の在日中国人社会における重要な構成要素としての東北・北の出身を中心する若者グループでは、これからの中国人社会の変遷や発展を左右する人々である。今の在日中国人社会を分析・展望するため、新しい現象により大きな影響を及ぼす新しいネットワークの考察、研究分析は大変必要であり、注目すべきだと考えられる。

一方、在日中国人グループはエスニック集団として、民族的・文化的帰属性を保持しながら、地域社会に根ざしてきたことと、地域社会の一員として日本に貢献してきたことを知ることができた。日本社会における存在感をアピールする際の、地域社会と在日中国人社会内部への配慮を読み取れた。つまり、ほかの集団と相互に理解・信頼する関係を築く一方、集団内部の多様性を尊重し合い、まとまりを保持するという共生の理念がここに貫かれていると言えよう。在日中国人たちが実際に日本社会で生きてきた経験から身につけた、在日中国人として生きる方法とは、中国の文化を維持し、中国を理解すると同時に、日本を理解し、日本社会に貢献することであり、日本と中国との橋渡しとなることであると期待されている。

## 6-6 華僑華人研究から趣味ネットワーク研究へ

これまで述べたように、従来の華僑華人研究においては、中国人のエスニシティを、家族や親族の血縁集団や、同じ出身地あるいは海外の同じ地域で共に生活する同郷・地縁集団の強い紐帯をその特徴として分析してきた。しかし、中国は多民族によって構成されており、特に現在の在日中国人の中で多数を占めているのは東北地方の出身者であり、彼らは従来の大陸南部出身者のような華僑団体をつくらず、個人ベースの弱いつながりの中で生活している。

入国管理法の緩和もあり、1996年以降に来日する中国人の大半が若い留学生になったことも在日中国人社会を大きく変えた。彼らは中国の経済発展の中で一人っ子として育ち、留学も親からの仕送りがあるので、日本人学生と同等以上の生活水準であることが多い。また、勉学やアルバイト以外の余暇における生活の質にも強い欲求をもち、自己主張が強く個人主義的である。したがって、現在の在日中国人社会は、従来のエスニシティ概念ではとらえられなくなりつつあるのではないだろうか。

ただし、同じように個人主義的な傾向にある日本の若者に比べて、在日中国人の若者は

それほど社会的に孤立しているわけではない。むしろ積極的に社交を広げ深めようとしている。その際、地縁や血縁よりも、共通の趣味によるつながり、特にスポーツのクラブやサークルが重要な機縁となっている。その付き合い方には中国の伝統的な作法や価値観も多少は含まれているが、趣味のネットワークは、在日中国社会の新たなエスニシティを象徴するものだと考えられる。

従来の集住から分散・多様化傾向にある在日中国社会をどのように調査するかという課題が浮かび上がる。また同時に、若者たちが多数派となった新しい特徴をとらえる方法論が求められている。そこで、近年の社会学において発達してきたネットワーク調査の方法を援用することで、一人一人のもつ強弱あわせた多様な社会的紐帯やその内容に迫りたい。

ここでは、在日中国社会において増殖しつつあるスポーツや娯楽などの趣味ネットワークに注目する。ここで趣味ネットワークとは、友人ネットワークの一形態として、趣味・娯楽縁、友人縁、助け合い縁から組み合わされる複合的なネットワークで、また親しい友人だけでなく、活動のあるときだけ顔を合わせるような友人も含む緩やかなつながりでもある。

趣味ネットワークに注目する理由は、趣味ネットワークこそが、伝統的な地縁血縁でもなく、あるいは近代社会の特徴として多くの研究が蓄積されてきた労働や企業組織における社会関係とも異なる、多様化・若年化しつつある現在の在日中国社会に特徴的なネットワークだと考えられるからである。また、具体的な社会活動として調査を比較的好くないやすいことも理由としてあげることができる。

## 6-7 小括

本章では、華僑・華人研究から、海外中国人研究への流れの中から、様々な視点から検討してきた。今までの華僑・華人研究を振り返ってみて分かることは、かつては集団的なものにとらえられていたが、個人的なものとしてとらえられるようになってきた、という大きな流れが存在していることである。時代が進むにつれてその機能はだんだん縮小していき、現在では個人的なネットワークを生み出す基盤としての機能をもつにいたっている。つまり、集団的な側面における機能だけでなく、個人的な側面における機能もまた重要な役割を果たすようになってきたのである。中国社会が伝統的農村を中心とするものから都市を中心とするものへと変化していく流れに沿う形で、こうした転換が起こっているといえる。さらに、ネットワークのこのような変化を受け、社会関係資本に対しても、集団的だけでなく個人的なものとしてとらえる研究も出てきている。

そして、こうしたパーソナルネットワークへの転換の中で、本稿では若年層社会に注目し、趣味ネットワークというものが今後重要な論点となる可能性を示した。経済発展とともに都市化が進む中国社会における人々の社会ネットワークを論じるうえで、「緩やかな友人とのつながり」という新たな視点をもった研究が重要になるだろう。個人主義と自由

への志向が強い中で、相互信頼を形成するために、趣味ネットワークは重要な社会的基盤となりうる。また、集団ベースの硬いものではなく、緩やかな個人ベースの社会関係資本として個々人に与える影響は少なくないと考えられる。現在のところ、このような趣味ネットワークに関する研究はほとんどなされていないが、今後さまざまな研究が生まれてくることが期待される。

ただし、独自性と多様性を兼ね備えた中国人若年層における社会ネットワーク研究を、欧米に代表される一般的なネットワーク研究の中に位置づけることが、残された大きな課題だといえる。特に地域の変化や趣味ネットワークの発達など、中国人若者特有の問題が、どのように位置づけられ何を意味しているのかを明らかにすることは、中国の社会ネットワーク研究を進めていくにあたっての重要な課題である。こうした問題に取り組むことで、グローバル化によって 21 世紀の社会共通の課題となった「多文化共生」という大きなテーマに対して、中国のネットワーク研究が今後果たすべき役割が明らかになると考えられる。

次章では、筆者が調査をおこなった在日中国人若者たちを中心とする趣味ネットワークの事例について述べていく。



## 第七章 サッカーチームにおける在日中国人ネットワークの調査

19世紀初、中国人の海外移住に伴い、中国人社会的ネットワークが東南アジアを中心に形成された。1940年代には日本国内でも形成され、1970年代には東南アジア地域で中国人ネットワークの国境を越えた連携が形成された。中国政府が1979年から開放政策を実施し、中国社会に大きな変化をもたらし、革命以後に閉鎖的になっていた中国は、世界に向けて「門戸開放政策」を行なった。それは日本だけではなく、世界各国に向けて、中国人の海外進出を活発化させ、目立つようになってきた。日本に中国人社会ができたのは徳川初期の長崎貿易時代以後と考えられている（広田 2003:260-268）。

日本社会における在日中国人は、歴史の影響を最もうけ、改革開放以後海外及び日本に行っている中国人は留学とビジネスを行なうのが主な目的で、教育水準や経済的立場から言えば昔の華僑とは大きく異なっており、世界各地で新しい中国人ネットワークを形成しつつある。過去20年来の中国大陸の改革開放政策を背景に、合法的、非合法的な海外移民者が一千万人を超え、さらには世界情勢により居住国の政治、経済、社会の様相も変化し、居住国の国籍を取得できるかどうかなどの不確定要素も発生してきた。本来、華僑・華人は「華裔」の意味が内包されており、現在、中国の出身地から様々に変化し、その正確な表示は極めて困難となった。

中国人ネットワークについて、歴史研究或いは現状研究にあっても、更に多くの中国人ネットワークに関する実証的な研究による検証が必要であり、また学界の主流と共に対等で有効な対話の土台を構築するようにならなければならない（Liu and Liao 2006）。本章では、大阪にあるサッカークラブの事例分析を通じて、新しい在日中国人若者たちが、昔の華僑・華人より、滞在資格が延長や多様性・出身地の変化・居住状態の分散を解明する上、彼らのエスニック・アイデンティティと社会ネットワークの変容を明らかにしていく。

### 7-1 調査概要

本研究の調査を始める前、在日 IT 産業における中国人エンジニアのネットワークについて調査をしていた。しかし、その調査対象の方々が別々の企業に入っているため、調査を困難になってきた時に、調査対象の一人が大阪にあるサッカークラブに参加していることを教え、紹介してくれた。それは偶然ではあったが、在日中国人社会の新しい潮流を感じ、その新しいネットワークに焦点を当てて、サッカークラブを調査していこうと決めた。

特に近年の中国人社会においては、一般に友達の関係で結ばれたネットワーク、すなわち本研究における趣味ネットワークのような関係を重要視している。また最近、日本における中国人と日本人のサッカークラブが多く生まれてきた。関西地方ではよく中国人が集まり、大阪で活動している。他にバスケットボールクラブも成立し始め、段々広がっている。サッカーやバスケットボールチームは中国人留学生によっていくつかの大学などのキ

キャンパスで学生組織として運営されてはいるものの、本研究で注目するサッカークラブはすべての在日中国人たち（就職者、留学生、華僑、華人を含めて特に若者たち）の個人レベルの欲求から、定期的な活動を開催しているネットワークである。また、他の在日中国人が中心となって活動しているサークルも注目されていないようであるが、活発に活動している。本章において事例とする「大阪国際 FC（仮名）」は、大阪にあるサッカークラブの中で、人数が一番多く、活動も活発なサッカークラブなので、代表的なグループだと考えられる。

ここでは、大阪で活動するサッカークラブを事例として取り上げる。まずクラブの全体像を把握するためにアンケート調査を実施し、次にネットワーク分析の方法を用いてクラブがどのように形成され、その中の人間関係が変わっていったかを解明する。次節では在日中国人若者たちのエスニック・アイデンティティの変化について、インタビュー調査のデータを検討していく。

## 7-2 考察

### 7-2-1 調査対象者の社会的背景

サッカーを趣味とする人たちによって 2006 年に創立され、新大阪駅周辺を練習場としている中国人の留学生・社会人および日本人の混成サッカークラブである。創立当初は、大阪市在住の在日中国人の友人や知人のグループを中心に構成されていたが、現在ではメンバーの構成も変わり、日本人の社会人・大学生もクラブに所属するようになった。2008 年末時点でメンバーは 60 名を超えていた。

調査は 2006 年 6 月から 2008 年 12 月の期間に行なった。対象としたのは大阪国際 FC のメンバーのうち、特にクラブに毎週参加し、練習や試合後の交流にも参加する積極層である。筆者は彼らを参与観察し、必要に応じてグループ及び個人へのインタビューを行なった。また、参与観察やインタビューとともに、メンバーの社会的属性、生活・居住条件、学歴・職業、日常的な付き合いなどの概要を把握するためにアンケート調査も実施した。アンケートは、クラブに毎月 1 回以上参加しているメンバー 56 名を対象に、2008 年 3 月に行なった（回答者数 51 名、回収率 92%）。

そこで、まずアンケート調査の結果からメンバーの特徴について述べる。

第 1 に、留学生（25 名）と社会人（26 名）の比率は 2008 年の調査時点で半分ずつであった。勉強とアルバイトの関係で毎週行なっている練習や日曜日の試合に参加できないメンバーもいるが、ほぼ毎週参加している積極層が多い。

第 2 に、年齢構成は 26～30 歳が 23 名（45%）で最も多く、次いで 20～25 歳が 16 名（31%）である。20 歳代だけで 4 分の 3 を超える若年層中心のグループである。

第 3 に、東北地方出身者が 29 名（51.8%）で半分以上を占め、南方出身者は 2 名（3.6%）のみであった。

第 4 に、最終学歴を見ると、短期大学 8 名 (15.6%)、大学 25 名 (49%)、大学院 9 名 (17.6%) を示し大半が高学歴である。なお、社会人メンバーは IT 関連の仕事が多く、大学院修了者が多かった。

第 5 に、社会人の年収は全 26 名中、200 万円以上 300 万円未満と 400 万円以上 500 万円未満が 8 名 (30.1%) ずつで、ついで 300 万円以上 400 万円未満が 7 名 (26.9%) だった。

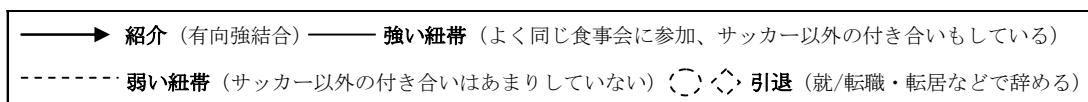
第 6 に、居住地域は大阪市の中央区が 15.6%を占め、淀川区と東淀川区は 9.8%ずつであった。ついで平野区 7.8%、西成区 5.8%、天王寺区・西区・港区は各 3.9%ずつとなっている。そこに居住する理由は「生活に便利」「学校・仕事に通いやすい」「家族と同居」が多く、新大阪駅周辺で活動を行なっているので、近くの淀川区や東淀川区の割合が相対的に多い。このようにメンバーの居住地域をみると、居住地の分散がみられた。従来の集住化した在日中国人コミュニティと異なる特徴がうかがえる。

次には、サッカークラブは成り立つや、そのネットワークが拡大するプロセスについて、述べていく。

## 7-2-2 サッカークラブの発足とネットワークの形成

大阪国際 FC は 2006 年に発足してから、紹介やインターネットを介して、メンバーを徐々に拡大してきた。クラブに参加する主な目的として「楽しく暮らしたい」「サッカーをやりたい」「友達を作りたい」「いろいろな情報を得たい」と様々な意見を彼らは語っている。

立ち上げの中心となったのは元リーダー AO (以下、すべて仮名) である。健康や娯楽の目的で、彼は大阪市内に住む 4 人の友人に相談した。AO と 4 人の友人はそれぞれの友人・知人に呼びかけ、12 名が最初のメンバーになった。その後、「元老」(創立メンバーは元老と呼ばれる) を中心に各メンバーが個人的なネットワークを介して新メンバーを紹介して人数が増えた。2008 年末時点で 60 名を超えるまでに拡大している。次の図 4.5, 6, 7 は、平均月 2 回以上参加している 34 名のメンバー<sup>1)</sup>に関してメンバー間の関係をネットワーク図にまとめ、クラブ形成のプロセスを示したものである。



- 就職者中心で、その仕事内容は IT 関連が比較的多い
  - 就職者中心で、人文知識・国際業務をやっている人が多い
  - ◇—留学生が過半数を占めている
  - ◇—日本人・新/老華人などの人が中心
- (注：灰色—2006 年当時の「元老」グループ)

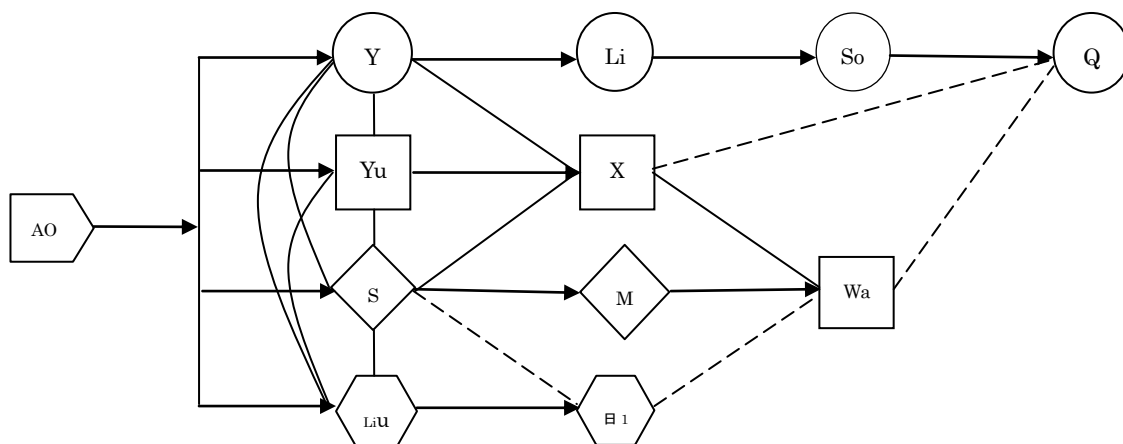


図 4 大阪国際 FC (2006 年) 結成当時

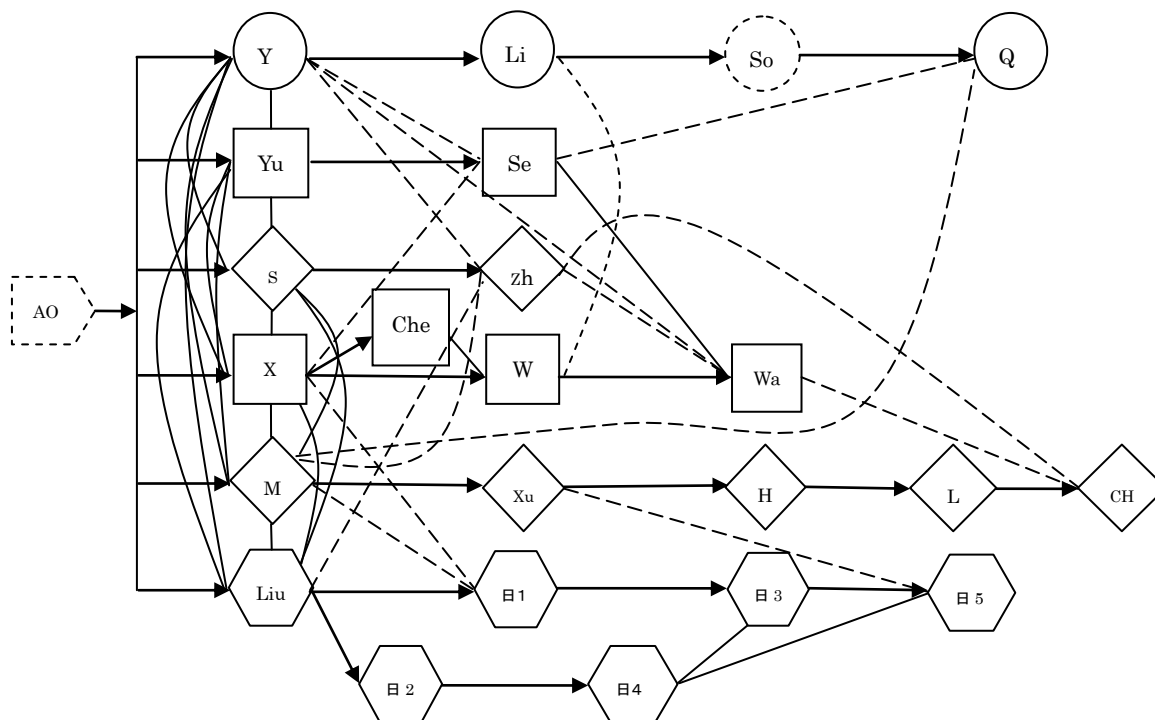


図 5 2007 年の拡大

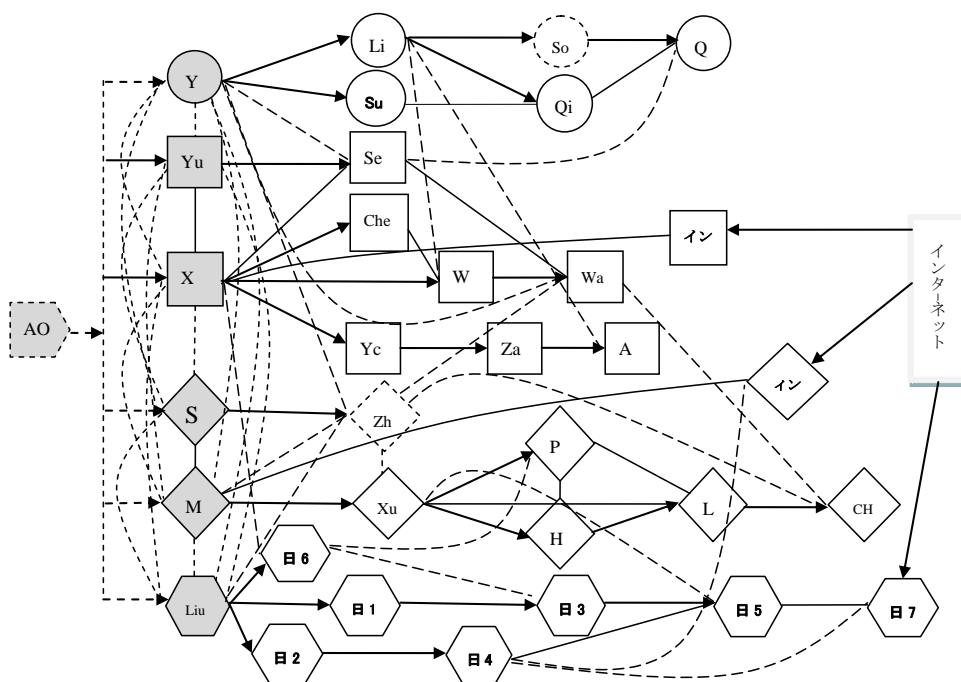


図6 2008年時点の構成

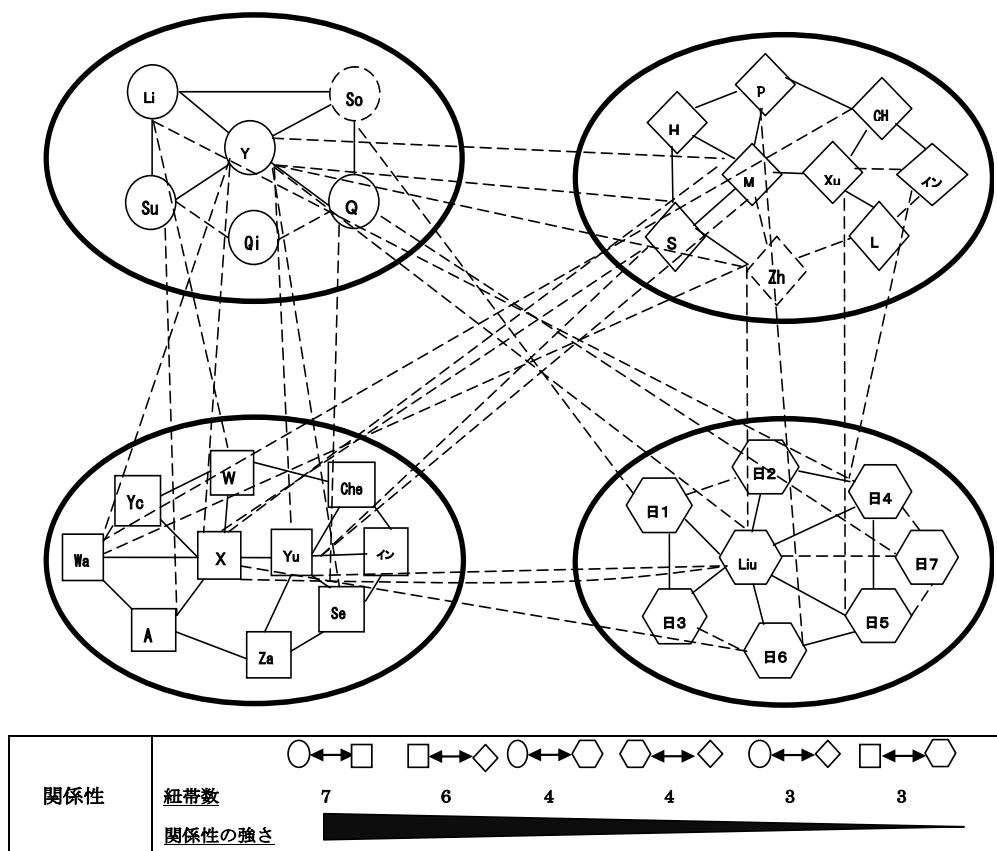


図7 サッカークラブの内部クリーク分析

図 4, 5, 6, 7, は, サッカークラブが成立してから, 2 年間に渡って, 拡大し, 内部の変化を示している. 2006 年の時点では AO を中心にした「元老」メンバーのみであった, 現在でも彼らの半数が残ってチームの中心的な役割を果たしている. 紹介者と紹介された者 (矢印) はすべて強い紐帯 (ここではクラブ以外の場でも付き合いがあること) で結ばれている. また, 発足の翌年にクラブの Web サイトを作り, チームの活動を在日中国人社会に向けて情報発信している. そのため, Web サイトを見て参加するようになったメンバーもいる. インターネットを通じてメンバーとなった者は, 友人の紹介ではないため馴染むまで少し時間がかかったようであるが, サッカーをする中で徐々にチーム内での居場所を見つけ, 現在ではいずれかのメンバーと強い紐帯で結ばれている.

2008 年春にリーダーの AO が転職で東京都へ引っ越すことになり, クラブから引退した. そこで最も多くの友人をクラブに紹介した X が新たなリーダーになった. この頃から, クラブを運営していく上で必要な役割を分担するようになっていく. 主な役職として, リーダー (他チームとの連絡, 試合スケジュールの調整など), チーム責任者 (チーム内の管理と他チームとの交流), 監督 (トレーニングプラン, 試合時の作戦, 出場メンバーの決定), キャプテン (練習の指揮, 選手の状況を監督に報告, 出場記録の管理), マネージャー・医薬箱・経費の管理, ユニフォームのクリーニングと管理) があり, 元老を中心に分担している.

趣味のためのサッカークラブは一つのネットワークといえるのが, その中で, クラブに参加した時期・年齢・仕事内容・学校など, 幾つかの同質性から強く結ばれた小グループが潜在的に分かれて動いている. 設立して間もない頃は, ほとんどすべてのメンバーが強い紐帯によって結ばれていたが, メンバーが増えてくると, 潜在的ではあるものの, クラブ内に社会的背景の同質性から強く結ばれた 4 つのクリーク (下位グループ) がうまれた.

大阪国際 FC のメンバー (参加率が高く, 中心となっている者) の 4 つのクリークを示している. クリークはインタビューと参与観察をもとに筆者が分類をした. それぞれ円のクリーク, 四角のクリーク, 菱形のクリーク, 六角形のクリークとして図示している. 円と四角のクリークは就業している者を中心としている. 特に円のクリークは主に技術系の仕事に就いている者たちで, 四角のクリークは文系出身の営業職や事務職, 翻訳などを仕事とする者たちである. 菱形のクリークは, 文系を専攻する留学生が多く, 円の技術系とのつながりが少なく, 逆に四角のクリークとのつながりが多い. 六角形のクリークは, 日本人が中心で, 他の中国人クリークとの連結が比較的弱く見えた. 全体的にはクリークをまたぐ強い結びつきは少なく, クラブの全体的なネットワークの密度は年ごとに低くなっている. しかし, 4 つのクリーク間には弱い紐帯が存在し, 緩やかにではあるが異なる社会的背景をもった在日中国人を結び付けている.

各クリークの中心となっているのは Y, M, S, X, Yu, Liu の 6 人の元老であり, 彼らの間には必ずしも強い紐帯とはいえないが互いに円滑なコミュニケーション回路がある. 彼らはクラブ内の役職を通じてクリーク間をつなぐブリッジの役割を果たしている.

ミクロレベル（小グループ）の相互作用がマクロレベル（クラブネットワーク）のパターンにしっかりと関連づけられている。生活・仕事・勉強など情報入手については弱い紐帯の強さ論が説明するように、クラブの中でも強い紐帯より弱い紐帯の友達から得る可能性も高い（Granovetter 1973）。

総じてクリークをまたぐ強い結びつきは少なく、また、クラブ全体のネットワーク密度は年々低くなっている。しかし、クラブが分裂したわけではなく、4つのクリーク間には弱い紐帯が存在し、緩やかにではあるが異なる社会的背景をもった在日中国人同士を結び付けている。クラブ内では、分野の異なる社会人間、社会人と留学生、あるいは留学生と日本人の間に種々の情報交換がおこなわれている。次節のインタビューのデータにもみられるように、それらがクラブに多くのメンバーが集まる理由にもなっている。

### 7-2-3 インタビューを通じて

本小節では、インタビュー・データを通じて、既に議論されてきたエスニシティ概念を用いながら、留学生を多く含める在日中国人の若者たちのエスニック・アイデンティティがどのように形成され変容したのか、その揺らぎと葛藤を軸に、サッカークラブがメンバーにとってもつ意味について述べる。

対象としているのは、月2回以上参加している26名である。インタビューは活動の休憩時間や、活動後および活動以外の時間を利用して行なった。また、彼らは毎週の活動の後にグループに分かれて食事会を行なっているため、そこに同席し、グループ・インタビューも行なっている。

#### (1) 「同胞」意識から「友人志向」への変化

近年、多くの中国人たちが留学生として来日し、日本の大学・大学院に進学し、その後、就職するパターンが急増している。だが、中国人たちは職場の人間関係に必ずしもスムーズに馴染めているわけではない。日本人の同僚に自分の意思を思うように伝えられないというコミュニケーションの問題が第一にある。

元留学生のYは来日12年がたち、大学院博士課程を中退して6年前に尼崎市の中小企業に就職した。会社の中で唯一の外国人としてIT開発を担当している。彼は、日本語そのものには不自由していないが「職場の上下関係にあまりうまく対応できていない。同僚と一緒に食事しているが、仕事以外の付き合いは少なく、会社ではコミュニケーションの壁を感じている」という（2006年9月23日のインタビュー。以下、同様に表記）。

留学生XUも「アルバイト先の中国人とは友達になりやすいが、日本人に信用されているのかどうかかわからず距離感を感じている。大学でも同じで、ゼミで上下関係を感じ、中国人同士や同級生のほうが対等で付き合いやすい」という（2006年11月26日）。

職場だけでなく、大学のクラブやサークル、ゼミでも、日本人との付き合いには上下関係が自然に組み込まれていて、在日中国人にとっては、気遣いが負担となって親密な関係

へと発展しにくい。そのため、日本人とは勤め先や学校の場合だけの付き合いと割り切ることが多い。特に尊敬語・謙譲語を使うことがむずかしく、苦手意識をもつ者が多かった。

他方、留学生にとって大学は友人と出会う場でもある。彼らは人間関係を広げたいと強く希望しており、また授業や学内制度の情報を得るためには学内ネットワークが必要であると痛感し、円滑な友人関係を保とうとしている。ここに、若い世代の中国人同士が「同胞」意識を強く感じる理由がある。友人に対する彼らの思いは非常に高く、「励まし」「悩みの相談にのってくれる」「気が合う」「話し合える」などの表現で友人関係を語っている。これらは社会的ネットワークがもつ精神的なサポートや連帯感の醸成機能をしめしている。

大学院生の CH は、日本で 2 年間生活して、人間関係を作ることがこの社会で生きる条件だと思ったという。「特に日本に来てから、友人の存在の重要性を感じるようになった。仕事、趣味、遊び、生活など、いろいろな友達を作りたいし、日本人の友達もほしい。友人の中では、真の友達と浅い付き合いとを分けている。同じ中国人でも、みんなと友達になれるわけではないし、国籍と関係ない。同じ考え方を持つ人なら友達になれる」(2007 年 4 月 22 日)。

また、社会的ネットワークのもう一つの機能として相互支援があるが、クラブの付き合いの中でもそれは大きな要素である。サッカークラブの現リーダー X は、在日 8 年目で、日本の大学を卒業して日本の企業に就職している。彼も「日本に来てから、中国にいたときよりも友達がお互いに助けあうことを重要だと感じるようになった。日本人同士の付き合いより、中国人はお互いに求めるものが多いと思う」と述べている(2008 年 5 月 11 日)。

特に在日中国人の若者たちは一人で暮らしている人が多く「相互扶助・協力」が友人について語るキーワードになっている。上原の調査によると、中国本土の大学生は、友人として重視する点に「人柄の良さ」を 1 位にあげているが、在日留学生では「相互扶助・協力」が 1 位だった(上原 2009)。それは、母国の支援グループから切り離されて、他者の支援をより必要に感じているためだと考えられる。王と今川による日中大学生の交友関係に関する比較研究では、自由記述の内容を検討した結果、日本では距離・大切・気を使わない・配慮・なんでも話せるなど、友人への関わり方に関する内容が多いのに対して、中国では期待・満足・要求・希求といった願望についての内容が多かった(王・今川 2007)。

以上の友人観の違いから「中国人らしさ」を指摘することもできるだろうが、それは、彼らの文化的アイデンティティやエスニシティというよりも、生活上の必要をみたく意味も含めて、在日中国人の若者に生まれつつある新しい友人志向というべきだろう。サッカークラブは、仕事や学校といった日本社会が色濃い場から距離をおきながら、日本人も含めた友人を増やす機会を彼らに提供している。インタビューでは、学業や仕事、生活に関わる問題まで、サッカークラブのメンバーから援助を受けて解決できたという話が多く出た。アンケートでも、日常での付き合いの中で、一番仲良く会う頻度が多いのは、サッカークラブで知り合った友人だと答えた者はメンバー全体の 8 割と圧倒的に高かった。趣味



ネットワークが新しいエスニック・アイデンティティの受け皿になっていると考えられる。

## (2) 伝統的なエスニシティからの離脱

### a) 家族・親族との距離感

大阪国際 FC のメンバーは、もちろん家族や親族を大事にしている。ただし、遠くにいる家族からは経済的援助以外を受けにくく、彼らは伝統的な社会関係に加えて友人の存在を強調する。

在日 5 年目の ZH は、常に本国にいる両親を思う親孝行な若者である。「私は一生懸命に仕事をしている。そのため頑張って節約して貯金したお金を両親に毎月仕送りしている。でも、両親以外の親戚に対しては、あまり大事さを感じておらず、それより友達の方が大事だと思っている。いくら節約しても、サーカークラブには毎週必ず参加し、食事会にもよくいっている」(2007 年 7 月 22 日)。

来日 1 年目の Se は、日本の企業に就職したため大阪に移住してきた。「中国にいたときは、大事なことが起こると両親と相談したけど、今は国から離れて、両親と距離を感じている。その代わり、サッカークラブの親友たちは日本にいる親族のような感じがする。日本語も上手ではないから、サッカークラブの中国人の友人たちとすぐ親しくなった」(2007 年 10 月 14 日)。

中国では一人っ子政策のため、都市部の若者はほとんど兄弟姉妹がいない環境の中で育ってきた。親族との接触頻度も減っているため、親族関係が希薄になり、信頼できる友人のネットワークが相対的に重要性を増している。

### b) 華僑・華人団体から友人ネットワークへ

現在の在日中国人社会では世代交代が進み、戦前から続く華僑社会に替わり、伝統文化に興味を持たなくなった若い世代にいかにか中国人としての意識を確立させるかが課題になっている。

キャプテンを担当している M は、日本滞在が 6 年になり、現在は大学 4 回生として就職問題に直面している。「自分が中国人だとは意識しているが『○○人ですか』と聞かれるのは嫌だ。それは友人の間では問題じゃないからだと思う。中国人の留学生としてずっと頑張ってきて、華僑協会などについて聞いたことがあるけど、行ったことがない」(2007 年 12 月 2 日)。

A は来日 7 年目で、日本の大学を卒業して就職したばかりである。「組織的な協会などは自分の居場所ではないと感じている。それより、サッカークラブに行くほうが楽しめる。日常生活の中で困ることが起こっても、華僑協会が解決してくれるとは思っていない。華僑協会は、年寄りやビジネス関係の人たちが行く所であって、自分にはもっと身近な大学の事務か、趣味のクラブに行くほうが確実に生活に役立つと思う」(2007 年 5 月 20 日)。

インタビューでは多くのメンバーに来日以後の体験を話してもらったが、彼らの多くは

パーソナルなネットワークを重視し、その中で自分の人格を形成し成長しようとしていた。もちろん、伝統的な集団関係を尊重する人もいたが、その数は非常に少なかった。現在の在日中国人の若者たちは、自分たちも経済的に豊かな環境で育ち、日本の受け入れ制度も改善されてきたので、従来の華僑団体がもっていた機能をあまり必要とせず、伝統文化への意識も薄れてきたように見える。尾崎は、「エスニック・ゲーム」としてのサッカー活動は、「脱エスニック化 (de-ethnisation)」であり、エスニック・コミュニティの象徴として位置づいていると述べた (尾崎 2005)。「脱エスニック化」は本事例でも確認することができた。また、一般的に組織的な活動に関わることを面倒に感じる傾向もある。ただし、同年代の日本人と比較しても、趣味のクラブなどで友人をつくることには非常に積極的で、そこに新しいエスニック・アイデンティティを見いだすことができる。

### c) 趣味ネットワークによる精神的な援助と情報の獲得

サッカークラブは在日中国人の若者たちをつなぎ合わせる結節点である。ここでは、異なった日常生活を過ごす者たちが利害などのしがらみなしで付き合える。クラブへの参加が生活を充実させていると彼らは話した。

大学2回生のPからクラブに参加した感想を聞いた。「サーカークラブで他の大学の中国人と知り合いができ、たくさんの社会的な経験ができたことは良かったと思っている。楽しくサーカークラブに参加し、学校やアルバイトでの悩み、恋愛の悩みなどを友達とよく相談できた。クラブで日本人とのコミュニケーションもうまくできて、日本人の友達が増えてきた」(2008年3月9日)。

試合でよく活躍しているCheは、サーカー以外の余暇活動にもよく参加している。「サッカーで運動すると体も健康になって、私には大切な機会だ。運動以外にも、みんなで食事会に行ったり買い物に付き合ったり、生活に必要な情報を手に入れ、生活上の不満や疲れを発散することで、留学生生活もうまくいっている。食事会以外にBBQをやったりして、みんなといろいろ楽しんでいる」(2008年9月21日)。

サッカークラブに参加することは、スポーツを通じて仕事や生活のストレスを解消し、身体の健康を増進するだけでなく、メンバーにその他の様々な恩恵をもたらしている。同じ在日中国人という共通点を持ちながらも異なる社会的背景の人とのつながりができる。他のメンバーに個人的な悩みを相談でき、さまざまな立場からの意見が聞ける。さらにメンバー間には学業や仕事、生活面でのサポート関係があり、日本に滞在する上で必要な情報も共有されている。在日中国人にとって、日本にどのような制度があるのかすべて把握するのは難しい。生活に関する情報の入手は、重視されている。さらに、若年者にとって年上者の生活は、自分の将来を考える際の身近なモデルケースともなっている。

## 7-3 「弱い紐帯」と在日中国人アイデンティティの変容

ここでは、趣味ネットワークが弱い紐帯から結ばれると見られ、そこで、生まれる新たな親友関係を在日中国人若者の社会関係資本の一つと定義し、趣味ネットワークを介して、彼らがエスニック意識の変容を見つきたい。

### 7-3-1 趣味ネットワークにおける「弱い紐帯」

グラノヴェッターは、「弱い紐帯の強さ」の主な内容として、弱い紐帯は強いネットワーク同士をつなげる“ブリッジ”として働き、情報が広く伝播するうえで非常に重要な役割を果たすという。また、弱い紐帯によって伝達される情報や知識は、受け手にとって価値が高いことが多い。強いネットワークの内部では接触こそ頻繁だが、たわいない話題などを交換しているだけのことが多いのに対して、弱い紐帯では関係性が弱いにもかかわらず連絡を取るほど、伝達内容は重要なのだということができよう。

Granovetter は、多くの弱い紐帯を持つと情報収集に有利であると指摘している。そして、特定の強い紐帯だけを持つ人よりも、多くの弱い紐帯を持つ人の方が良い情報を獲得できるとしている (Granovetter 1973)。

在日中国人調査事例において、発足当時に比べるとサッカークラブ内での人間関係は一見希薄化したように見えながら、活動はますます活発化している。これは、まさに「弱い紐帯」を選択できる幅広い関係性の束がこのサッカークラブに存在しているからであろう。

### 7-3-2 在日中国人の若年層におけるアイデンティティ

綾部は、エスニック・グループとエスニシティを明確に区別し、エスニック・グループと、その性格やアイデンティティ、つまり民族集団の在り方の総体を示すエスニシティは使い分けるべきだと述べ、エスニシティの概念は認識現象の構成体であり、エスニック・グループは行動現象の構成体に近いものであると考えている (綾部 1993:4)。

アイデンティティは、独立自存的なものではなく、他者との関係において形成されるものとされる。本稿は、その基本的観点にならって、若者のアイデンティティ意識が、対人関係一なかでも彼ら彼女らにとって重要な他者である親・友人との関係一およびコミュニケーションとどのように関連しているかを、本部の事例調査データに基づきつつ検討してみる。

在日華僑が文化の日常的側面において社会化・同化の傾向を示す一方で、文化の非日常的側面としての祭祀や芸能は、エスニシティの維持と復活・再編において、大きな役割をになうようになっている (王 2001:48-59)。本稿における新たな在日中国人エスニック・グループは、新/老華僑・華人と同一の文化を共有しながら、日本の下位社会を形成していく。そして、エスニック・グループとして、日常的な活動を行い、集団間の境界を作ることによって、独自性を持ったエスニック・アイデンティティへ変容してきたと考えられる。

アイデンティティを確立するためには、自分自身の内的な信念の一貫性と同時に、自分が社会に関わっていくスタンスや他者との付き合い方の指針の確立が求められる。現在、日本社会では、流動化社会になり、在日中国人の若者たちが、アイデンティティの決定のみならず、その決定の指針の前提についても各人が決定することが求められると考える。彼ら、日本でも学歴が高く、高い学歴を獲得しても、将来が保障されるわけではないことが示すように、学校の果たす役割は、相対的に低くなりつつある。局所的な関係ごとにその都度のよりどころを調達する「状況志向」が高まっている。在日中国人若者場合では、学校・職場（アルバイト先）などの複数の顔を状況に応じて使い分ける様相を呈する多元的自己もみられる。社会全体がリキッドなものに変貌しつつあるのだとしたら、若者がその関係や自己をリキッドなものに変えていくのは、いわば戦略としてやむをえない。また、本調査において、在日中国人若者世界に、「家族」と「学校」以外に、第3の極として「趣味の世界」が加わっている。例えば、活動クラブは、「自己表現・自己確認のための切実な立場」である。

「地縁」や「血縁」などといった言葉がよく知られる一方で、趣味縁は若者の間に現に存在している。「新しい公共」を若者の生活に即して主題化するのなら、趣味縁はその重要な一部をなすはずだ。それを考慮するかしないかで、支援の仕方もずいぶん変わってくるであろう。

#### 7-4 小括

日本において、従来の華僑・華人という枠組の中では定義できない在日中国人グループが誕生し、「新・華僑・華人」が論じられるようになって久しい。在日中国人社会の研究は大きな転換点を迎えている。本章では、日本人を含む若者のネットワークが形成される中で、在日中国人が定住に必要な知識と社会関係を獲得していくプロセスに注目した。それは彼らの意思決定に影響を与え、人間関係を調整し、中日の両文化から影響を受ける若者グループに共通する友人観を生んでいる。

中国人の若者たちは、職場・学校などで円滑な友人関係を保とうとするが、同時に、他とつながることで個人の様々な能力を発揮する場が提供され、誰でも主役になれる世界を実現したいとも考えている。友人ネットワークは、楽観的にいえば、多様で豊かな在日中国人社会である。個人的な生活の楽しさを享受する一方でプライバシーを重視し、伝統的な付き合いから解放されるので、そこでの緩やかな友人との信頼関係が在日中国人の若者たちにとって大切な関係になっている。

現在、在日中国人社会は、古い地縁・血縁のネットワーク、新たな友人ネットワークを介して彼らの機会と選択範囲が複合的に広がっていくような社会になってきている。そして、日本語が上手になった、日本の会社に就職できた、仕事がうまくいっている、専門知識を身につけた、社会的信頼を築いたなどの目的達成感により、さらに日本社会への参加を深化させつつある。

サッカークラブの事例研究を通じて、趣味ネットワークの実態を分析してきたが、そこから得た知見を以下にまとめる。

まず第 1 に、中国本土社会に生じている社会的断層が、在日中国人社会にも反映されつつある。その最大の断層は世代的なもので、現在の 20 歳代は一人っ子として育ち、しかも進学率の急上昇により他世代と比べても全体的に突出して高学歴である。同時に、彼らが生まれ育ってきた時代は、中国の急激な経済成長と重なり、そのことが彼らの強い中流意識とともに高い生活の質（特に趣味や娯楽）への欲求を生み出している。また東北地方出身者に典型的なように、留学生には都市出身者が多く、個人主義的で合理主義的な気風を強めている。これも、趣味ネットワークが広がる社会的土台になっている。

第 2 に、日本社会においては職場や大学での上下関係を嫌い、在日中国人社会においても華僑・華人団体と疎遠になりがちのように、彼らはタテの関係よりもヨコの関係を好み、その中で自らのアイデンティティを確立しようとする。家族と遠く離れていることや、一人っ子政策で親族が少なくなっている影響もあり、彼らが友人関係を重視する傾向が強まっている。そこには「中国人同士」という同胞意識をみることができるが、それは伝統的な中国人社会あるいは華僑華人社会のものとは異なる新しいエスニシティの源泉である。

第 3 に、趣味ネットワークは若年層を中心に在日中国人のアイデンティティの基盤になっているが、同時にそれは相談相手や助け合い、さらには仕事や生活に必要な情報の交換の場という実利的な側面もあわせもっている。そのために一定の多様性（社会人と学生、別の仕事や大学の友人、異なる地域に住む友人などの存在）がネットワークの中に必要となる。そのために、趣味ネットワークは強い紐帯と弱い紐帯の両方を含むことで成長していると言える。

在日中国人社会全体を俯瞰するならば、もちろん伝統的なエスニック・ネットワークもなお強く存在しているが、同時に本論でみたような新たな友人（趣味）ネットワークが相補的・複合的に広がりつつある。その結果、在日中国人の日本社会への参加を深化させつつある。このことは、伝統的なネットワークが弱体化すると同時に、若年層の孤立が深まっているといわれる日本人社会と対照的ではないだろうか。そこに（在日）中国人社会に特徴的なエスニシティ、新しい関係（ネットワーク）志向を見いだすことができるだろう。

次の最終章では、本題の問題設定に関して、既存研究の検討や、本調査の事例分析を通じて、検証された結果について、まとめていく。

## 第七章 注

1) インタビューの対象とした中国人メンバー26名のプロフィールは、次の表のとおりである。なお、インタビューの記録は、中国語が約7割でその他は日本語でおこなっている。本稿で引用したデータのうち中国語のものは日本語に翻訳している。

名前	中国出身	年齢	来日年数	在日身分	日本の住所	付注
Y	遼寧省	34	12	永住、会社員(尼崎)	大阪市淀川区	チーム責任者
Li	遼寧省	34	9	家族滞在、アルバイト(大阪)	大阪市西淀川区	
So	遼寧省	27	1.5	会社員(大阪)	大阪→横浜	横浜へ転職で引退
Su	遼寧省	27	1.5	会社員(大阪)	大阪市中央区	
Qi	遼寧省	28	2	自営業(大阪)	大阪市中央区	
A	遼寧省	29	7	会社員(高槻)	大阪市淀川区	
Xu	遼寧省	24	4	学部生(大阪)	大阪市西成区	
AO	吉林省	35	11	会社員(東京)	大阪→東京	成立当初のリーダー、転職で引退
P	吉林省	25	4	学部生(大阪)	大阪市淀川区	
H	吉林省	25	3	学部生(大阪)	大阪市東淀川区	
M	黒龍江省	26	6	学部生(大阪)	大阪市西成区	キャプテン担当
Wa	山東省	23	2	学部生(大阪)	大阪市北区	
X	山東省	29	8	会社員(大津)	大阪市東淀川区	現在のリーダー
CH	山東省	24	2	大学院修士課程(大阪)	大阪市北区	
S	山東省	33	12	会社員(大阪)	大阪市西成区	
W	山東省	30	6	大学院修士課程(大阪)	大阪市港区	
Yc	福建省	29	16	永住、会社員(大阪)	大阪市西区	
Yu	河北省	34	3	家族滞在、会社員(大阪)	大阪市中央区	元プロサッカー選手、監督担当
Za	湖南省	31	11	永住、会社員(大阪)	大阪市北区	
Q	陝西省	29	6	大学院博士課程(京都)	京都市	進学で京都に移住した
L	北京	36	7	会社員(大阪)	大阪市天王寺区	
Se	北京	27	1	会社員(大阪守口)	大阪市都島区	
Zh	天津	24	5	学部生→会社員(大阪)	大阪→神戸	就職で引退
Liu	天津	57	25	永住(残留孤児)、会社員(大阪)	大阪市淀川区	マネージャー担当
Che	上海	28	6	会社員(大阪)	大阪市東淀川区	バスケットボールクラブにも参加している
CU	香港	23	2	学部生(大阪)	大阪市中央区	

表 インタビューの対象者メンバー（年齢と来日年数は2008年3月現在）

## 第八章 中国若年層の個人主義化と新しい信頼関係の模索

社会変動の研究は、単にマクロな社会構造（例えば政治や経済）の変化を扱うだけではなく、それと同時に社会の中で生きる「人間」の変化をも社会学的な視点から分析の対象としてきた。とりわけ、近代化にともなう個人主義化、社会や人間関係との結びつきの変化、さらに若者たちが個人主義的な行動に傾き、新たな形で社会関係を模索することも主要なモチーフである。

前章まで、中国本土社会や、在日中国人社会におけるネットワークの変化、若者の間での新しいネットワーク（趣味ネットワーク）の誕生、および彼らの社会関係資本の生成について調査した内容をまとめ、社会ネットワーク的視点から検討・分析してきた。本章では、中国人社会の体系的な研究をする上でネットワーク的視点が有効なことを考察した上で、今後の中国における若年層研究の方向性と課題について整理したい。

### 8-1 「若者」を見るネットワーク視点の有効性

社会ネットワーク理論は過去半世紀の間、様々な研究領域で展開されてきており、現時点まで膨大な研究成果が得られている。そして、世界各地の中国人研究の中で、ネットワーク視点から展開される研究もよく見られる。中国人のネットワークがグローバル時代になり、広範囲かつ大きく変動していることがその背景にある。

中国人社会の研究には、昔からネットワーク的視点が導入され論じられてきた。組織的なネットワークや個人ベースのネットワークは、中国人のビジネス（仕事）上の継続的な取引や協力の関係、生活上の情報活性化などにおいて大きな意味を持っていたと考えられる。社会ネットワークが互酬性すなわち評判を通じて果たす役割への関心が高まっている。つまり、互酬関係が中国人の間で協力関係を発展させ、ネットワーク内部で循環する評判が中国人の間での機動的な連携を可能にしている。先行研究から、中国本土社会や在日中国人社会において若者たちの社会生活が変わってきたことや、社会ネットワーク視点から見る中国人社会の重要性が明らかになってきている。中国の「若者たち」の世界を構想する上で、社会ネットワーク論の立場に立つ埋め込みアプローチはこうした問題に対して社会学的に答えようとしている。

社会ネットワーク理論は、古典的なイノベーション普及理論にみられるような行動変化の個人的心理的アプローチへの批判から、その古典理論の延長として展開された。その根本的な考え方は、個人を環境から切り離して考える伝統的な行動論的研究とは異なり、個人間関係を分析ユニットとし、個人の行動や態度の変化の要因を従来の個人的属性以外の社会ネットワーク環境に求める点である（Kincaid 2000）。

### 8-2 増殖する「中流階層」における趣味ネットワークの形成

既存の研究やCGSSの分析結果から、現在の中国社会では、経済が特に都市で発展して

以来、人々の生活が豊かになったことが確認できる。社会階層研究の流れの中、そして、CGSS の階層分析からでも、中流階層が拡大する動向は、明らかになっている。さらに、中流階層の中では若年層の者が多く、彼らは学歴が高い、その友人ネットワークを介して、豊かな余暇生活を暮らしている。また、在日中国人に関する研究でも、近年、来日している中国人たちが、多様な身分、あるいは滞在資格を持ち、在日中国人の大半を占めている若者たちが中流階層に属し、考え方が合理的であり、中国の北部・東北部出身者が多いことが検証された。

近年、中国若者の中で、趣味ネットワークが友人ネットワークの一つとして形成され、広がっていることが、既存研究と本研究のデータおよび事例の分析から、明らかになってきた。ここでは、その趣味ネットワークの形成過程から、中国の若者たちの社会的な動きについて、検討する。

まず、中国社会における趣味ネットワークが形成される背景について考察を進める。

1) 中国本土における社会ネットワークの変化。経済発展してきた中国の社会、多様化する社会諸現象の変化が社会ネットワークの発達に影響し、問題が抽出された。中国では元々血縁・地縁を基盤としているネットワークを維持しながら、個人ベースのネットワークを重点的に押し広げてきたが、経済の発展に伴い、文化・文明的な発展を要求されてきた。そこで活躍している若者たちが、仕事・学校の余暇時間をうまく利用できるように、そのための新たな社会ネットワークの構築が求められた。その中で、文学・音楽・スポーツ・芸術などの趣味のためのネットワークも最近徐々に現れてきた。

2) 在日中国人社会の変化。在日中国人のビジネス・就労・留学環境・生活などの点から社会的な変化が生じ、長期滞在になっている中国人若者たちが日本社会の中で増えている。最近、日本企業における人材不足により中国人就職者が急速に増加して、日本社会で働きながら貢献している。そして、中国人が経営している企業も日本社会に進入し、日本経済発展にとって、不可欠な構成要素になってきた。現在新規留学生の大半は、親の経済援助に頼り、アルバイトと勉強ばかりを送っていた昔の留學生活より豊かになっているように見える。それから、在日中国人、特に若者たちが勉強・仕事・生活などからストレスがたまり、生活をもっと楽しく過ごせるように個人レベルの要求が強くなってきたとみられる。その上で、在日中国人ネットワークの変化から日本社会を見ると中国人は現在すでに80万人を超えており、活躍している中国若者が段々現れてきた。趣味ネットワークから結ばれた緩やかな社会関係によって、日本の地域社会の活性化にも中国人たちが積極的なイメージを投げかけている。すなわち、日本は多民族共生社会を構築すべきであり、日本人のみの世界に安穩と暮らすことは難しい。異なる民族と接触し、共生の道を模索しなければならない。

本論文において、中国本土社会では、拡大しつつある中流階層に属する人々たちは、年齢層が若く、学歴が高いとみられている。彼らの今日の姿を、一応「若者文化」とするならば、中国にそれがいつごろから明確化してきたのであろうか。一般には、近年の経済が



発展して以来だと見られているが、若者たちが創造した、若者にとって独自の文化の面もある。会社、および学校・大学の部活・サークルより、自発的な趣味団体へ参加率は、著しく増えてきており、趣味ネットワークが急速に広がっている様子がうかがわれる。そして、趣味ネットワークへの参加が生活の満足度を押し上げる効果は、それだけ大きくなるということである。たしかに、伝統的な「縁」である地縁・血縁・社縁（学校や職場等、いわゆる仕切られた場所での対人関係）の方がうまくいけば、もちろん、生活満足度が上がるのだが、より趣味ネットワークに参加しているとさらに大きく満足度を上げることが確認された。つまり、若者の満足度という点から見れば、従来型の「縁」より、「個人的」あるいは「自己」を重要視した、趣味縁としての友人ネットワークが重要であるということであろう。

### 8-3 中国の「若者」における濃厚な個人主義の色彩

本研究における社会ネットワークと社会関係資本論のレビュー、先行研究や事例調査の分析から、個人主義化する中国人社会で、若者たちは従来のような集団・組織より友人関係などに満足感を大きく感じている。それは、集団的な考え方をする日本人と相違している<sup>1</sup>。日常的に文化、行為と言語上の摩擦を生み出していると思われる。中国社会において、個人に重きを置き過ぎた社会環境を受け、今に至った若い方々は、多様性や個性を重視する緩やかなマネジメントの方が、本来個人が持っている良さが最大化され、より生産性があがるという。なお集団主義の色彩が残る日本よりも、個人主義は、中国やアメリカの方が徹底しているだろう。

中国の若者の社会意識の変化について、王鳳も、人々の価値観が統合されていない現状に関して、「青年たちは、人生の目標に対して戸惑い、理想主義的な追求に欠けており、また社会的責任感と社会服務精神に欠けていて、政治意識も薄い。逆に、実用主義、個人主義、拝金主義、享楽主義は、青年たちに強い魅力をもっており、一部分の青年にとっての最高の価値目標になっている」と論じている（王 2011）。

中国人は個人主義という民族性から、権利の極大化と義務の極小化を図ることがすべての局面において大前提となる。特に現在の中国の若者たちは、国家を信用していない代わりに、家族や真の友人をととても大切にす。さらに、先行研究の論述も、事例研究の結果からも、中国社会において、若者の価値観が変化してきたと明らかに見られる。全体的に概観すれば、まず、従属意識から主体意識へと変わり、現代人に相応しい素質として主体意識、選択的行為、個人の独立した思考などを持つようになった。そして、集団意識から公共意識へ、貴賤意識から平等意識への変化もあったということである。

### 8-4 趣味ネットワークから新しい信頼関係の形成と情報の獲得

本研究の調査において、趣味という友人ネットワークを介して、中国若者たちの間に、

新たな親友関係が形成され、多様な社会的な情報も伝達されている。ここでは、社会関係資本論を用いて、中国若年層社会における趣味による紐帯を形成しているネットワークを介して、信頼関係の形成や情報の伝達について、述べてみよう。

中国本土社会、および在日中国人社会が日々新しく変化し、若者たちの間に、趣味ネットワークが誕生してきた、彼らの生活・仕事及び学業などに活性化する利点をもたらした。交流を通じて人とコミュニケーションを行うことによって、自らの中国人社会のあり方について新たな発見を行う。その中国人社会における趣味ネットワークの誕生及び社会関係資本の新しい変化について以下にまとめてみた。

1) 中国人ネットワークをとりまく社会環境は変化した。本稿で論じてきたような中国人社会において、中流階層の拡大に伴い、高学歴の若者たちが増えていく。経済のグローバル化の影響も受けて、近年、在日中国人若者が激増しており、日本社会に飛び込む様子を窺っている。中国本土と、海外における中国人に関する先行研究を検討した上で、中国本土社会の変化の影響も受け、日本社会で活動している中国人たちが質的・量的に変化し、注目すべきニューカマーは、昔より各レベルで相違している。さらに、趣味ネットワークを通じて、彼らの余暇生活の活動する範囲を広げて、生活環境や生活意識を変えてきた。

2) 中国人社会のネットワーク構造が変化してきた。社会ネットワーク論の先行研究のレビューから、従来の地域・家族など組織的なネットワークから個人ベースなネットワークが注目されてきた。多様なネットワークを基盤とする信頼できる中国人社会を構築するために、社会ネットワークの形成のメカニズムから中国人たちも新しい個人ベースなネットワークを作り出しつつある。そこで、特に中国若者たちの生活・仕事及び勉強に対して、組織的なネットワークより、個人ベースなネットワークが機能している。そして、ネットワークを手段とし、ビジネス構造と活動を大きく変えたとともに日常生活にも多大な影響を与えてきた。つまり、欲しい情報を得るために個人ベースなネットワークを作り、コミュニケーションできる環境を実現するネットワークのコネクティビティを高めることである。ネットワークによる変化は、彼らの生活を充実させるものが数多く登場し、信頼に与える構造的効果が生まれる。

3) 趣味ネットワークを介した、あるいはネットワークという場における、コミュニケーションや社会関係のあり方に変化が生じてきた。本研究の二つ事例研究の中で、アンケートやインタビューデータの分析結果から、新しい（趣味）ネットワークにより、中国若者たちのコミュニケーションが活性化されてきたことが明らかになった。その活性化するコミュニケーションの浸透が、人々の心理を繋がりやすくし、社会生活に関する便利な情報を得やすくする。ネットワーク上で利用されるコミュニケーションは、情報交換のためのツールとして普及が進んでいる。今は、家族、地域など組織といった従来の社会的枠組みと別に、共通の趣味・関心という新しい枠組み、情報の源として新しいタイプの中国人ネットワークが形成され、情報の交換やキャリアの蓄積が進みつつある。趣味の活動に参加と自己実現の「場」を求める中国若者がいて、その活発な活動がさらに彼らの社会生活

を豊かにしていくと期待されており、社会関係の在り方もその方向に変化してきた。

4) 趣味ネットワークから形成する親友関係は、中国若者の社会関係資本の新たな一つの形になっている。本論文の分析から、個人レベルの新しい展開として趣味ネットワークによって、中国若者たちの社会関係資本は個人ベースで形成されつつあることが明らかにした。パットナムが社会関係資本の三つの要素として整理した「信頼、ネットワーク、互酬性の規範」にほぼ対応しており、この意味で、中国人社会における社会関係資本の維持、発展の重要性を示している。今後、趣味の活動を活性化させ、人々のつながりを強め、個人化する社会の中で組織化より緩やかな関係資本を新しい形で形成していくと考えられる。

本研究の分析から、趣味の活動から社会関係資本が生まれる効果は高い。人間関係による信頼が築かれ、その信頼が人の自発的協力を促進する。趣味ネットワークにより、緩やかな社会関係に人々の満足感が高く、中国社会に活発に参加する傾向が生じてくる。在日中国人たちも、実際に日本社会で生きてきた経験から身につけ、生きる方法とは、他集団と相互に理解・信頼する社会関係を築く一方、自分集団内部の多様性を尊重し合うというものである。社会の信頼性向上等との関係について考える場合、厳しい階層構造で構成される人間関係よりも、個人的欲求を満足させるネットワークを作り出し、協調的な行動によって社会の効率性を高め、フラットで気楽な関係を志向する傾向が強まりつつある。

しかし、緩やかなネットワーク内でのコミュニケーションは活発なものであり、人々の心を繋がりやすくする。さらにコミュニケーションの浸透により、社会生活に関する便利な情報を得やすくするという、情報交換のためのツールとしても機能するようになるのである。趣味ネットワークと呼ぶことができるこの新しいスタイルのネットワークは、個々人が自らの趣味のために参加するクラブやサークルで形成されるため、友人ネットワークの一部として位置づけることができる。趣味ネットワークを介して生まれてきた新たな友人の信頼関係は、伝統的な家族関係よりプライベート領域とかかわり、分かち合うことができる人間の説得が、安心と呼ぶ信頼性が機能し、中国本土や在日社会の不確実性を減少する可能性がある。

都市化が進む中国社会において、都市生活では、身体的にも、社会的にも、心理的にも、不自然で不健康なところが生じていることである。したがって、中国若者たちが、生活の満足感を高めるために、余暇生活の楽しみを求めてきている。さらに、中国社会の構造が変化し、多様なネットワークを基盤とする「信頼社会」を志向するようになってきたことがわかる。趣味ネットワークの形成プロセスから、中国若者たちが新しい個人ベースの人間関係を構築しつつあると見られている。かつての中国人が人間関係に対して不信任感が強かったのに対して、本研究の分析結果から、個人主義の色彩を強めている一方で、人間関係に関する信用が高くなり、人間関係を重要視していることがみてとれる。他者に対する思いやりや社会に対する関心は、中国人若者たちの意識と行為からみいだすことができる。

我々が直接関与している人々とは、我々のパーソナルな社会的ネットワークを構成している。しかしどのような方法で関与しているのか。日々積極的に関与している友人たちと、仕事以外に時間を費やし、余暇時間のすべてを趣味活動のような社交をしている。近年、中国社会では、人々は趣味活動の楽しさゆえに、ネットワークに参加する。したがって、旧来の伝統的な信頼関係に比べより緩やかなつながりが生じることになる。スポーツなどの趣味を通じて形成するネットワークは、エスニック意識を揺るがし、エスニシティの衰退へ動く可能性もある。

#### 8-5 在日中国人社会と中国本土社会における趣味ネットワークの相違

中国本土における事例研究や、在日中国人のサッカークラブの調査から、趣味ネットワークを作り出し参加するのは、まず趣味のためではあるが、その上、生活・仕事・勉強などにプラスとなるネットワークを広げて作りだすための目的も存在することが明らかにされた。以前の中国人社会ネットワークの強い結び方と比べると、現在新しく形成されている若者ネットワークの連結は弱く見えるが、その幅は広がっている。他方、趣味活動に参加しつつ、弱い紐帯から強い紐帯になっていくようにもみられる。しかし、全体的にはその幅の広がりとともに入手する情報もますます多様になり、社会関係資本の形成もリラックスした新しい形になっている。

そこでは、中国本土社会と比較すると、在日中国人社会において、趣味ネットワークの重要性が明らかに高いと思われる。インタビューデータからでも、在日中国人たちが、家族と離れ、日本における友人関係が親密になってきて、「家族」のような関係になっているという声がよく聞かれた。一方、中国本土の場合では、家族と一緒に趣味ネットワークに参加したりすることもあり、血縁関係は従来のように大事にされていると見られる。したがって、趣味ネットワークをある手段とし、ビジネス構造と活動を大きく変えたとともに日常生活にも多大な影響も与えてきた。つまり、欲しい情報を得るために個人ベースなネットワークを作り、コミュニケーションできる環境を実現するネットワークのコネクティビティを高めることである。ネットワークによる変化は、中国人本土社会の生活を充実させるものが数多く登場し、信頼に与える構造的効果が生まれる。

今後、昔のような地縁・血縁なつながりより、これらのインフォーマルな社会関係が、若者たちの生活・仕事などの不安・不信が渦まく社会を変えていく可能性もあるだろう。これからの中国本土社会と在日中国人社会ではさらに変化し、緩やかなネットワークを結んでいくと考えられる。特に趣味ネットワークが、中国人の生活や仕事上の不安不信を解消していく可能性も予測される。生活・仕事および勉学にもプラスに機能し、余暇生活の活動範囲を広げ、生活環境や生活意識を充実向上させてきた。個人主義と自由への志向が強い中で、相互信頼を形成するために、中国人若年層社会において、趣味ネットワークはこれから、中国若者たちの社会関係資本の一つになり、重要な社会的基盤となりつつある。

## 8-6 小括

中国人社会における若年層の急速な高学歴化や職業上の中流志向の中で、新たな友人および趣味の関係を中心とするネットワーク論と社会関係資本論の展開が求められ、本研究はそこを開拓し展開するものとして、従来の欧米社会ネットワーク論における家族や地域、コミュニティや企業などの組織に関する理論研究の延長線上に位置づけられる。

中国社会学における社会ネットワーク研究の成果や中国本土の調査分析をみてきたと、在日中国人研究の流れも振り返ってみて分かるのは、かつては集団的なものとしてとらえられていた社会ネットワークが個人的なものとしてもとらえるようになってきた、という大きな流れが存在していることである。日本以外、アメリカ・カナダ・ヨーロッパなどにおいて、中国系移民に関する研究をよくされている。その中、一般的に、「中国系新移民」に注目する研究が多く増えてきた。例えば、山本は、フランスにおける新しい中国系移民に焦点を与え、彼らは、新たな教育を受ける事態について論述した（山本 2010）。

本研究の分析から、趣味活動から社会関係資本が生まれる効果は高い。人間関係による信頼が築かれ、その信頼が人の自発的協力を促進する。趣味ネットワークにより、緩やかな社会関係に人々の満足感が高く、中国本土および、日本社会に活発に参加する傾向が生じてくる。在日中国人たちが実際に日本社会で生きてきた経験から身につけ、生きる方法とは、他集団と相互に理解・信頼する社会関係を築く一方、自分集団内部の多様性を尊重し合うというものである。社会の信頼性向上等との関係について考える場合、厳しい階層構造で構成される人間関係よりも、個人的欲求を満足させるネットワークを作り出し、協調的な行動によって社会の効率性を高め、フラットで気楽な関係を志向する傾向が強まりつつある。今後、昔のような地縁・血縁なつながりより、これらのインフォーマルな社会関係が、生活・仕事などの不安・不信が渦まく社会を変えていく可能性もあるだろう。これからの在日中国人社会はさらに変化し、緩やかなネットワークを結んでいくと考えられる。

また、趣味ネットワークは中国若者たちの生活・仕事や勉学にもプラスに機能し、余暇生活の活動範囲を広げ、生活環境や生活意識を充実向上させてきた。趣味ネットワークは、コミュニケーションを活性化し、人々の心を繋がりやすくし、社会生活に関する便利な情報も得やすくする。自己実現の場を求める中国若者の間に新たな「信頼」という社会関係を築き、社会での満足感や自発的協力を促進している。趣味ネットワークは彼らの同属意識を強化している。中国の経済発展にともなう高学歴化や中流階層の増大によって、個人が生活に求める要求も多様化しかつ高まっている。そこに、様々な趣味ネットワークが求められ形成される理由がある。中国若者の中で、生活をもっと楽しく過ごせるように個人レベルの要求が強くなり、もっと自由的な時間の利用を大事にするようになった。

## 第八章 注

1) 中国と比較すると、日本人は個々人が所属している集団に対する、帰属意識が強い傾向がある。それに対して、中国人は集団の中の個人の存在を強調する傾向があると見られている。例えば、日本人は自己紹介するとき、「〇〇会社の△△です。よろしくお願いします。」と言うのが普通なのだが、中国人では、「私は〇〇です。△△会社に勤めています。」ということが多い。中国人は所属集団を補足の意味で言うのである。「△△会社に勤めています。」の部分を省略する場合もしばしばある。それとは対照的に日本の若者達は、西洋文化の影響で民主的で自由な意識プライバシー意識も高くなって来ている。特に「個人情報」に対する意識の傾向が強く、それと比べ、中国人の意識はやや遅れ気味である。例えば、中国の学校の先生は、よく学生の出席状況や学習に対して、褒めたり批判したりして干渉している。「彼は今日なぜ授業に出ないのか。」とか「恋人はいますか。」などと尋ねたりすることがある。中国人は同じ集団のメンバーなら、お互いに気にかけるべきだと思っている。個人的なことを尋ね、個人のプライバシーに深入りしても道理上自然なことだと考えている人が少なくない。

## 結 語

最後に、グローバル経済の加速化と労働需要の変化から新たな展開をみせている移住者受け入れの議論も踏まえ、経済の協力関係や国境を超えたネットワークのあり方などを通して、21世紀の中日共通の課題である「多文化共生」へ向け、この研究が今後果たしうる役割を考えたい。中日両国の経済往来、文化交流など多方面にわたる国際関係により、中国本土、および在日中国人社会もこれから、変化していくと考えられる。別言すれば、「中国人研究」という独立した研究領域が存在し、独自の研究方法があると考えられるのか否か。そして近年の若者たちの新しい動きや変化は、旧来の研究にいかなる問題を提起し、現在、最先端の研究はいかなる方向に展開しつつあるか。多様でネットワーク的な中国人社会を対象とする研究の相対化という課題に向けて、中国と日本という地域を如何に位置づけるかを考え、そこから中国人研究や海外（日本）における中国人研究を問いたい。

新しい中国人社会では、急速に知識化、低年齢化が進んでいる。若者の主要な源である多様なグループから構成ネットワークを形成される。知識層の中国人グループを主体とする中国人社会が形成され始めている。彼らは組織ネットワークよりも、自分らのキャリアにプラスになる、個人ベースのネットワークを求めている。

最近、輩出した中国人研究者たちは中国人社会の動態を広い視角から総合的にアプローチし始めている。けれども、21世紀の在日中国人社会を考える際に大きなテーマとなる若者の間に個人レベルで結ばれるネットワークをどう展望すべきだろうか。本研究における趣味ネットワークがこれから文学・音楽・スポーツ・芸術などの領域にも段々増えていくと予想できる。社会関係資本として硬い集団ベースから緩やかな個人ベースに変化してきた社会関係を中国若者たちが自らの問題として捉えていくことを提案したい。

## 【参 考 文 献】

- 浅野智彦, 2011『趣味縁からはじまる社会参加：若者の気分』岩波書店
- 綾部恒雄, 1993『現代世界とエスニシティ』弘文堂
- 辺燕杰, 1999「社会ネットワーク与求職過程」, 林益民・涂肇慶『改革开放与中国社会：西方社会学文献述評』香港：牛津大学出版社, 110-138
- , 2004「中国城市中的關係資本与飲食社交：理論模型与經驗分析」『開放時代』2:95-109
- 辺燕杰・丘海雄, 2000「企業的社会資本及其功效」『中国社会科学』2:87-99
- 辺燕杰・張文宏, 2001「經濟体制, 社会ネットワーク与職業流動」『中国社会科学』2:77-89
- 辺燕杰・李路路, 2008『制度转型与社会分層（基于2003年全国综合社会調查）』中国人民大学出版社
- Bott, Elizabeth, 1971, *Family and Social Network* (2nd ed.), Free Press (chapter 3, 野沢慎司訳「都市の家族：夫婦役割と社会的ネットワーク」(野沢編 2006) 所収)
- 陳映芳, 2007『“青年”与中国的社会変遷』社会科学文献出版社
- Coleman, James S., 1988, “Social Capital in the Creation of Human Capital.” *American Journal of Sociology*. 94:95-121 (金光淳訳「人的資本の形成における社会關係資本」(野沢編 2006) 所収)
- 費孝通, 1985, 『郷土中国』北京三聯書店
- ファーラー, グラシア, 2006「中国系移民の余暇サブカルチャーにおける性的および地位の実践」(広田・町村・田嶋・渡戸編 2006;196-222)
- Granovetter, Mark S., 1973, “The Strength of Weak Ties.” *American Journal of Sociology* 78:1360-1380 (大岡栄美訳「弱い紐帯の強さ」(野沢編 2006) 所収)
- 過放, 1999『在日華僑のアイデンティティの変容：華僑の多元の共生』東信堂
- 濱下武志, 2006「華僑・華人史研究をめぐる東南アジアと東アジアの連続と断絶」『東南アジア研究』43(4):332-345
- 韓春利・曹莉・孫晋海・王秋華, 2008「我国体育人文社会学發展現状, 問題与对策研究」『北京体育大学学报』31(9):1166-1170
- 賀賽平, 2004『社会ネットワーク与生存状態：農村老年人社会支持网研究』中国社会科学出版社
- 広田寿子, 2003『華僑のいま：日中の文化のはざままで』新評論
- 広田康生・町村敬志・田嶋淳子・渡戸一郎編, 2006『先端都市社会学の地平』ハーベスト社
- 江衛・山下清海, 2005「公共住宅団地における華人ニューカマーズの集住化：埼玉県川口芝園団地の事例」『人文地理学研究』(29):33-58.
- 金井壽宏, 1994『企業者ネットワークの世界』白桃書房
- Kincaid, D. Lawrence, 2000, "Social networks, ideation, and contraceptive use in Bangladesh: a longitudinal analysis," *Social Science & Medicine*, 50:215-231



- Lin, Nan, 1973, *The Study of Human Communication*, Bobbs-Merrill.
- , 1982, ‘Social Resources and Instrumental Action.’ in *Social Structure and Network Analysis*, edited by P.V.Marsden and N.Lin, Sage, 131-145
- , 1994, ‘Action, Social Resources, and the Emergence of Social Structure: A Rational Choice Theory.’ *Advances in Group Processes* 11:67-85
- Lin, Nan, 2001, *Social Capital: A Theory of Social Structure and Action*, Cambridge University Press (筒井淳也ほか訳, 2008『ソーシャル・キャピタル：社会構造と行為の理論』ミネルヴァ書房)
- Liu Hong and Liao Chiyang, 2006, ‘Network, Identity, and Ethnic Chinese Studies: Towards a Re-examination of Regional Orders in 20<sup>th</sup> Century East Asia’  
『東南アジア研究』43(4):346-373
- 李強, 2002「中国社会における階層構造の新しい変化：飯田哲也教授退職記念特集号への特別寄稿」『立命館産業社会論集』38(1):25-43
- 李沛良, 2001『社会研究的统计应用』社会科学文献出版社
- 李沛良・阮丹青・張文宏, 2004「城市居民社会网络的階層構成」『社会学研究』6:1-10
- 李春玲, 2008「中国中産階級的増長及其現状」『江蘇社会科学』5:74-83
- 李路路・王宇, 2009「当代中国中間階層的社会存在：社会生活状況」『江蘇社会科学』1:40-46
- 李培林, 2004『村落的終結：羊城村的故事』商務出版社
- 李志剛, 2012「中国大都市新移民の住房模式与影响机制」『地理学報』67(2):47-58
- 梶田孝道, 1988『エスニシティと社会変動』有信堂高文社
- 陸学芸, 2002『当代中国社会階層研究報告』社会科学文献出版社
- 劉精明・Wenger, G.Clare, 1998「北京老年人社会支持网調査」『社会学研究』2:56-66
- 劉軍, 2006『法村社会支持网络：一个整体研究視角』社会科学文献出版社
- 罗家德, 2008「社会网络和社会資本」李培林, 李強, 馬戎編, 2008『社会学与中国社会』社会科学文献出版社, 258-290
- 松本康, 1995「現代都市の変容とコミュニティ, ネットワーク」松本康編『増殖するネットワーク』勁草書房, 1-90
- 菱田雅晴, 2000「現代中国の社会変動をどう捉えるか」『現代中国の構造変動 5：社会—国家との共棲関係』3-15
- 永野武編, 2010『チャイニーズネスとトランスナショナルアイデンティティ』明石書店
- 野沢慎司編, 2006『リーディングスネットワーク論：家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房
- 落合恵美子・山根真理・宮坂靖子編, 2007『アジアの家族とジェンダー』勁草書房
- 奥田道大・田嶋淳子, 1995『新版・池袋のアジア系外国人：回路を閉じた日本型都市でなく』明石書店

- 尾崎正峰, 2005「スポーツ, 移民, エスニシティ: オーストラリアの研究動向から」『一橋大学スポーツ研究』24:57-62.
- Putnam et al.,1993, *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton Univ Press (河田潤一訳, 2001『哲学する民主主義: 伝統と改革の市民構造』NTT 出版)
- Pieke,N.Frank and Xiang, Biao, 2007, “Legality and Labour: Chinese Migration, Neoliberalism and the State in the UK and China”, *University of Oxford BICC Working Paper Series* 5:35-43
- 单光蕓, 1994『偏離与吸納: 中国青年発展報告』遼寧人民出版社
- 首藤明和・落合恵美子・小林一穂, 2008『分枝する現代中国家族: 個人と家族の再編成』明石書房
- 田嶋淳子, 1998『世界都市東京のアジア系移住者』学文社
- , 2000『上海/甦る世界都市』時事通信社
- , 2005「日本社会における中国系移住者の生活と意識」社会安全研究財団『社会安全』58:20-28
- , 2006「グローバル化とエスニシティ: エスニック・コミュニティの形成」庄司博史・金美善編『国立民族学博物館調査報告 多民族日本のみせかた: 特別展「多みんぞくニホン」をめぐって』64:219-231
- , 2007「中国系移住者の移動と定着に関する社会学的研究: 中国・東北地方出身者を対象として」科学研究費基盤研究(課題番号 16530340)
- 高橋幸三郎・吉賀成子・朝倉和子, 2006「都市社会における相互支援ネットワーク形成過程研究の動向」『東京家政学院大学紀要』46:107-118
- 高木修, 2006「社会的絆の光と影: 人間関係における「絆」とその役割とは」『セミナー年報2006』関西大学経済・政治研究所, 209-223
- 上原麻子, 2009「日中高等教育機関に学ぶ中国人学生の友人観」『高等教育研究開発センター大学論集』広島大学, 40:233-250.
- 若林直樹, 2003「社会ネットワークと組織間での信頼性: 『埋め込み』アプローチによる済社会学的考察」『社会学評論』54(2):74-159
- 王鳳, 2011「90年代以降の社会意識の変化に関する言説の一考察: 「正しさ」の論理と「できる」論理の狭間に」『北東アジア研究』20:81-107
- 王維, 2001『日本華僑における伝統の再編とエスニシティ—祭祀と芸能を中心に』風響社
- , 2006「新移民に見られる“弱い紐帯”のネットワークの活用」『香川大学経済論叢』79(3):451-475.
- 王怡・今川民雄, 2007「日中大学生の交友関係に関する比較研究(2): 自由記述に基づく検討」『日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集』16:128-129.

- Wellman, Barry., 1979, “The Community Question: The Intimate Networks of East Yorkers” *American Journal of Sociology*, 84:1201-31 (野沢慎司・立山徳子訳「コミュニティ問題：イースト・ヨーク住民の親密なネットワーク」(野沢編 2006) 所収)
- 山本須美子, 2010「フランスの中等教育における中国系新移民受け入れの現状」『東洋大学社会学部紀要』48-1:11-30
- 山下清海, 2000『チャイナタウン：世界に広がる華人ネットワーク』山川出版社  
——, 2005『華人社会がわかる本：中国から世界へ広がるネットワークの歴史, 社会, 文化』明石書店  
——, 2009「増加する華人ニューカマーズの中国における送付プロセスの解明」科学研究費基盤研究 B (課題番号 18401035)
- 安田雪, 2001『実践ネットワーク分析：関係を解く理論と技法』新曜社
- 五十嵐恵, 2011「日本における中国人労働者をめぐる諸問題：技能実習生の就労, 留学生の就職・起業」『世界中の中国：総合調査報告書』国立国会図書館, 199-214.
- 殷燕軍, 2005「在日中国人のアイデンティティに関する一考察：新華僑のメディアを中心に」『自然人間社会』(38):17-36.
- 張宏明, 2004「宗教的再思考：一种人类学的比較視野」『社会学研究』4:23-31
- 張文宏, 阮丹青, 1999a「天津農村居民的社会网」『社会学研究』2:108-118  
——, 1999b「城乡居民的社会支持网」『社会学研究』3:14-26
- 張文宏, 2006『中国城市的階層結構与社会网络』上海人民出版社  
——, 2008「社会转型過程中的社会网络資本的变迁」『社会』上海大学出版, 28(3):73-80
- Zhang, Wenhong and Danching Ruan, 2001 “Social Support Networks in China: an Urban-Rural Comparison.” *Sociology Sciences in China* 2:20-36
- 張玉玲, 2005「日本華僑による文化提示とエスニック・アイデンティティの主張：神戸華僑歴史博物館の考察を中心に」『国際開発研究フォーラム』29:58-72
- 趙延東, 2002「再就業中的社会資本：效用与局限」『社会学研究』4:43-54
- 趙延東・罗家德, 2005「如何測量社会資本一个經驗研究綜述」『国外社会科学』2:101-120
- 趙方杜・夏麗, 2009「青年農民工的社会支持网与職業获得」『中国青年研究』4:81-86
- 中国人民大学中国調查データセンター, 2009『中国綜合社会調查報告 (2003-2008)』中国社会出版社
- 周大鳴, 2007「技術与社会网络資本：关于中国農村婦女社会网络資本的研究視角」『湖北民族学院学报 (哲学社会科学版)』6:32-36
- 周晓虹, 1998「流动与城市体验对中国農民現代性的影響：北京“浙江村”与温州一个農村社区的考察」『社会学研究』5:58-70
- 朱慧玲, 1999『華僑社会の変貌とその将来』日本僑報社  
——, 2003『日本華僑華人社会の変遷：日中国交正常化以後を中心に』日本僑報社

### 【参 考 URL】

- ALA 中国 (2011 年 9 月 14 日取得, <http://www.alachugoku.com/>) .
- 法務省入国管理局, 2010「外国人登録統計」 (2011 年 5 月 1 日取得, [http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei\\_ichiran\\_touroku.html](http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html)) .
- 清水裕幸, 2004「在日ブラジル人社会をめぐる諸問題とその取り組み」『ブラジル特報』 2004 年 9 月号, (2011 年 11 月取得,<http://www.nipo-brasil.org/kaihou2004.html>) .
- 新華網, 2012「中国富裕層購買力 2020 年, 日本の消費総額に匹敵」 (2012 年 11 月 18 日取得, [http://jp.xinhuanet.com/2012-11/16/c\\_131978973.htm](http://jp.xinhuanet.com/2012-11/16/c_131978973.htm))
- 中国人民網日本語版「在日華人華僑, 豊かな生活を始める」 (2011 年 8 月 24 日取得, <http://j.people.com.cn/94475/7578767.html>) .
- 中国人民大学, 2010「中国综合社会调查 (CGSS) 第二期 (2010-2019) 抽样方案」(2012 年 2 月 10 日取得 <http://www.sociology2010.cass.cn/upload/2011/11/d20111116100549484.pdf>)

## 資料1 瀋陽における趣味ネットワークに関するアンケート（中国語）

### 中国社会爱好网络的调查研究

2011年6月

先生/女士：您好！

我们正在进行一项社会调查，目的是为了解民众的业余文化生活情况，以及对关于爱好网络社会问题的看法。经过科学抽样，我们选中了您作为调查对象。您的合作对我们了解有关信息和制定社会政策，有十分重要的意义。问卷中问题的回答，没有对错之分，您只要根据平时的想法和做法回答就可以。希望您协助我们完成这次访问，感谢您的合作。

（注明：本调查问卷的问题大多是选择题形式。在您所选择的选项数字上画√或者画○）

#### A部分 个人基本情况

1. 请选择您的性别：(单选)      1 男                      2 女
  
2. 请填写您的出生年月：（      年      月      日） 满（      岁）
  
3. 您的户口状况是：(单选)  
1 省会城市      2 直辖市      3 地级市      4 县级市      5 农村/乡镇
  
4. 您的民族是：(单选)  
1 汉    2 蒙    3 满    4 回    5 藏    6 壮    7 维    8 其他(请注明：      )
  
5. 您的婚姻状况是：(单选)  
1 未婚      2 已婚      3 离婚      4 死别      5 其他(请注明：      )
  
6. 您目前的最高教育程度是(包括目前正在读的)：(单选)  
1 没有受过任何教育    2 扫盲班    3 小学    4 初中    5 职业高中    6 普通高中  
7 中专    8 技校    9 大学专科（成人高等教育）    10 大学专科（正规高等教育）  
11 大学本科（成人高等教育）    12 大学本科（正规高等教育）  
13 研究生及以上    14 其他(请注明：      )
  
7. 从上小学开始算起，您一共受过多少年的学校教育呢？（      ）年

8. 您目前的政治面貌是：（单选）

- 1 共产党员 2 民主党派 3 共青团员 4 群众 5 其他（请注明：\_\_\_\_\_）

9. 您的宗教信仰是：（单选）

- 1 佛教 2 道教 3 民间信仰 4 回教/伊斯兰教 5 天主教 6 基督教  
7 无宗教信仰 8 其他（请注明：\_\_\_\_\_）

10. 那您目前的状况是什么？（单选）

a. 有工作

- 1 正在工作中 2 休长假中 3 自己经营 4 其他（请注明：\_\_\_\_\_）

b. 没有工作（跳问到16）

- 1 正在上学、参军/服兵役 2 从未工作过，正在找工作(待业)  
3 从未工作过，也没有找工作 4 失去工作后正在找工作  
5 失去工作后也没有找工作 6 离休/退休 7 在家料理家务  
8 残疾或身体状况不佳(丧失劳动能力) 9 其他（请注明：\_\_\_\_\_）

11. 下列各种情形，哪一种更符合您目前工作状况？（单选）

- 1 受雇于他人（有固定雇主的受雇者） 2 零工、散工（无固定雇主的受雇者）  
3 在自己家的企业中工作/帮忙，不领工资 4 在自己家的企业中工作/帮忙，领取工资  
5 自己一个人工作，没有雇佣其他人 6 自己是老板，雇有雇员  
7 其他（请注明：\_\_\_\_\_）

12. 您目前从事什么类型的工作？（单选）

- 1 技术专业人员 2 管理部门 3 事务部门 4 销售部门  
5 生产/劳务部门 6 服务部门 7 保安部门 8 农业/林业部门  
9 其他（请注明：\_\_\_\_\_）

13. 如果加班的话，能否得到加班工资？（单选） 1 有 2 没有

14. 在工作中，您与下列各类人员打交道的频繁程度是：（每行单选）

	经常	有时	很少	从不
a. 顾客/服务对象	1	2	3	4
b. 客户/供应商	1	2	3	4
c. 各种来客	1	2	3	4

d. 上级领导	1	2	3	4
e. 下级同事	1	2	3	4
f. 平级同事	1	2	3	4
g. 上级部门/单位	1	2	3	4
h. 下级部门/单位	1	2	3	4
i. 其他单位	1	2	3	4

15. 下面了解一下您当前的个人收入情况:

2010 年, 您个人的全年总收入是多少元? (个人总收入指: 个人全年的全部所得, 包括工资、各种奖金、补贴、分红、股息、保险金、退休金、经营性纯收入、租金、利息、馈赠等) (请在横线上填写具体数字) (\_\_\_\_\_ )元

16. 请估计一下, 2010 年, 您全家全年的各种收入的总和是多少? (包括全家所有成员的全部工资、各种奖金、补贴、分红、股息、保险金、退休金、经营性纯收入、租金、利息、馈赠等) (请在横线上填写具体数字) (\_\_\_\_\_ )元

17. 请选择现在和您一同居住的人员? (多选)

- 1 一个人独居      2 配偶      3 您的子女      4 您的父亲      5 您的母亲  
 6 配偶者的父亲      7 配偶者的母亲      8 兄弟姐妹      9 您的孙辈  
 10 您的奶奶/外婆      11 您的爷爷/外公      12 您的男/女朋友 (或者未婚夫/妻)  
 13 朋友      14 其他 (请注明: \_\_\_\_\_)

18. 您现在住房的产权和租赁情况属于: (单选)

- 1 租住单位房      2 租住公房      3 租住私房      4 自有私房(继承与自建)  
 5 已购房(部分/有限/居住产权)      6 已购房(全部产权)      7 集体宿舍  
 8 在朋友、亲戚家借住      9 其它 (请说明\_\_\_\_\_)

## B 部分 社会意识和业余文化生活

19. 在您看来, 以下各因素对一个人获得事业成功的重要性如何? (每行单选)

影响事业成功的因素	具有决定性作用	非常重要	比较重要	不太重要	一点都不重要
1. 家境富裕	1	2	3	4	5
2. 父母教育程度高	1	2	3	4	5
3. 自己受过良好教育	1	2	3	4	5
4. 年龄	1	2	3	4	5

5. 天资与容貌	1	2	3	4	5
6. 性别	1	2	3	4	5
7. 出生在好地方	1	2	3	4	5
8. 个人的聪明才智	1	2	3	4	5
9. 有进取心/有事业心	1	2	3	4	5
10. 努力工作	1	2	3	4	5
11. 社会关系多	1	2	3	4	5
12. 认识有权的人	1	2	3	4	5
13. 政治表现	1	2	3	4	5
14. 命运	1	2	3	4	5

20. 在您看来，您本人的社会经济地位、家庭的社会经济地位属于上层、中上层、中层、中下层还是下层？（每列单选）

	您本人的社会经济地位	家庭的社会经济地位
上层	1	1
中上层	2	2
中层	3	3
中下层	4	4
下层	5	5

21. 有人说社会上的人至少可以划分为四个阶级，您认为您属于其中哪一个？（单选）

- 1 农民阶级      2 工人阶级      3 中产阶级      4 企业家阶级

22. 与三年前相比，您本人在下列各方面有什么变化？（每行单选）

	上升了	差不多	下降了	[不好说]
1. 收入状况	1	2	3	4
2. 资产	1	2	3	4
3. 职位	1	2	3	4
4. 工作条件	1	2	3	4
5. 社会经济地位	1	2	3	4
6. 家庭的经济状况	1	2	3	4

23. 在您看来，三年后您本人下列各方面的状况会发生什么变化？（每行单选）

	将会上升	差不多	将会下降	[不好说]
1. 收入状况	1	2	3	4



2. 资产	1	2	3	4
3. 职位	1	2	3	4
4. 工作条件	1	2	3	4
5. 社会经济地位	1	2	3	4
6. 家庭的经济状况	1	2	3	4

24. 随着经济和生活水平的提高，你是否想更加丰富您的业余文化生活？（单选）

1 是                      2 否

25. 您在闲暇时间，从事下列活动的频率是怎样的？（每行单选）

	几乎每天	一周几次	一周一一次	一月几次	一月一次	一年几次	从不
1. 看电视	1	2	3	4	5	6	7
2. 阅读报刊	1	2	3	4	5	6	7
3. 浏览互联网	1	2	3	4	5	6	7
4. 读文学、社会科学或科技类的书	1	2	3	4	5	6	7
5. 听音乐、歌剧	1	2	3	4	5	6	7
6. 健身或参加体育锻炼	1	2	3	4	5	6	7
7. 上网聊天、打游戏	1	2	3	4	5	6	7
8. 外出郊游/旅游	1	2	3	4	5	6	7
9. 打牌、打麻将	1	2	3	4	5	6	7
10. 去咖啡馆或酒吧	1	2	3	4	5	6	7
11. 坐茶馆	1	2	3	4	5	6	7
12. 外出就餐	1	2	3	4	5	6	7
13. 做家务	1	2	3	4	5	6	7
14. 处理工作上的事	1	2	3	4	5	6	7

26. 请问您现在是否参加了某个协会、社团、俱乐部或其他组织？（单选）

1 是                      2 否

27. 您参加的协会、社团、俱乐部或其他组织，大约有多少个？（        ）个

28. 您参加的协会、社团、俱乐部或其他组织是什么性质的？（多选）

- 1 生活/娱乐      2 群体/社区自我管理      3 国家/政治      4 经济/商业  
5 教育/科学/文化/研究      6 联谊/社交      7 其它（请说明\_\_\_\_\_）

29. 您主要参加的爱好俱乐部/协会/团体是：（单选）

- 1 毽球    2 羽毛球    3 乒乓球    4 篮球    5 网球    6 唱歌    7 舞蹈    8 其它（请说明\_\_\_\_\_）

30. 总的来说，对于以下各方面的生活状况，您是否觉得满意呢？（每行单选）

	非常满意	比较满意	不太满意	非常不满意
1. 家庭经济状况	1	2	3	4
2. 家庭关系	1	2	3	4
3. 人际关系	1	2	3	4
4. 个人健康状况	1	2	3	4
5. 住房状况	1	2	3	4
6. 所居住的社区	1	2	3	4
7. 工作	1	2	3	4
8. 总体而言，您对目前的生活状况是否满意	1	2	3	4

31. 总体而言，您对自己所过的生活的感觉是怎么样的呢？您感觉您的生活是：（单选）

- 1 非常不幸福      2 不幸福      3 一般      4 幸福      5 非常幸福

### C 部分 社会/爱好网络

32. 请您联想一下，在您的日常生活中，经常一起出门，生活上互相帮助，日常上联系沟通和有来往的人。

32-1 这样的人大约有多少人？（            ）人

32-2 在这些人里面，中国人有（            ）人？ 外国人有（            ）人？

32-3 你首先想到的前5个人对您来讲是什么样的关系？

第1人（    ）	第2人（    ）	第3人（    ）	第4人（    ）	第5人（    ）
选项：1. 丈夫或者妻子    2. 您的父母    3. 丈夫或妻子的父母    4. 您的子女    5. 您的兄弟姐妹    6. 其他亲戚    7. 邻居    8. 工作单位同事    9. 爱好俱乐部/协会/团体里的朋友    10. 在学校里认识的校友    11. 互联网上认识的网友    12. 其他的朋友或熟人				

32-4 请选择您和前5个人见面和交流的频度？

第1人 ( )	第2人 ( )	第3人 ( )	第4人 ( )	第5人 ( )
选项：1. 差不多每天      2. 每星期 3~5 次      3. 至少每星期 1 次      4. 每个月 2 次				
5. 每个月 1 次      6. 少于每个月 1 次				

32-5 请选择您认识这前5个人有多长时间？

第1人 ( )	第2人 ( )	第3人 ( )	第4人 ( )	第5人 ( )
选项：1. 1 年以内      2. 2~3 年      3. 4~5 年      4. 5~10 年      5. 10~15 年				
6. 15~20 年      7. 20 年以上				

32-6 请选择这前5个人的性别？

第1人 ( )	第2人 ( )	第3人 ( )	第4人 ( )	第5人 ( )
选项：1. 男性      2. 女性				

33. 请您联想一下当您在日常生活、工作中或者学习上有烦恼的时候，您会同什么样的人来商量和得到这些人的帮助。

33-1 这样的人大约有多少人？ ( ) 人

33-2 在这些人里面，中国人有 ( ) 人？ 外国人有 ( ) 人？

33-3 你首先想到的前5个人对您来讲是什么样的关系？

第1人 ( )	第2人 ( )	第3人 ( )	第4人 ( )	第5人 ( )
选项：1. 丈夫或者妻子      2. 您的父母      3. 丈夫或妻子的父母      4. 您的子女      5. 您的兄弟姐妹				
6. 其他亲戚      7. 邻居      8. 工作单位同事      9. 爱好俱乐部/协会/团体里的朋友				
10. 在学校里认识的校友      11. 互联网上认识的网友      12. 其他的朋友或熟人				

33-4 请选择您和前5人见面和交流的频度？

第1人 ( )	第2人 ( )	第3人 ( )	第4人 ( )	第5人 ( )
选项：1. 差不多每天      2. 每星期 3~5 次      3. 至少每星期 1 次      4. 每个月 2 次				
5. 每个月 1 次      6. 少于每个月 1 次				

33-5 请选择您认识这前5人有多长时间？

第1人 ( )	第2人 ( )	第3人 ( )	第4人 ( )	第5人 ( )
选项：1. 1 年以内      2. 2~3 年      3. 4~5 年      4. 5~10 年      5. 10~15 年				
6. 15~20 年      7. 20 年以上				

33-6 请选择这前5人的性别?

第1人( )	第2人( )	第3人( )	第4人( )	第5人( )
选项: 1. 男性      2. 女性				

34. 在今年春节期间,以各种方式与您互相拜年、交往的亲戚、朋友等大概有多少人?

1 亲戚( )人      2 朋友( )人      3 其他人( )人

34-1 在您的朋友中,有多少人是您在爱好俱乐部/协会/团体里的朋友?( )人

35. 您是通过什么样的方式来获得一些关于日常/社会生活中的信息?(多选)

1 亲戚    2 朋友    3 报纸/杂志/书籍    4 互联网    5 电视/收音机    6 专业信息服务部门  
7 爱好俱乐部/协会/团体    8 工作单位    9 其他的社会活动    10 其它(请说明  
\_\_\_\_\_)

36. 您用什么方式同爱好俱乐部、协会、团体等里的朋友联系的?(单选)

1 打电话    2 互联网    3 直接参加活动见面    4 其它(请说明\_\_\_\_\_)

37. 您参加爱好活动俱乐部/协会/团体有多长时间?(单选)

1 1~5个月    2 5个月~1年    3 1~2年    4 2~3年    5 3~5年    6 5年以上

38. 您是以什么方式参加的爱好俱乐部/协会/团体?(单选)

1 通过朋友的介绍      2 通过亲戚的介绍      3 通过互联网上查询  
4 自己发现之后参加      5 其它方式(请说明\_\_\_\_\_)

39. 您为什么要参加爱好俱乐部/协会/团体?(多选)

1 身体健康      2 多交朋友      3 获取一些信息      4 丰富业余文化生活  
5 其它(请说明\_\_\_\_\_)

40. 请选择参加爱好俱乐部/协会/团体对您来说的重要性?(单选)

1 非常重要      2 比较重要      3 不太重要      4 非常不重要      5 不好说

41. 自从您参加爱好俱乐部/协会/团体以来,生活的满足感发生了什么样的变化?(单选)

1 提高了      2 没有变化      3 降低了      4 不好说

42. 自从您参加爱好俱乐部/协会/团体以来,有没有提高您对生活、工作、学习上的积

极性? (单选)      1 提高了    2 没有变化    3 降低了    4 不好说

43. 自从您参加爱好俱乐部/协会/团体以来, 您的人际关系有没有改变? (单选)

1 人际关系扩大了    2 没有改变    3 人际关系变小了    4 不好说

44. 参加爱好俱乐部/协会/团体对您获取生活/社会上的信息有没有帮助? (单选)

1 有帮助      2 没有帮助      3 不好说

45. 对您来说爱好俱乐部/协会/团体里的朋友要比其他的朋友容易沟通、相处和交流吗?

(单选)

1 容易沟通、相处和交流    2 没有变化    3 不容易沟通、相处和交流    4 不好说

感谢所有支持这次调查的有关人员和每一位被访者! 谢谢你们的合作和理解!

## 資料2 瀋陽における趣味ネットワークに関するアンケート（日本語訳）

### I あなたご自身について伺います.

問1 性別をお答え下さい 1 男 2 女

問2 年齢をお答え下さい (満 歳)(6月現在)

問3 戸籍状況をお答え下さい

1 省会都市 2 直轄都市 3 地級都市 4 県級都市 5 農村

問4 民族をお答え下さい

1 漢 2 蒙 3 満 4 回 5 藏 6 壮 7 維 8 その他 ( )

問5 婚姻状況をお答え下さい

1 結婚していない 2 結婚している (配偶者外国人)  
3 結婚している (配偶者中国人) 4 その他 ( )

問6 最後に行った学校 (在学を含む)

1 学校に行ったことない 2 識字教室 3 小学校 4 中学校 5 専門高校  
6 普通高校 7 中等専門学校 8 技術学校 9 短期大学 (成人高等教育3年)  
10 短期大学 (正規高等教育) 11 大学 (成人高等教育4年) 12 大学 (正規高等教育)  
13 修士課程以上 14 その他 ( )

問7 教育を受ける年数 ( )年

問8 あなたは現在, 政治的な身分

1 共産党 2 民主党 3 共青团 4 大衆 5 そのほか ( )

問9 あなたの宗教信仰は?

1 佛教 2 道教 3 民間信仰 4 回教/イスラム  
5 カトリック 6 キリスト 7 無宗教 8 その他 ( )

問10 現在, あなたのステータスは?

[仕事している]

1 仕事をしている 2 休暇中 3 自営業 4 その他 ( )

〔仕事していない〕

- 1 学校に通っている/兵役中    2 仕事をしたことがない, 仕事を探している  
3 仕事をしたことがない, 仕事を探していない    4 仕事を失った, 仕事を探している    5 失業  
した後, 仕事を探していない    6 退職    7 家事  
8 障害者(労働力を持たない)    9 その他( )

(「仕事していない」と答える方が問 17 へお進みください)

問 12 仕事をしている方は, どちらにあたりますか?

- 1 固定雇用者を持つ従業員    2 アルバイト    3 実家の会社で働く(給料ない)  
4 実家の会社で働く(給料ある)    5 自営業(従業員いない)    6 自営業(従業員いる)    7 その他  
( )

問 13 どんな仕事ですか?

- 1 専門職    2 管理職    3 事務職    4 販売職    5 生産職/労務職    6 サービス職  
7 保安職    8 農林魚職    9 そのほか( )

問 14 あなたの仕事時間の手配状況はどちらですか?

- 1 固定的な勤務時間がなく, 仕事を応じて, 自分が配置する  
2 基本的には勤務時間固定し, 自由に配置することができる空間にある程度の柔軟性を持っている  
3 勤務時間が完全に固定され, あるいは, 上司によれば, 時間を操作される

問 15 残業した場合では, 有料残業ですか?

- 1 はい    2 いいえ (サービス残業)

問 16 職場では, あなたが以下の方と交流する頻度をお答え下さい

	よくする	時々する	あまりしない	まったくしない
クライアント	1	2	3	4
取引先・サプライヤー	1	2	3	4
すべての来客	1	2	3	4
上司	1	2	3	4
後輩の同僚	1	2	3	4
同僚	1	2	3	4
上級機関	1	2	3	4
下部機関	1	2	3	4
他の機関	1	2	3	4

問 17 あなたの一年間(2010年)収入(手取り)はいくらですか?  
( ) 元

問 18 一年間(2009年)家族全員の各種収入(手取り)全額はいくらですか?  
( ) 元

問 19 あなたが 18 歳のときに、実家にある本は何冊がある?  
1 ない    2 10 冊以下    3 10-20 冊    4 21-50 冊    5 51-100 冊  
6 101-500 冊    7 500 冊以上

問 20 あなたが現在同居している方すべて選択してください。  
1 ひとり暮らし    2 配偶者    3 あなたの子供    4 あなたの父    5 あなたの母  
6 配偶者の父    7 配偶者の母    8 兄弟(義理を含む)    9 あなたの孫  
10 あなたの祖母    11 あなたの祖父    12 恋人/婚約者    13 友達  
14 その他 ( )

問 21 現在のお住いの産権はどれにあたりますか?  
1 会社の住宅を賃貸    2 公的な住宅を賃貸    3 私的な住宅を賃貸  
4 私的な家を持つ    5 家を購入した((部分/有限/居住産権)  
6 家を購入した(全部産権)    7 寮    8 友達/親戚の家で泊まる  
9 その他 ( )

## II 社会意識や余暇生活

問 22 あなたに対して、社会的な成功になる要素がそれぞれの重要性を選択してください。  
1 決定的に重要    2 非常に重要    3 比較的に重要    4 あまり重要でない  
5 全然重要でない    6 分からない

22-1.家庭経済的な環境	1	2	3	4	5	6
22-2.親の教育程度	1	2	3	4	5	6
22-3. 自分自身の教育を受ける状況	1	2	3	4	5	6
22-4. 年齢	1	2	3	4	5	6
22-5. 外見	1	2	3	4	5	6
22-6. 性別	1	2	3	4	5	6
22-7.出身が良い	1	2	3	4	5	6
22-8.個人的な知恵や才能	1	2	3	4	5	6



22-9. 進取心・野望	1	2	3	4	5	6
22-10.仕事の努力	1	2	3	4	5	6
22-11.友人と付き合いが多い	1	2	3	4	5	6
22-12.権力を持つ人との知り合い	1	2	3	4	5	6
22-13.政治的な身分	1	2	3	4	5	6
22-14.運命	1	2	3	4	5	6

問 23 あなたの自分自身の社会経済的な地位，家庭の社会経済地位はどれに当たりますか？

	自分自身の社会経済的な地位	家庭の社会経済的な地位
上層	1	1
中上層	2	2
中層	3	3
中下層	4	4
下層	5	5
わからない	6	6

問 24 あなたは，以下の階級の中で，どちらと思いますか？

1 農民階級 2 労働者階級 3 中産階級 4 企業家階級

問 25 三年前と比べるとあなたご自身の以下の状況はどう変化しているのか？

	よくなった	変わらない	悪くなった	わからない
1 収入	1	2	3	4
2 資産	1	2	3	4
3 仕事の役割	1	2	3	4
4 職場の環境	1	2	3	4
5 社会経済的な地位	1	2	3	4

問 26 三年後には以下の状況はどう変化すると思いますか？

	よくなる	変わらない	悪くなる	わからない
1 収入	1	2	3	4
2 資産	1	2	3	4
3 仕事の役割	1	2	3	4
4 職場の環境	1	2	3	4
5 社会経済的な地位	1	2	3	4
6 家庭の経済状況	1	2	3	4

問 27 生活レベルの上昇につれに、もっと余暇生活を豊にしたいと思いますか？

- 1 はい 2 いいえ

問 28 あなたの余暇時間で、以下の活動を行う頻度は？

- 1 ほとんど毎日 2 一週間数回 3 一週間一回 4 月に数回 5 月に一回  
6 年に数回 7 していない

1. テレビを見る	1	2	3	4	5	6	7
2. 新聞／雑誌を読む	1	2	3	4	5	6	7
3. インタネットを利用する	1	2	3	4	5	6	7
4. 文学／社会学科学／技術などの本を読む	1	2	3	4	5	6	7
5. 音楽／オペラなど聞く	1	2	3	4	5	6	7
6. スポーツをする	1	2	3	4	5	6	7
7. インタネットチャットやゲームする	1	2	3	4	5	6	7
8. 旅行	1	2	3	4	5	6	7
9. 麻雀／トランプ	1	2	3	4	5	6	7
10. 喫茶店／バーに行く	1	2	3	4	5	6	7
11. 中国系茶道に行く	1	2	3	4	5	6	7
12. 外食行く	1	2	3	4	5	6	7
13. 家事する	1	2	3	4	5	6	7
14. 仕事の残業する	1	2	3	4	5	6	7

問 29 あなたが余暇生活の時間を利用して、ある協会／社会团体／クラブなどに参している？

- 1 はい 2 いいえ

問 30 あなたが参加している協会／社会团体／クラブはいくつがありますか？

( )

問 31 あなたが参加している協会／社会团体／クラブはどんなタイプですか？

- 1 生活／娯楽 2 グループ／社区で自己管理 3 国家／政治 4 経済／商業  
5 教育／科学／文化／研究 6 交流／社交 7 その他( )  
8 不該当 9 わからない 0 無回答

問 32 一般的に、次の生活状況の満足度を教えてください

	とても満足	満足	あまり満足じゃない	不満足
家族経済状況	1	2	3	4
家族関係	1	2	3	4
人脈関係	1	2	3	4
個人健康状況	1	2	3	4
住む状況	1	2	3	4
住んでいる社区状況	1	2	3	4
職業状況	1	2	3	4
全体的な生活状況	1	2	3	4

問 33 あなたは幸せに暮らしていますか？

1 とても幸福 2 幸福 3 普通 4 不幸福 5 とても不幸福

### Ⅲ 社会／趣味ネットワーク

問 34 あなたの生活において、一緒に出かけたり、お世話にしたりする、普段からおつきあいのある人を思い浮かべてください。

問 34-1 そのような方がおよそ何人がいますか？（ ）

問 34-2 その中、中国人（ ） 外国人（ ）

(思い浮かんだ順に 5 人までについて伺います。5 人未満の場合は、思い浮かぶ方々の人数分だけ、お答えください。)

問 34-3 それぞれの方は、あなたから見てどのようなご関係ですか？

1. 夫または妻
2. 自分の親
3. 夫または妻の親
4. 子供
5. 兄弟
6. その他の親戚
7. 近所の人
8. 職場や仕事関係の人
9. クラブやサークルの仲間
10. 学校時代に知り合った人
11. インタネット知り合った人
12. その他の友人・知人

1 人目（ ） 2 人目（ ） 3 人目（ ） 4 人目（ ） 5 人目（ ）

問 34-4 それぞれの方とあなたは、どのくらい頻度で会いますか？

1. ほとんど毎日
2. 週 3-5 回
3. 少なくとも週 1 回
4. 月に 2 回
5. 少なくとも月に 1 回
6. 月 1 回よりすくない

1 人目（ ） 2 人目（ ） 3 人目（ ） 4 人目（ ） 5 人目（ ）

問 34-5 それぞれの方はどちらにお住まいですか？

1. 同居している
2. 片道 30 分未満なところ
3. 片道 30 分～1 時間未満なところ
4. 片道で 1 時間～2 時間未満のところ
5. 片道で 2 時間以上のところ

1 人目 ( ) 2 人目 ( ) 3 人目 ( ) 4 人目 ( ) 5 人目 ( )

問 34-6 それぞれの方と知り合ってからどのくらいになりますか？

1. 1 年未満
2. 2～3 年未満
3. 4～5 年未満
4. 5～10 年未満
5. 10～15 年未満
6. 15～20 年未満
7. 20 年以上

1 人目 ( ) 2 人目 ( ) 3 人目 ( ) 4 人目 ( ) 5 人目 ( )

問 34-7 それぞれの性別をお答え下さい

1. 男性
2. 女性

1 人目 ( ) 2 人目 ( ) 3 人目 ( ) 4 人目 ( ) 5 人目 ( )

問 35 日常生活／仕事／勉強などに個人的な悩みを相談したり，何かと助けになってくれる人は何人いますか？ ( )

問 35-1 そのような方がおよそ何人がいますか？ ( )

問 35-2 その中，中国人 ( ) 外国人 ( )

(思い浮かんだ順に 5 人までについて伺います。5 人未満の場合は，思い浮かぶ方々の人数分だけ，お答えください。)

問 35-3 それぞれの方は，あなたから見てどのようなご関係ですか？

1. 夫または妻
2. 自分の親
3. 夫または妻の親
4. 子供
5. 兄弟
6. その他の親戚
7. 近所の人
8. 職場や仕事関係の人
9. クラブやサークルの仲間
10. 学校時代に知り合った人
11. インタネットで知り合った人
12. その他の友人・知人

1 人目 ( ) 2 人目 ( ) 3 人目 ( ) 4 人目 ( ) 5 人目 ( )

問 35-4 それぞれの方とあなたは、どのくらい頻度で会いますか？

1. ほとんど毎日 2. 週 3-5 回 3. 少なくとも週 1 回 4. 月に 2 回 5. 少なくとも月に 1 回 6. 月 1 回よりすくない

1 人目 ( ) 2 人目 ( ) 3 人目 ( ) 4 人目 ( ) 5 人目 ( )

問 35-5 それぞれの方はどちらにお住まいですか？

1. 同居している 2. 片道 30 分未満なところ 3. 片道 30 分～1 時間未満なところ 4. 片道で 1 時間～2 時間未満のところ 5. 片道で 2 時間以上のところ

1 人目 ( ) 2 人目 ( ) 3 人目 ( ) 4 人目 ( ) 5 人目 ( )

問 35-6 それぞれの方と知り合ってからどのくらいになりますか？

1. 1 年未満 2. 2～3 年未満 3. 4～5 年未満 4. 5～10 年未満 5. 10～15 年未満 6. 15～20 年未満 7. 20 年以上

1 人目 ( ) 2 人目 ( ) 3 人目 ( ) 4 人目 ( ) 5 人目 ( )

問 35-7 それぞれの性別をお答え下さい

1. 男性 2. 女性

1 人目 ( ) 2 人目 ( ) 3 人目 ( ) 4 人目 ( ) 5 人目 ( )

問 36 今年の春節期間、各方法でお互いに拜年する人はどれくらいですか？

1 親戚( ) 2 友人( ) 3 その他 ( )

問 36-1 友人の中で、クラブやサークルで知り合った友人が何人ですか？ ( )

問 37 日常生活／社会生活などに関する情報をどういうふうに手にいれていますか？

- 1 親戚 2 友人 3 新聞／雑誌／書籍 4 インタネット 5 テレビ／ラジオ  
6 専門の情報提供サービス期間 7 趣味ネットワーク 8 職場 9 他の社会活動の参加  
10 その他 ( )

問 38 趣味の友人とどのように連絡をとっていますか？

- 1 電話 2 インタネット 3 直接クラブで 4 その他 ( )

問 39 趣味クラブに参加した期間はどれくらいですか？

1.1～5 ヶ月 2.5 ヶ月～1 年 3.1～2 年 4. 2～3 年 5.3～5 年 6.5 年以上

問 40 趣味クラブにどんな方法で参加していたのか？

1 友人の紹介 2 家族の紹介 3 インタネット 4 自分が探した 5 その他 ( )

問 41 趣味クラブに参加する目的はなんですか？

1 健康のため 2 交友のため 3 情報を入れるため 4 余暇生活を豊にするため  
5 その他 ( )

問 42 趣味ネットワークはあなたに対する重要性を教えてください。

1 非常に重要 2 重要 3 あまり重要でない 4.重要でない 5. わからない

問 43 趣味クラブに参加して以来、生活に関する満足度はどう変化しているのか？

1 高くなった 2 変わらない 3 低くなった 4 わからない

問 44 趣味クラブに参加して以来、仕事・学校、あるいは、日常生活上に対する積極性が高まっていますか？

1 積極的になった 2 変わらない 3 ダウンになった 4 わからない

問 45 趣味クラブに参加して以来、自己的人脈関係の幅は広がったと思いますか？

1 広がった 2 変わらない 3 狭くなった 4 わからない

問 46 趣味クラブに参加するのは、あなたの社会生活に関する情報を得るのに役にたつと思いますか？

1 役に立つ 2 役に立たない 3 わからない

問 45 趣味クラブで知り合う友人は他の友人より付き合いやすいと思いますか？

1 付き合いやすい 2 変わらない 3 付き合いにくい 4 わからない

2011 年 6 月

### 資料3 大阪のサッカークラブへの質問紙調査

(それぞれの質問には選んだ回答項目を○囲んでください)

■あなたご自身について伺います。

問1 国籍 ( ) 出身都市 ( )

問2 年齢 (満 歳) (3月31日現在)

問3 性別 ( )

1 男性 2 女性

問4 在留資格

1 留学 2 就学 3 技術 4 人文知識・国際業務 5 短期滞在 6 家族滞在 7 研修生

8 技能 9 投資・経営 10 企業内転勤 11 日本人配偶者 12 永住者の配偶者 13 永住者

14 定住者 15 その他 ( )

問5 結婚状況

1 結婚していない 2 結婚している (配偶者日本人)

3 結婚している (配偶者中国人) 4 その他 ( )

問6 母国での最後に行った学校

1 中学 2 高校 3 短大・専門学校 (成人教育) 4 大学 5 大学院以上

6 その他 ( )

6-1 日本での最後に行った学校

1 中学 2 高校 3 短大・専門学校 (成人教育) 4 大学 5 大学院以上

6 その他 ( )

問7 あなたが日本に来た最も大きいな動機あるいは目的はなんでしたか? (1つに○をつけてください)

1 日本語を勉強したい 2 専門的な勉強したい 3 学歴を高めたい 4 日本で仕事したい  
5 日本に興味を持ち行ってみたい 6 留学したい

7 外国に行きたかった 8 お金を稼ぐため 9 人生を変えたかった 10 家族が日本にいた  
11 結婚のため

12 その他 ( )

■あなたの来日以後の状況について伺います。

問8 現在日本でどちらにお住いですか?

( ) 市 ( ) 区 (町・村)

問9 あなたが現在同居している方すべて○をつけてください。

1 いない (一人暮らし) 2 配偶者 (夫また妻) 3 あなたの子供 4 あなたの父

5 あなたの母 6 配偶者 (夫また妻) の父 7 配偶者 (夫また妻) の母

8 きょうだい (義理を含む) 9 あなたの祖父 10 あなたの祖母

11 恋人・婚約者 12 友達 13 その他 ( )

問 10 現在のお住いはどれにあたりますか？

- 1 一戸建て持ち家 2 一戸建て借家 3 分譲マンション 4 民間の賃貸マンション  
5 県営・市営住宅 6 社宅・官舎・寮 7 アパート 8 その他 ( )

問 11 あなたが在日年数 ( ) 年 ( ) ヶ月

問 12 今の住居はどの方法で探しましたか？

- 1 自分で不動産で探した 2 学校の紹介 (寮など) 3 友人から紹介 4 友人住んでい  
るところに同居 5 家族が住んでいるところに同居  
6 日本人知り合いの紹介 7 会社の寮・アルバイト先の借り  
8 その他 ( )

問 13-1 (働いている方が回答してください)

仕事されているのはどのような立場ですか？

- 1 自営業 2 会社経営者・役員  
3 会社員や公務員などフルタイムのサラリーマン 4 派遣・契約社員 5 アルバイト・  
パート 6 その他 ( )

13-2 どんな仕事ですか？

- 1 専門職 2 管理職 3 事務職 4 販売職  
5 生産工程・労務職 6 サービス職 7 保安職  
8 農林魚業従事者 9 その他 ( )

13-3 仕事上で何か悩みがありますか？あれば、詳しく書いてください。

■あなたが普段つきあったり、助けられたりしている人についてお伺います。

問 14 あなたの生活において、[一緒に出かけたり、お世話したりする、普段からおつきあいのある人]  
を思い浮かべてください。

14-1 何人くらいいますか？ ( ) 人

その中で日本人 ( ) 人

中国人 ( ) 人

外国人 ( ) 人

14-2 その人達とどのような方法で知り合ったですか？

- 1 サッカークラブ 2 仕事場 3 学校 4 友人の紹介 5 家族の知り合い  
6 中国にいた時の友人 7 その他 ( )

14-3 その中で一番よく付き合う人とはどのくらいの頻度で会いますか？

- 1 ほとんど毎日 2 少なくとも週一回  
3 少なくとも月一回 4 月一回よりも少ない



問 15 生活・仕事などに個人的な悩みを相談したり、何かと助けになってくれる人は何人くらいいますか？（ ）人

その中で日本人（ ）人

中国人（ ）人

外国人（ ）人

15-2 その人達とどのような方法で知り合ったですか？

1 サッカークラブ 2 職場 3 学校 4 友人の紹介 5 家族の知り合い

6 中国にいた時の友人 7 その他（ ）

15-3 その中で一番よく付き合う人とはどのくらいの頻度で会いますか？

1 ほとんど毎日 2 少なくとも週一回

3 少なくとも月一回 4 月一回よりも少ない

問 16 日本で生活するための情報は、どのような方法で入手していますか？

(三つまで○をつけてください)

1 日本人の友人 2 中国人の友人 3 その他の国友人

4 日本の新聞・雑誌・書籍 5 インターネット

6 テレビ・ラジオ 7 専門の情報提供サービス機関

8 サッカークラブで 9 家族 10 職場

11 中国にいる友人や家族 12 その他（ ）

問 17 友人とどのような方法で連絡しますか？(主な1つを○つけてください)

1 電話 2 手紙 3 インタネット 4 サッカークラブなど直接会う 5 その他（ ）

問 18 年間の収入はどれくらいですか？(税込み)

なし 100万円未満 100～200万円未満

200～300万未満 300～400万未満 400～500万未満

500～600万未満 600～800万未満 800～1000万未満

1000～1500万未満 1500万以上

問 19 生活上でどのような悩みがありますか？困っていることがあれば書いてください。

--